

る頂くのなり、さあ賜はれと手を重ねれば、令嬢は微笑みながら、厭、厭、お約束は
 書なるに歌にては厭よ、ごむ人形は上げまじと頭をふるに、それでも姉様この歌は極
 大切のにて、人にも見せず落さぬやうに御覽に入れろと吾助の言ひしは、書よりも良
 きに相違はなし、是非人形を賜はれとて手渡しするに、何心なく披きて一二行よむと
 せしが、物言はず盡みて手文庫に納むれば、其顔を不審げに仰ぎて、姉様人形は下さ
 るか、進げまするとわづかに點頭く令嬢、甚之助は嬉しく立あがつて、勝つた勝つた。

(四)

此思ひ通じさへせば此心安かるべしと願ふは淺し、入立つまゝに慾はまさりて、は
 てなきものは戀なりとかや、敏はじめでの艶書に心をいたためて、若し落ち散りもせば
 罪は我れのみならず、知らじとて令嬢も赦されまじ、さらでもの繼母御前如何にたけ
 りて、どのやうの事にまで立いたるべきか、思へば我が思慮あさはかにて、甚之助殿
 に頼みしは萬々の不覺なりし、とも思ひ又自ら觸ましては、何の譯もなきこと、大英
 断の庭男とさへなりし我、此上の出来ごと覺悟の前なり、只あやふきは令嬢が心にて、
 首尾よく文は届きたりとも、つれなく返されなば甲斐もなきこと、兎角に甚之助殿の

便り聞きたしと待けるが、其日の夕方彼の人形を持ちて何日よりも嬉しげに、お前の
 歌ゆる首尾よく我が勝になり、此様な人形を取りしと誇り顔に来て見すれば、姉様は
 彼の歌を御覽なされしや、して何と仰しやりしと問へば、何とも言はずに文庫に入れ
 てお仕舞なされしが、今度も又あのやうな歌を詠みて、姉様の御覽に入れよかし、お
 前が褒められなば我れとても嬉しきものと可愛く言ふに、思ひある身一層たのもし
 く様々に機嫌を取りて、姉様も定めし歌はお上手ならん、是非吾助も拜見が仕けれ
 ば、此頃姉様にお願ひなされ、お書き捨てを頂きて給はれ、必らず、屹度と返事の
 通路を此處にをしへ、一日を待ち二日待ち、三日になりても音沙汰の無きに敏こゝ
 ろ悶へ、甚之助を見るごとにそれとなく促せば、僕も貰つて遣りたけれど姉様が下さ
 らねばと、あはれ板ばさみになりて困り入りし體、子心にも義理に引かれてか中に立
 ちてうろくするを、敏いろく頼みて此度は封じ文に、あらん限りの言葉を如何
 に書きけん、文章の艶麗は評判の男なりしが。

見る目に見なば美男とも言ふべきにや、鼻筋とほり眼もと鈍からず、豊頬の柔和顔
 なる敏、流石に學問のつけたる品位は、庭男になりても身を離れず、吾助々々と勝手

元もとに茲かしましき評判ひやうはんは、お茶ちやの間まを越こして大奥おほおくにも高たかく、お約束やくそくの登君のぼりきみ洋行やうかう中ちゆうにて、寐覺ねぎやうを寫真しやうしんに物ものがたる總領そうりゆうの令嬢れいぢやうさへ、垣根かきねの櫻折さくらをれかし吾助ごすけ、いさゝかの用事ようじにて大層たいせうらしく、御褒美ごほうびに賜たまはる菓子かしの花紅葉はなこうは、お手づからなる名譽なごよはあれど、戀こひに本尊ほんぞんあれば脇わきだちに觸ふれる眼めなく、一心いんおもひ込みては有あり昔むかしの敏さとしならで、可惜あたら廿四にじゅうよの勉強べんきやうさかりを此牀このとこたらく残念ざんねんとも思おもはねばこそ、甚じん之助のすけに追從ついでしあるきて、本心ほんしんには成なまじき文ふみの趣向しゆうかう、案外あんぐわいのことにて拍子つしよく行き、文庫ぶんこに納め給たまひしとはもう我がものと、一度いちどは勇みけるが、それより後の幾度幾通いくどいくつうかき送りし文ふみに一度いちどの返事へんじもなく、さりとてつれなくは投なげかへしもせねど、ひらきて讀よみしや否いなや甚じん之助のすけが答こたへぶりの果敢はがなさ
に、此度このたびこそと書かきたるは、長ながき尋ひろにあまり思おもひ筆ふでにあふれて、我われながら斯かくまでも迷まふものかと、文ふみを投なげ出して嘆息たんそくしけるが、甚じん之助のすけに向むかひては猶なほさら悲かなしげに、姉様ねえさまはあくまで吾助ごすけを憎にくみて、あれほど御覽ごらんに入れし歌うたに一度いちどのお返歌へんかもなく、あまつさへ貴君あなたにまで、この様ようの取次とりぎするなとさへ仰おつしやりし無情むじやうさ、これ程ほどの耻はぢを見て我われ男をとこの身みの、おめくお邸やしきに居ゐられねば暇いとまを賜たまはりて歸國きこくすべけれど、聞き給たまへ我われ田舎いなかには兩親りやうしんもなく、只一人ただひとりありし妹いもうとの我われと非常ひじやうに中なかよかりしが、今は亡なせて何もな

き身み、その妹いもうとが姉様ねえさまにそつくりにて、今いまも在あらばと戀こひしき堪たへがたく、お前様まへさまに姉様ねえさまなれば我われには妹いもうとのやうに思おもはれて、其そのお書き捨すての反古ほんこにても身みに添そへて持もたば本望ほんぼうなるべく、切せめて一筆いっぴつの拜見はいけんが願ねがひたきなり、されども斯かく下賤げせんの我われ、いかやうに思おもふとも及およびなき事ことにて、無禮ぶれいものとお叱しかりを受ければそれまで、なれどもお厭いやならばお厭いやにて、寧なほ、斷然だつぜん、目通めとほりも厭いやなれば疾とく此處こゝを去いねかし、とでもありて、いよいよ成なるまじき事ことと知らば其上そのうへに覺悟かくごもあり、斯かくまでの思おもひ何なんとしても消きゆる筈はずなけれど、覺悟かくご次第しだいに斷念だつねんもつくべし、今一度いまいちど此文こゝれを進あげて、明あらかのお答こたへ聞いて給たまはれ、それ次第しだいにて若様わかさまにもお別わかれになるべければと虚實きよじつをませで、子心こころにあはれと聞きくやう頼たのみければ、甚じん之助のすけもとより吾助ごすけ最負さいひにて、此男このをとこのこと一ひとも十じゅうも成就じやうじゆさせたく、喜よろこぶ顔見かほみたさの一心いんに、これまでの文ふみの幾通いくつうも人目ひとめに觸ふれぬやう滞とどりなく届け、令嬢れいぢやうの心こころも知らず返事へんじをと責せめしが、此迫このせまりたる詞ことばに我われまづ悲かなしく、今日けふこそは必かならず返事へんじを取り、其方そのちの喜よろこぶやうにすれば、田舎いなかへ行くことは廢やめになし、何時いつまでも此處こゝに居ゐて呉くれよ、突然だつぜんに田舎いなかへ行いきては厭いやぞと泣なき、其涙そのなみだを敏さとしに拭ぬはれて猶なほかなしく、手てにすがりて何時いつまでも泣なきしが、三歳さんさい兒この魂たまいつはりにはあらで、此この

と心魂にしみて悲しければこそ、其夜閑燈のもとに令嬢を拜みて、吾助は斯く思ひて斯く言ふを、後生、姉様返事を賜はれ、決して此後我まも言はず悪戯もなすまじければ、吾助の田舎へ歸らぬやう、今まで通り一處に遊ばれるやう返事を賜はれ、只一寸で宜し吾助は一筆にてもと言ひたれば、此巻紙へ何か書て僕に賜はれ、吾助は田舎へ歸りても行く處の無き身なれば、大方は乞食に成るべきにや、それでは僕どうしても厭なり、是非此文を御覽なされて、一寸何とか言ふて下され、よう姉様、よう姉様、お願い、此れとて、紅葉の手を合はすいぢらしさ、情ふかき女性の身の、此事のみにても涙の價値はたしかなるに、よし山賤にせよ庭男にせよ、我れを戀ふ人世に憎かるべきか、令嬢の情緒いかに縫れけん、甚之助母君のもとに呼ばれ、此返事を聞く間なく、残り惜しげに出行たるおとにて、玉の腕に此文を抱き、胸に當て、夜もすがら泣きけり。

(五)

二十の春を夢と暮らして、落花の夕に何ごとを思ひつきてか、令嬢は別荘住居したき願ひ、鎌倉の何處とやらに、眺望を選んで去年買はれしが、話しのみにて未だ見ぬ

もゆかしく、離亭の洒落たるがありて、名物の松がありてと父君の自慢にすがり、私年来我儘に暮して、此上のお願ひは申がたけれど、とても世を其處に送らしては給はらぬか、甚之助様成長ならば、遣はさるべきお約束とや、それまでのお留守居、又は父様折ふしのお出遊に、人任せならずは御不自由も少かるべく、何卒其處に住まはせて、世を白波に浦風おもしろく、梅の花貝でも拾はせて給はれとの願ひ、ふびんや如何様な仔細あればとて、月花をかき盛り歳の、千人萬人すぐれし美色を、鏡は無きか知らぬかのやうな身の上、他人ごとにして嬉しとは聞かれぬを、親といふ名のまして如何ならん、さりとては隠居様じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこと、なまなか都に置きて同胞どもが、浮世めかすを見するもつらし、何ごとも望みに任せて、住みたしとならば彼地に住ませ、好きな琴でも松風に弾き合はし、氣儘に暮させるが切めてもと、父君此處にお許しの出でければ、あまりとても可愛想のこと、よし其身の願ひとあやうな遠くに、路はそれほどでなれど行きりにては我れも心配なり子供たちも淋しかるべく、甚之助は其うちにも慕ひて、中姉様ならは夜の明けぬに、朝夕の駄々いかにまさりて、姉たちの難儀が見ゆるやうなれば、今しばらく止ま

りてと、母君は物やはらかに宣ひたれど、お許しの出でしに甲斐なく、夫々に支度して老實の侍女を選み、出立は何日々々と内々に取きめけるを、甚之助かぎりなく口惜しがり、先づ父君に歎き母君を責め、長幼の令嬢に當りあるきて、中姉様を宥め出すこと、恨み、僕をも俱にやれと迫り、令嬢に向へば譯もなく甘へて、取りつきしまゝ泣きて離れず、姉様何ごとを腹だちて鎌倉なぞへお出なさるぞ、それも一月や半月ならばよけれど、お歸郎は何時とも知れずと皆が言ひたり、どの様に仰しやるともそれは嘘にて、鎌倉へ行かばお歸りのなきに極まりたれば、残りて淋しがらんより我れも俱にゆき、我れも此郎に歸るまじ、父様もいや母様もいや、誰れを捨て、も諸共に行かんとはかり、令嬢は静かに諭して、其身もほろりとし、可愛き事いふて泣かし給ふな、鎌倉へて行き歸らぬとは誰れが言ひしか、それこそは嘘にて、つひ一寸あそびに行き、其うちに歸つて來まする程に、おとなしう待ちて給はれ、よし歸らずとて彼地はお前様のお郎ゆる、成長なり給ふまでのお留守居、今もお連れ申たけれどそれこそ淋しく、直ぐ厭になりて母様こひしかるべし、何も柔順しう成長なり給へと、詫るやうに慰められて、それでもとわんぱくも言へず、しく／＼泣きに常の元氣なくなりて、

悄然とせし姿いぢらし。

令嬢が鎌倉ごもりの噂、聞く胸とゞろきて敏しは呆れしが、猶甚之助に委しく問へば、相違なき物語半は泣きながらにて、何卒お廢めになるやうな工風は無きかと頼まれて、扱も何とせん、組む腕の思案にも能はず、萎れかへる甚之助が人目に遠慮なきを羨みて、心空になれど土を掃く身に箒木の面倒さ、此身になりしも誰れ故かは、つれなき令嬢が振舞其理由も探れず、此處に捨てられて取残されん我、いでや出立前の一目をと心に願ひしが、空しく影も見ずに明日の早朝と恨めしき便り、今は何も捨て、一日病氣と臥しけるが、戀に亂るゝ心あはれ悲しくも、令嬢が部屋の一板を隔てに、今宵かぎりの名残を惜まんとて、心も空も宵闇の春の夜、落花の庭に踏む足の音なきこそよけれ、切めては夢に入れかすと忍びぬ。

更けて軒ばに風鈴のおと淋しや、明日は此音いかに戀しく、此軒ばのこと部屋のこと、取分けては、甚様のこと、父君のこと母君のこと、平常は左までならぬ姉妹のこと、戀しがるべきものをと今も戀しく、寐ぬ夜の床に物おもふ令嬢、甚之助の暫時も傍はなれず、今宵も此家に寐んと言ひしを、明日の朝の邪魔なればと母君遠慮して、連れ

行かれしあとの猶さら淋しく、思へば明日よりの閑居いかならん、甚様はしばしこそ我れを慕ひて泣きもし給はめ、程程なば自づと忘れて、姉様たちに馴れ給はんは必定、我れは紛るゝこと無き身の戀しさ日毎に増さりて、あの笑顔みたとしても、及ぶ事にあらず、父君とても然なりかし、遠く離れて面影をしのばい、近きには十倍まして、深かりし慈愛の聲この耳を離れざるべし、これによりてこそ此處をも捨て、いとゞしき思ひに身を苦しむれど、吾助のことも忘れがたし、ゆるせよ吾助、ゆめさらさら惜かからねばこそ、戀すまじとて退く身ぞかし、うつせみの世に斯かる身の例し又ありや、知らぬ心に恨みもせん憎みもせん、其憎まるゝを本望にての所爲、貫ひし文は何處までも惜しきに、封こそ切らね手文庫に秘めて、一生の際までは友とせん心、さりとは我れ老先のある身、憂きに月日の長からん事つらや、何事もさらさらと捨て、憂からず面白からず暮したき願ひなるに、春風ふけば花めかしき、枯木ならぬ心のくるしさよ、あはれ月は無きか此胸はるけたきにと、押す手にいよく動悸たかく、噛みしめる袖に涙こぼれて、令嬢は暫時うち伏して泣きけるが、吹入る夜風たが魂か、あくるゝ心此處に堪がたく、靜かに立つて妻戸を押せば、今ぞ廿日の月面かけ霞んで、

さし昇る庭に木立のおぼろおぼろと暗く、似たりや弘徽殿の細殿口、敏が爲には若くものなき時ぞかし。

(六)

言はぬ浮世の様々には如何なることや潜むらん、今は昔の涙の種、我が戀ならぬ懺悔物語、聞くも悲しき身の上あり、春の夜ふけて身にしむ風に、闇の燈火またゝく影もあはれ淋しや丁子頭の、花と呼ばれし香山家の姫、今の子爵と同じ腹に、雙玉の稱へは美色に勝を占めしが、さりとして兄君に席を越えず、物靜かにつゝましく諸藝名譽のあるが中に、琴のほまれは久方の空にも響きて、月の前に柱を直す時突はれて影そでに落ち、花に向つて玉音を弄べば然ねを止めて節をや學びけん、子爵の寵愛子よりも深く、兩親なき妹の大切さ限りなければ、良きが上にも良きをえらみて、何某家の奥方とも未だ名をつけぬ十六の春風、無残や玉簾ふき通して此初櫻よりかゝりし袖、馬廻りに美男の聞えはあれど、月の雲井に塵の身の六三、何として此戀なり立けん、夢ばかりなる契り兄君の眼にかゝりて、或る日遠乗の歸路、野末の茶店に女を拂ひて、因果を含めし情の詞さても六三露顯の曉は、頸さし伸べて合掌の覺悟なりしを、物や

はらかにしかも御主君が、手を下げるぞ六三郎を立退いて呉れ、我れも飽まで可愛き其方に遣はさるべくは遣はしたけれど、七萬石の先祖が勤功に對し、皇室の藩屏といふ名に對し、此事ばかりは爲し難きに表立ちては姫も邸に置がたけれど、我れには一人の妹、ことに兩親老後の子にて、紀念と思へばふびんさ限りのなきに、其方が心一つにて我れも安堵に疵もつかず、此處をよく料簡なしたつぱりと退て呉れかし、さりながら此後の身の有つきにと包物を賜はりて、言はねど手切れの、端金にはあらざりけんを、六三此金に眼を止めず、重々の大罪頸と仰せらるゝとも恨みは無きを、情のお詞身に徹しぬとて男一匹美事なきしが、さても下賤に根を持てば、戀を金ゆゑするとやおぼす、これより以後の一生五十年姫様には指もさすまじく、況て口外ゆめさ致すまじけれど、金ゆゑ閉ぢる口にはあらず、此金ばかりはと恐れげもなく、突もとして扱つくくと詫びけるが、歸邸その儘の暇乞、惜しき名残を姫とも言はず、生れかはらば華族にとばかり、此處を出で、何處へ行きけん、忘れぬ姫のこと忘れねばこそ、義理といふ字に涙を吞んで、心は邸を離れざりしが、帳臺ふかくに物おもふ姫、六三暇を傳へ聞くより、心むすぼれて解くること無く、扱も慈愛ふかき兄君が罪と

も言はでさし置給ふ勿躰なさ、身は七萬石の末に生れて親は玉とも愛で給ひしに、瓦に劣る淫奔耻かしく、猶其人の戀しきも辛く、涙に沈んで送る月日に、知らざりしこそ幼けれ、愛き身の上に憂きを重ねて、宿りし胤の五月とは、扱もとばかり身を投ふして泣けるが、今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ねかしと身を捨ものにして、部屋より外に足も出さず、一心悔み初めては何方に訴ふべき、先祖の耻辱家系の汚れ、兄君に面目なく人目はづかしく、我心我れを責めて夜も寐す盡も寐す、一身つかれて瘦せに瘦せし姿、見る兄君の心やみになりて、醫藥の手當に手づからの奔走いよ／＼悲しく、果は物言はず涙のみなりしが、八月の壽命此子にあれば、月足らずの、聲いさましく揚げて、玉の姫様御出生と聞きも敢へず、散るや櫻の我が名空しくなりぬるを、何處に知りてか六三天地に哭きて、姫が命は我れ故とばかり、短き契りに淺ましき宿世を思へば、一人残りて我れ何とせん、待給へ諸共にの心なりけん、見し忍び寐に賜はりし姫がしごきの緋縮緬を、最後の胸に幾重まきて、大川の波かへらすをなりし。不幸の由來に悟り初めて、父戀し母戀しの夜半の夢にも、咲かぬ櫻に風は恨まぬ獨りすみの願ひ堅くなり、包むに洩れぬ身の素性、人しらねばこそ様々の傳手を求めて、

香山の令嬢と立つ名くるしく、一切衆生すて物に、我まゝらしき境界のろには涙を呑みて、憂しや廿歳のいたづら臥、一念かたまりて動かざりけるが、岩をも徹す情の矢の根に敏がこと身にしみ初て、其人床しからねど其心にくからず、文を抱きて幾夜わびしが、我れながら弱き心の淺ましきに呆れ、見ればこそは聞けばこそは思ひも増すなれ、いざ鎌倉に身を逃れて此人のことも忘れ、世に塗かるゝ心も断ちたきものと、決心此處に成りし今宵、切めては妻戸ごしのお聲きたく、見とがめられん罪も忘れて此處に斯く忍ぶ身と袖にすがりて敏なげ、これを拂ふ勇氣今は無く、よし人目には戀とも見よ我が心狂はねばと燈下に對坐て、成るまじき戀に思ひを聞く苦しさ、敏はじめよりの一念を語り、切めてはあはれと宣へと恨むに、勿躰なきこととて令嬢も泣き、お志しの文封は切らねど御覽せよ此通りと、手文庫に誠を見せしが、扱も我故と聞けば嬉しきか悲しきか、行末いかに御立身なされて如何様なお人になり給ふお身にや、思へば貴き御勉強さを我れなどの爲めとは何事ぞや、いよく戀は淺ましきもの果敢なきもの憎きもの、我が生涯の此様に悲しく、人に言はれぬ物と思ふも、淺ましき戀ゆるぞかし、我れにはあらぬ親の昔、語るまじき事と我れも秘め、

父君は更なり母君にも家の耻として世に包むを、聞かせ参らするではなけれど、一生に一度の打明け物がたり、聞て給はれ憂き身の素性と、此處に涙を盡くして語り明せば、夢とや言はん春の夜あけ方ちかく、鳥がね空に聞えて扱も忙しなし、君は都に我は鎌倉に、引はなれて復何時かは逢ふべき、定離の例しを此處に見れば、戀は一人ぞ安かりける、何事も言はじ思はじ、仰せられても給はるなとて、曉の月に影を別ちしが、これより令嬢は如何に成りけん、扱も敏は如何に成りけん、つれなく見えし有明の月の形見を空に眺めて、「曉ばかり」と呻きけんか知らず。

うもれ木

(一)

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に樓閣をかまへ、思ひを階廊にめぐらし、三寸の香爐五寸の花瓶に、大和人物漢人物、元祿風の雅なるもあれば、

神代様うづたかく、武者に鎧のおとしを工夫し、殿上人に装束の模様を撰み、或は帯書きに華麗をつくす花鳥風月、さては清楚を極むる高山流水、意の趣く處景色と、のひて、濃淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを樂と見る素人目に、あつと驚歎さる、ほど、我れ自身おもしろからず、筆さしおきて屢々なげく斯道の衰頹、あはれ薩摩といへば鯉節さへ幅のきく世に、さりとは地に落ちたり我が金欄陶器、おもひ起す天保の昔、苗代川の陶工朴正官、其地に錦様の工みなきを歎じ、歳十六の少年の身に、奮ひ起す勇氣千萬丈、奉行を説き藩廳に請ひ、堅野に二人の教授をむかへて、相傳法受の苦を盡くしつ、猶心膽をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、焼着畫窯の良結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、それが流れに浴する身の、美術奨励の今日うまれ合はせながら、此處東京の地にばかり二百に餘る畫工のうち、天晴道の奥を極めて、萬里海外の碧眼玉に、日本固有の技藝の妙、見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習へど、心は小利小慾のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつぼう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、兎角は金の世の中に、優で御座るの妙で候のと言ふ處が、畢

竟は仕切り直段の土に在ること、問屋うけのよき物いつち難有しとは、そも何處より出る詞ぞ、さればこそ賣國の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの瘦せ腕ねぢられながら、無明の夢まだ覺めもせず、これでは合はぬの割仕事に時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に代ふる粗畫濫筆、まだ昨日今日繪具臺に据りて、稽古は居ねぶりの白雲頭を、撲りこかして手傳はする縁がき腰がきの模様、霞砂子みだれ砂子の亂れ書きに、美といふ字は拭ひさる繪具雜巾の汚れ同様、さりとは雪がれぬ恥ならずや、此儘ならば今年と指をらぬ間に、今戸焼の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれにならんも知れたものでなし、是れほどのこと氣のつかぬ、痴漢ばかりある筈なけれど、時の勢ひは出水の堤、切れかけたも同じこと、我等ふせぎはとんと不得手、先づは高見で見物が當世ぞと、頬杖つきて宙腰の、ふらくとせし料簡には自己々々が不熱心を、地震雷鳴おなじ並みに心得て、天だ天だと途方途轍もなき八つ當り、的になる天道さま氣の毒なり、然りながらそれも道理、身は蜻蜒洲幾十萬の頭かすに加はりて、窺の烟の立居にまで、かしこき大御心なやませ奉る辱な心得もせず、大日本帝國の名譽といふ事、揉みくちやにして掃だめの隅に、

投げ出すやうな罰しらす、其處等あたりに珍らしからぬ世の中、憤るほど管なるべし、さりとて我れは我が觀念あり、握り初めたる筆の因果、よし狂といは言へ思と笑は笑へ、千萬の黄金つんで來るとも換へぬ心を腕にみかきて、輕佻淨薄を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の價とれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の眞は那邊にあるか、よし人目には何とも見よ、我が心満足するほどの物つくり出して、我れ入江頼三變物の名を、陶器歴史に残さんすもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志しを抱いて幾年間、此まゝならば胸中の奇計、何に向つて何時描くべき、恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取しむる右の腕手首ぶるゝと頷へて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつゝ、悲憤の聲は現はさねど、誰れいふとなく慷慨先生と仇名して、酒席の噂はづれぬ代り、柴のと叩くもの稀々なれば、友なく弟子なく女房なく、お蝶とよぶ妹相手にして此處高輪の如來寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけふる詫住居、濫圍扇に縁のある暮しをなしけり。

(二)

散る木の葉にすら、笑みぞあまると聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみ

だの種、同じほどの小娘が流行の帯に新形染の浴衣きて、姿どこやら嬾やかに、能く見ればよくもなき顔だちも、三割とくの白粉ぬりくり、幾度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ髪つき髪つき、天晴美人と招牌うつて、摺れ違ひに薫る香水の追風まで、ぱつとせし扮粧の夕詣で、何を願ひぞ、神さま嘸やお困りの連中に、願みられて我が形はづるとなけれど快からねば洗ひざらしの浴衣の肩、我れ知らずすばめて小走りするお蝶、並ぶ縁日の小間もの店に目もくれず、そゝぐは一心兄の上ばかり、願ひは富貴でなく榮華でなし、我形この上の襪襪に、よしや繩の帯しめよとまゝ、我れ生涯に來べき運あらば、兄様の身にゆづりて、腕の光りの世に現はるゝやう、みがく心の満足されるやう、二つには同じ畫工の侮り顔する奴を、兄さまの前に兩手つかせたく、佛壇のお二方に、お位牌の箔つけて欲しさがそもくの願ひ、手内職の手巾問屋に納むる足を其まゝ、靈驗あらたかなりと人もいふ、白金の清正公に日參の、こむる心を兄には告げねど、聞かば畫筆なげ出して、藝に親切の志、我れまだ其方に及ばずと言はん、下向はことに家のこと氣になりて、心も足もいそぐ道の、とある小路に夥しき人立、喧嘩か物どりか何にもせよ、側杖うたれぬやうと避けて通る、多くの人の袖

のしたを、洩れて聞こゆる涙ごゑ、ふつと耳に止まりて我しらす差のぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、我れに比べて今一倍あさしき有様、むかしは由緒ある人が皺める眉目どこか品もあるを、ふびんやこれが商賣の、何焼とかいふ銅の板、うち渡せし小屋臺のかげに頭すりつけて繰りかへす詫こと、相手は三十許の髭むしやくしやと、見るからが憎氣な奴、大形の浴衣胸あらはに着て、力足ふみ立つて耳も聾よと喚き立るは、何れ金が敵の世の中、元來は懇意づくの、生れながらに顔赤め合ひし中でもあるまじきに、はじめは伏し拜みて受たる恩、返すことのならぬは心からならず、此社會に陥りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のやうにもならねば、我れと恥ぢて心ならぬ留守も遣ひ、果ては言ひたくなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、其揚句さて何とも成らず、つまりつまりては烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に兩手合はせて拜みながら、不義理不名譽の驅落もすめり、さても此老女その類ひと覺しく、四邊はづかしくや小聲の言譯、且つは涙ながらの詞とて、首尾全くは聞えぬもの、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩ひて居るかの様子、それ本復さへなさば又つくべき方もあり、今暫時の間まちて給は

れと、あはれ腸しぼり盡くす悲しげな聲、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬ事もなければ、何の人事と聞き過ぎられず、さりとはあの男の聞分なさ、百兩のかたに編笠なれど此屋臺おこせといふ、それ取られては私と娘、今日から喰べることが成りませぬお慈悲と合す手を、あれ打ちをつた、憎い奴に、奴、自分手前はさして困る様子も無く、大々しい身躰つきの病ひ氣も無さうなに、あの老人のしかも病人抱へて、困苦さこそその察しも無きは鬼か夜叉か、有らば彼の横つら金で撲つて、美事老女救つてやりたきもの、それ處ではなき身、此財布の底はたけばとて、何になるものでなし、口惜しや可哀やと、お蝶身悶へする程残念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、切て一人は此中に憐れと見る人ありさうなものと、歎息する折しも、お蝶の肩さき摺るほどにして、猶豫もなくすつと出し男、何者と思ふまもなく、猛りたつ鬼男の前、振あぐる手の肘を止めて、軽くふくむ微笑の色、まづ氣を吞まれて衆目のそ、く身姿は如何に、黒縮の羽織に白地の浴衣、態とならぬ金ぐさり角帯の端かすかに見せて、溫和の風姿か優美の相か、言はれぬ處に愛敬もある二十八九の若紳士、老女の方願みさま詞つき叮嚀に、私通りすがりの身、來歴は何か知らねど、高

が女なり老人に失禮はあり勝ち、あれ御覽せよあの通り詫ても居ること、往來は其うちにも人の目口うるさきに、洋刀の厄介も御身分が如何や、何と私に此處の花、もたせては下さらぬかと、青柳のいと優しく出れば、はて扱他人の入りぬ口出し、詫や詞ですむほどなら、我等今頃は手を引く筈なり、濟まぬ次第き、たしとならば聞かせません、我等二月三ヶ月、雨露しのがせた事もある大恩人、その上に彼奴めが口車に乗せられて、五圓といふ大金貸したは此方も商賈づく、五一の利足はよしや天地が倒まにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待つてやる約束もなければ、負けてやる覚えもなし、それに何ぞや泣ごとの數々、地藏の顔も方圖のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引取つて行かんといふは、餘り無理でも無きつもりと、鼻で笑ふ豈づら憎し、若き男はからりと高笑ひして、何ぞと思ひしに金ですむ事なりしが、さりとては譯もなし、入らぬ他人と言はるれど、何れ四海の内輪同志、金は我れ立て換へんと、紙入れ探つて五圓札一枚一圓一圓、これではまだまだ御不足ならんが、内實持ち合せは是れ限りなり、何と雨露しのがせるほどの大恩人さま、料簡しては遣はされぬかと、飽まで柔和は粧ひながら、否と言は、あの純白

の拳何處に揮つて、あの髯男微塵になるも知れがたしと、芝居氣のある見物が叫び可笑し、彼の男は掻きさるやうに、金懐中にねち込んで、取り出す證書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名宛て、あれかこれかと捜し出して、よしか慥に渡しましたぞ不足を言は、まだくなれど、取らぬには優しこれで算用濟みとすれば、老婆めは大した儲けもの、好い親分見附け出して是れから利の出ぬ金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑つて拂ふ袋の塵、禮も返さず耻ぢもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、躓く石の無きも不審し、若き男は老女が陳ぶる禮よくも聞かず、何のくこれしきのこと、有つたればこそ役にも立つたれ、無くば我れと其方様といづれ替らぬ難儀の淵、浮き沈みは浮世の常よ、お禮は其方様大分限になられし時、此方より御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告をする程聞こえても居らぬ名、先づそれも御免なされと、取すがる袖引はなし、悠然と去る後影、光明赫灼として輝くとぞ拜まれぬ。

(三)

歳十三の曉より、繪筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江頼三、富貴を浮雲の空し

と見れど、猶風前の塵一つ、名譽を願ふ心拂ひがたく、三寸の胸中慾火つねに燃えて高く掛るべき心鏡くもりといふは是れのみなり、さればとて世に媚び人に媚ぶること生をかへぬ限りならぬ質、我れより頭下ぐることに、金輪奈落いやといふ一點ばりに、頑物の名高くなるほど、我慢と意地は満身に行わたりて、容れられぬ世と彌々うしろ向きになる心、見をれ此腕なにか住むか、一飛得意の曉にはと、人も聞かぬ大言はきて、纒かに熱腸を冷やすもの、扱も諸道のさまたげと言ふ、貧より外に伴侶のなき身、其得意の曉いつとか待たん、彌勒の出世と並べ立て、甲乙の無きものよと思ふに、口惜しの念胸をさして、險の合はぬ夜半も多かり、寐ぬに明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふツと思ひ出し、俄かに寺参りしたくなり、垣根の夏菊無造作に折り取つて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり、寺は伊皿子の臺町なれば左までには遠くもあらず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水すいしく箒木目のたつ細道を、がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空臈あらはに、何の見得もなく、身は小男の面ざし醜からねど、色黒々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざしきろりと蒼く凄く、沈鬱の症何

處か淋しく、紺薩の古手に白兵子の姿、懷中に建白書相應なれど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき處も見えけり、心こつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まへに、米澤數寄屋の肌つき美しくしき人、黒縷子の帯腰つきすつさりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけの好み、扱も美かな扱も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶畫の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入ればあれ薄氣味の悪き人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、振むきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよろくと馳せ出しが、袖なし浴衣の模様は何、纏に菊の崩し形か、それよ今度の香爐にあの書き廻しも面白かるべし、注文は龍田川とか、何の我が腕で我が書くに、入らぬ遠慮窮屈くさし、先師の言附より外は他人の意見容れたこと無き頼三、身貧に迫つて意を枉ぐるなど嫌な事なり、さりながら我れ頑物の兄故に、世の人並のこともせず、米味噌醬油に追ひ使はるゝお蝶、思へば兄風も吹かされねど、成行と諱らめて居て呉れる様子、それもそれなり、時運めぐらば何時かは花も咲くものよ、衡門に黒ぬり車出入させて、奥様と崇めらるゝやうに成るも不思議はなし、嗚呼その衡門よりは、天

晴の人物えらびて添はせたきものと、何がなしに案じて不圖仰げば、今も想像の衝門に、篠原辰雄といかめしき表札、扱も立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛國の志しある人ならば、日本固有の美術の不振、我が畫工疲弊の情、説かば談合の膝にもと、ゆめ知らぬ人に望みを屬す、狂氣の沙汰に心もつかず、彼れを思ひ此を思ひ、何時とは無しに坂も登りぬ、寺門くゞり入れとお僧どの寐坊にや、まだ看經の聲もなく、自からの寂寞境に、あさ風さつと松に吹いて、身にしみる心地何とも言へず、本堂をめぐりて裏手の墓處へと、手桶の並ぶ關伽井のもとを過ぎる時、入江様しばしと呼止める聲、少し覺えのと願みれば、つかくと馳せ寄つて、物言はず大地に兩手を突く男、怪しや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れか但し人外の私、お詞も下されまじとか、正路潔白の君に對して、合はすべき面もなく、言ふ詞出處もなき失策、後悔しぬきし改心の今日、我が田の水の辨解ではなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給はる人他になき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお頼みと、頭も上げずあやまり入る躰、矜足美事に耳うらに二つならぶ黒子、それなり姿こそ變りたれ彼奴新次め、先師が殊に寵愛にて、行々は養子にも

と骨折られしを、生地注文にと多分の金引出して、其まゝの行方しれず、師の臨終にもあり合さぬ人非人、今頃此處らを彷彿くこと憎し、何の相弟子失禮至極と、生來の疔癩目尻に現はれて、言ふこと宜くは耳にも入れず、聞きたくなしお黙りなされ、相弟子ならば兄弟分、言ふ事あり咎むる事あり、さりながらお前様と我れ何でもなし、他人も他人見す知らず、入江頼三潔白を貴ぶ身の、友とも仰せらるゝな中々の耳ざはりなり、其處退きて給はれ、露をさながら志しの手向けの花、萎るゝも口惜しければと、詞少なに行き過ぎる袂、あわたしく先づと控へて、御尤ながら恨めしきお詞、責め給へ咎め給へ、罪と知つて苦しき身の上、御折檻の咎にも逢はい、却つて身の本懐なるを、捨て、願みぬ他人向きの仰せ、昔の入江様、今日の入江様、お人替りしか、お心二つか、我今までの目違か、君を先師の紀念とみて、改心の實も謝罪の情も、君によつて顯はしたき願ひさりと、畫餅のお詞かなと、半いはさず振返る頼三、だまれと一聲鬱憂の氣の凝りたる餘り、物あらば當らん破裂の勢ひ、唇ふるゝと願へて性來の訥辯いよく訥に、汝新次人非人、恩しらす義理知らず道しらす、汝が罪の身を責むるは知らず、我を批難するか、我を批難するか、我頼三昔も今

も、正義を立て公道を踏んで、一步の過ち覺えなき身、どこの何處に何の缺點、言へ聞かん言へ聞かんと、詰寄る眼尻きりりと釣つて、汝不忠不義の奴も、先師寵愛の餘りには、世に其罪を包まれて、知る者は師と我ばかり、我れ一度言はじと定めて十年近く、此口開かねばこそ汝れ安穩に、月日の光り拜むは誰が庇護、頼まれずとも折檻の管此處にあり、幕前へ手向けん志しの、此花で打つに不思議もなし、打手は頼三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと續け打ち、手に持つ菊花投附けて、睨みつむる眼の裡に感じ來れる新次が躰、昔ながらの美顔今一層の品を備へて、あはれ好男子身じろきもせず、險にあふる、後悔の涙、眉宇に滿つ慚愧の狀、此人先師の愛せし人、我れに謝罪と思ひ込みし人、憎むが本義か、捨つるが道か、とばかり迷つて判断の胸うやむやになる時、靜かに頭を上げて言ひ出づる一通り、聞けば過りたり我れ短慮輕忽の所爲、此人の罪罪ならず、偶々岐路に落ちて不幸の身と、先づ憐みの情より聞けば、私元來私慾にあらず、小を捨て、大に就く國利國益の策、立てしといふが抑々の破滅にて、思へば料簡が若かりしなり、腕を組みての考へと手を下しての實験とは、冠履の相違雲泥の差別、人は我より利口にて、世は思ふまゝならぬものと、

つくづく歎息するにつけて、正義は人間の至寶といふこと漸々に發明し、才ばしりたる考へ身を離れしは、彌々無一物の曉がた、爾來幾年志しを磨きて、遠國他國に流浪の結果、不思議に人らしく世に言はれて、少しは名をも知らる、境界、今歳めづらしく歸京の錦、心に飾つて拜顔を楽しみし、師君は此處草陰苔下の人、松風に袂をしぼつて幾朝くむ樹伽井の水の影見ぬ人に残念は増りて、一層君のこと懐かしく、慕はしかりし昨日今日、打たる、も嬉しく罵らる、も嬉しく、眞の兄弟に逢ふ心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見る／＼頼三感歎して、大地につく手まづ上げ給へと扶け起して、知らざりし今までの失禮、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給ふべし、いざ御幕前に中直りせん、心おく事かと光風霽月、引いて立つ手に恨みも残らず取なせば、これも先師の導き、ありし朋友なり相弟子なり、君も訪ひ給へ、お前様も來て御覽せよ、お仕居は何處ぞ、此處よりは遠からぬ如來寺前に、引結ぶ庵の草深き處が夫れ、偕は目鼻の我が宿も此坂下、篠原と呼ぶが當時の姓なり、さりとて奇遇よ辰雄殿とは君の事か。

月に恨み風に憤り、天下を惡魔の巢窟と見て、黑暗々の中に彷徨ひし頼三、何處ともなく一點の光り微かに見えて、前途の希望漸々に大きくなりぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、有し職人時代には、負けぬ氣象の人受けよからず、師匠の愛の夥しきほど、憎む人さまのの説を構へ、傲慢と罵り狡狴と嘲りて、交際する者稀なるを、頼三例の弱きもの助けたく、弟のやうに最負せしが、恩は二代の親も同じ、師匠の金持逃するほどの奴、師匠も我れも目違ひと諦めて、懃ひ恥ぢを世に露はさじと、匿み通せし七八年目、何處ぞで悪人の仲間入、今頃は何になりてと、折ふしの思ひ出種、流石に忘れぬ所もありしに、思ひきや今日の身分、變りも變りし立派の紳士になりて、然かも執る主義の高潔さ、話し合ふほど頼母しさ優りて、慕參歸りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの経歴につきても、善事と悪事を洩さず隠さず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金満家なりし事、其處に住み込の初より、次第に氣に入られて一人娘に贅養子と成りたる事、其身戸主となりて二年とたぬ間に、親女房とも引つゝきて病死せし不幸さ、扱その幾萬の財産指のさしてなく、我が自由になすもつらく、家につきての縁類にゆづりて、身退きたき願ひも、世の人さら

に聞き入れてくれず、其まゝ安座逸居の身、我が位置高まるにつけて湧き来る希望のさま々、及ばぬと知つて捨られぬが是れも辯にや、社會の爲の東奔西走、此處東京に計畫ありて、出京の昨日今日、生中此方彼方に名を呼ばれて、稱へらるゝ身汗あゆる心地、昔をおもへば大恩の師に、よしや譯は何にもせよ、重々の不始末もあるを、素知らぬ顔に青天を歩くさへ、日月の手前恐ろしく、世を欺くに似て心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪中々にくるしかりきと、腹ある限り告白して、屑よしとする様子、表面をつくらひて底にこる、輕薄者流を厭ふ目には、よくも返りし本善の善、稀なる人よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、しかも拭ひ去つて見るに、却つて光りは勝る心地、頼三しきりに憎からずなりぬ、中々物語り盡きもせぬに、交際ひろき人のならひ、訪問者陸續とうるさく、何と入江様、人氣なき閑靜な處にて、一日ゆるりと御高説承りたし、君はいつもお暇かと問はれて、はて扱貧者に餘裕はなし、氣樂な事いひ給ふな、人氣なき處と言は、我れ能住居の閑靜さ、裏の車井に釣瓶くる音か、表に子守歌きこえる位のもの、此處よりはつひ其處なり、いづぞは來て御覽せよ、麥めし炊かせて薯蕷汁位の御馳走はすべしと無造作の詞、さり

とは羨まじきかな、世の事聞かず人に交はらず、何事の憂きも宿らねば、胸中いつも清
 しかるべく、凡界俗境遠く離れて、採る筆一つに樂みを知る御身分、我れ雲泥の相違
 と歎息する辰雄、箱三引きとりて、何の羨まじき身分か、筆心にまかせず業世と合は
 ず、我れと埋もるゝ身のはては、首陽か汨羅か底しらすの境涯、さりとは世の中あて
 も無しと笑つて、遠慮なき昔語りに、胸も開く障子の外に出れば、廊下いく曲りか廣
 々とせし住居、實に人の身は水の流れと、物言はず顧みれば莞爾と送る辰雄の姿、あ
 ゝ人物と心にはめて、下婢が直す百足下駄、是れ特色の愧づる躰なく、喜色雅々門を
 出でしが、歸宅の後もお蝶相手に此物語、平常は蛇蝎と忌み嫌ふ世の人、兄さまの褒
 め者とはどんな人、お蝶見たしと思はねど、喜ぶ兄に我も嬉しく、一日ありて二日目
 の夕がた、軒ばの板に茅蜩の鳴き出づる頃、手仕事叮嚀に取片づけ、家の廻り奇麗に
 掃除して、打水いそがしき門口に、入江様はと音はなれて、誰何と振かへる襷姿を、
 扱も美形と見るは辰雄、お蝶はツと心附きて、俄にさすや雙頬の紅、色は何の色我れ
 知らず、見しは清正公の彼の時の彼のお人、何として我家へはと、騒だつ胸に是れよ
 りや知る戀。

(五)

床のものと籠馬かたさせと鳴いて、都大路に秋見ゆる八月の末、宮城の南三田のほ
 とりに、人家二三十戸買ひつゞして、新に工事をいそぐは何、押立てし杭の面に、博
 愛醫院建築地と墨ぐるに書して、積み立つる煉瓦の土臺に、きやりの聲の賑はしきと
 共、四方に聞えわたる篠原辰雄、浮世のうきを憂きと捨てずして、吉野紙の人情あさ
 まし、と、孤身奮ひ起す愛世濟民の法、我れ微力不肖の身の、斃れて已まば已まんの
 み、今日細民困窮のあり様、見るに勝たえずやある、知らずや錦衣九重の人、埋火の
 もとに花を咲かせて、面白しと見る雪の日は、節婦こゝえて涙こぼるべく、大厦高樓
 に岐阜提燈ともしつらねて、風をまつ納涼の夜は、蚊遣火のもとに孝子泣くめり、中
 に憐れは疾病の災ひ、名醫門にあり、良薬ちかきに有つて、しかも求め難く得がたき
 身、天命ならず定業ならず、救はるべき命見すゝの残念さ、妻の身子の身いくばく
 ぞや、人生れながらに悪意なけれど、迫りては徳不徳取捨の猶豫なく、天を恨み地を
 恨み、世範これより亂れて國家の末いと危し、これを救ふこと仁にありと、我れ先づ
 資産を擲つて、一着手を救生の急なるに起し、一方は富國利民の策を購じ、一方は貴

顯紳商の門に、協力贊助を求むること切なるに、徳孤ならず何某の殿某の長官、意氣投じ所論合つて、甲より乙に美譽を傳へれば、徳義を一の名譽と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人間かぬ人名を慕ひ、天晴仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其言見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦むにつけ、頼三次第に慕はしく尊く、口腐れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、鬱悶の心しのびがたく、我業疲弊不振の物語りより、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、實をいはし勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中説くこと嗤笑ひに成りて、はては後指さるゝこと口惜し、さりながらそれも道理、我れ此道に入りたちて十六年、まだ一度の共進會に名を掲げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆゑには縛られねど、中々の直行悪まれて、問屋うけ宜からねば、註文は廉價粗物の外もなく、事心と合せす筆何として揮はるべき、不満々々の塊まりは、何の世の中あき盲目ども、これ相應と投げ出しものにして、意匠もちひず鍛錬馬鹿らしく、品物の面よごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の爲にする粗物も、見る目に何の變りなく、口ほどもなき駄物師と嘲られて、我名いよく地に落ちたり、季鍊月鍛の筆、經營慘

澁の意匠、心に有つて物に描かず、我れ男子の身の精神一到、猶事成らぬ腐甲斐なき、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに縁つて語り合さん術なく、冥々の裡に重ねし年幾年、君一度は斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が爲の名案下し給へど、打明かす意中、辰雄しきりに嘆じて止まず、げによくも合へるものかな、我が國家を見る心その外に出づる事なし、徳義の廢類人情の腐敗、此れを憂ひ彼れを嘆けど、道に立つ人大方は、濁流汚溝に身を投じて、しかも汚れを知らぬ輩、味方少く仇は多し、さりながら捨てぬ處に物は成立ちて、二人三人の正義の士に、知られ初めし昨日今日の事業、憚り多けれど是れ手本とも御覽じて、容れられぬ世を捨て給はず、腕かぎりの品物こしらへて見給はずや、其資金は我れ受けもたん、此事廉直の君が心に屑しと思さぬか知らず、それは君一身の小事のみ、幾多の畫工の睡を覺まして、國益の一助たゆたふ所か、吾邦特有の石陶器、價廉といへど品は英佛伊に及ばず、獨り薩州陶器のみは、土質釉料他邦に類なく、天晴名譽の品なるを、惜しや畫工に氣概なく、問屋に一の精神なく、今日の成行くちをしの思ひ、我れも多年の胸中にあるし、不思議に心の合するも自からの時機なるべし、逸し給ふなと熱心に力を添ふれば、

顯紳商の門に、協力贊助を求むること切なるに、徳孤ならず何某の殿某の長官、意氣投じ所論合つて、甲より乙に美譽を傳へれば、徳義を一の名譽と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人聞かぬ人名を慕ひ、天晴仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其言見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦むにつけ、額三次第に慕はしく尊く、口腐れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、鬱悶の心しのびがたく、我業疲弊不振の物語りより、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、實をいはし勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中説くこと嗤笑ひに成りて、はては後指さるゝこと口惜し、さりながらそれも道理、我れ此道に入りたちて十六年、まだ一度の共進會に名を掲げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆるには縛られねど、中々の直行悪まれて、問屋うけ宜からねば、註文は廉價粗物の外もなく、事心と合せず筆何として揮はるべき、不満々々の塊まりは、何の世の中あき盲目ども、これ相應と投げ出しものにして、意匠もちひず鍛錬馬鹿らしく、品物の面よごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の爲にする粗物も、見る目に何の變りなく、口ほどもなき駄物師と嘲られて、我名いよく地に落ちたり、季鍊月鍛の筆、經營慘

澹の意匠、心に有つて物に描かず、我れ男子の身の精神一到、猶事成らぬ腐甲斐なき、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに縁つて語り合さん術なく、冥々の裡に重ねし年幾年、君一度は斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が爲の名案下し給へと、打明かす意中、辰雄しきりに嘆じて止まず、げによくも合へるものかな、我が國家を見る心その外に出づる事なし、徳義の廢頹人情の腐敗、此れを憂ひ彼れを嘆けど、道に立つ人大方は、濁流汚溝に身を投じて、しかも汚れを知らぬ輩、味方少く仇は多し、さりながら捨てぬ處に物は成立ちて、二人三人の正義の士に、知られ初めし昨日今日の事業、懼り多けれど是れ手本とも御覽じて、容れられぬ世を捨て給はず、腕かぎりの品物こしらへて見給はずや、其資金は我れ受けもたん、此事廉直の君が心に屑しと思さぬか知らず、それは君一身の小事のみ、幾多の畫工の睡を覺まして、國益の一助たゆたふ所か、吾邦特有の石陶器、價廉といへど品は英佛伊に及ばず、獨り薩州陶器のみは、土質釉料他邦に類なく、天晴名譽の品なるを、惜しや畫工に氣概なく、問屋に一の精神なく、今日の成行くちをしの思ひ、我れも多年の胸中にありし、不思議に心の合するも自からの時機なるべし、逸し給ふたと熱心に力を添ふれば、

籟三感涙に睚ぬれて、何分にもと生れて初めての詞、辰雄その後は聞かす言はさす、事一切此處に此處にと胸を打ちけり。

日數隔つること幾日、三田の工事の喧しきと共、斯道畫工の耳時つること沸き來りぬ、如來寺門前草ふかき處、埋もれもの、慷慨先生、三年輩はす鳴かすの技倆、現はさんとする風説、立つや我れより高き人、挫きたきが此輩の常、陰に陽に批評たくましくすれど、後ろだて確かなる身の、却りては心可笑しく靜かに素がきの筆を下しぬ、生地は素より沈壽官が精製の細墨陶、撰みは籟三かねての好み、三尺の細口にして、臺附龍耳の花瓶一對、百花これより亂れ咲いて、燦たる金色みるは幾月の後、心未來に先づ馳すれば人物景色眼前に浮かんで、我しらす莞爾と笑む籟三、王侯貴人何ものかは、世塵遠く身を離れて、凌風駕雲の仙に入る心地、經つ日覺えず明けぬ暮れぬ。

(六)

恩に感じ行ひに服して、我れは神とも尊ぶ人の、彼れより心に垣を結はず、睦れらるゝ事勿躰なく嬉しく篠原といふ名知らず聞かすのそもく、身にしみし一事漸々に

形づくりにて、馴れゆく月日の深きほど、可憐の胸やみに成りぬ、お蝶あくまで優しき姿、萩の下露もろげに見えて、立てし心は現はさねど、思ひ込まば火水の中も、よしや命は假の世と定めて、二つの道は踏まぬ氣象、我身卑賤の教へもなきに、君様世上に敬はるゝお身、成るまじき願ひと我れを叱りて、さていよく捨てがたく、染みし思ひの是れを友に、我身一生獨りすみと、あはれの觀念さすがに動ぐは、折ふし耳にする世の評判、宜しと言はれて悦ぶは格別、何某子爵最愛の娘、是非彼の人にと申込みの噂、聞く胸なにか蕪いて、臍々兄に問へば、大丈夫と笑つて退けられぬ、されど流石に氣になりてや、其つぎの夜に訪はれし時、籟三其事いひ出して、實かと問へば虚言ではなし、舊大名の幾萬石とか、聞くばかりも耳うるさく斷り言ひしも五度か六度、未だに仲人殿むだ足に參らるゝ事可笑しとばかり、辰雄心に留めぬ様子、それは何故のお斷り君もまだ年若の、これより獨身にも居られまじ、望み好みの有るは知らず、大方ならば極められたが宜からんにと、籟三心あつて言へば、我れ獨身にて終らんとともに思はねど、華族の聲になる願ひなく、姫君様女房にしたくなし、香花茶の湯に規則どほりの容儀とのひて、お役目の學問少々ばかり、何になるものでなし、世路

の困難ふんでも見ず、一人立ちの交際もならぬやうな、木偶的の神さま持込まれて、親の光りに頭さぐるなど、厭な事なり、我れ望みは身分でなく親でなし、其人自身の精神一つ、行ひ正しく志し美事ならば、今でもお世話ねがひたきものと、鮮かな詞籟三片頬をみしてお蝶をかへり見ぬ、此處に来て遊ぶ時の辰雄、世に高名の人ともなく、さながら家人の打とけ物語、只なつかしく睦ましく、友か親戚か猶一段、籟三たしかの望み出来て、或る時お蝶にほのめかせば、袂はへて勝手元に逃げしが、其頃よりお蝶いよ／＼身の行ひつゝしみて、徳を修むる事専一と心がけ、姿木綿着のいやしきは耻ぢねど、詞づかひ立ふる舞、家の内の經濟より始めて、世の交際人づかひと細かに省みれば未だ身に整はぬ事ばかり、繁きが中に戀といふ怪しもの、折々の波むねに起して、飽かれまじ厭はれまじ喜ばれたし愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君様も幸福の世の過ぐさるべきかと、慾は次第に高まりて、さまざまの想像わき來れば、逢ふに嬉しき物がたりの、裏は如何にと枝葉を疑ひ、我れと我れを嘆き身を賣めて、一心の半は辰雄のもの、辰雄ありての喜怒哀樂、善も悪も黑白も辰雄が指のさし次第、戀の山口くらくなりぬ、籟三局外に立つ身の、迷ひを捨て、

見る目には、辰雄の愛の度妹に下らず、彼れも真情此れも真情、取ならぶる好一對とこゝろ嬉しく、二人長閑に物がたるを聞けば、百花の園に雙蝶の舞ふ心地、春風其座に吹渡つて我れも陶然の樂み限りなく、右も左も喜びの中に、心障らす意氣軒昂、取る筆いさんで書圖うごき、唐草模様模様、縁書き腰かき地つぶしの工夫、濃彩淡彩畢生の巧、下焼成つて又一窯、二窯三窯よはいつしか、殘菊落葉ときの間の霜と消えて、煤拂ひの音もち搗きの聲、北風の空に松や飾り松。

(七)

送る歳くる歳珍らしからねど、心改まれば一段の光り、のぼる初日の影にそひて、汲あぐる若水の車井に、めぐる世の中おもしろく、屠蘇の盃まづ年下よりと、さすも可笑しや一家二人の生活に、内裏儀式のむかしを學びて、三つ組の重ふるきを捨てず、新らしき物は二間四枚の縁がはの障子、切り張りの斑ならす、是れ例年に異りたる處、篠原が庇護なりとて、元旦早々噂は出でぬ、籟三片意地の質、人に受くる惠み快からねど、溺るゝ藝に我れと負けて、二十金の生地二十夕の金箔、此處四五月の費用幾度の窯代、積もりし恩の深きが上、猶心づけの數々もうるさく、其都度に斷る

を、新年着の料にとて、贈られし去年の反物、迷惑さ限りなく、遣りつ返しつのと
 の果、さらば妹に頂戴せん、我れは男のよき衣服きて嬉しからずと、兄妹ぶりの一
 反を返して、残す一反に人の情無にせじと、お蝶の曠衣に仕立させて、今日の姿つく
 ろひしを見れば、今歳十八の出花の色、玉露の香り馥郁として、一段の見榮え流石に
 嬉しく、此服装平生着にさせたくおもへり、人は廻禮に忙しき日も、世捨て人の其苦
 なく、今日一日はと仕事休みして、横に轉ぶ肱枕、御慶の聲に夢やぶれて、珍らしや
 誰れと問へば、常は疎き問屋の何某、末廣に祝詞を籠めて、長々と去年の無沙汰の詫、
 これよりの懇親、一向たのみて行きしこと、お蝶その通り取次げば、はて扱利慾にく
 らみし眼は、何處まで暗きか方圖のなきもの、其詞我れへではなし、御本尊は彼方に
 とて、指すは座敷の花瓶、これ高くなりし評判に、出来上らぬ内より我れ買ひ取らん、
 いや是非とも私にとせり合ひの申込、一々に跳ねつけて、今歳コロンブス博覽會に出
 品の計畫、諸事は辰雄の周旋に、悠然構へる小氣味よき、籟三いよ／＼大言を吐きけ
 り、暮れて其日も點燈ごろ、辰雄廻禮の車を其まゝ、交際ひろき身の勞れも厭はず、
 門に轆轤おろさすれば、春色いと長閑になりて、いふ事さく事一々におもしろく、

籟三紙鳶の昔を言へば、辰雄廻し獨樂の面白さ忘れずと語り、彼れに移り此れに移り、
 次第々に密になりて、幾變遷の今の身、中々にそのかみの無心戀しきばかり、世の
 こと人のこと目に映りて、彼れも助けたく此れも救ひたく、不相應の事業に身を委ね
 て、及ばぬ力の我ながら口惜しく、暗涙を呑むこと誰が業ならねば、訴ふるに處もあ
 らず、凝りにこりし憂鬱の氣の晴るゝは此處に斯く遊ぶ時ばかりと、何故か例に似ぬ
 詞、籟三聞き咎めて、怪しき事かな君が博愛の徳、上に聞え下に渡つて、推尊せぬ人
 なき筈を、何故の御不満ぞと問へば、何事も言はぬが花なり、お互に聞きつ聞かせつ、
 樂しき事ならば宜けれど、我胸にさへ持切れぬ苦を、君達に分けて成ることか、元來
 正は邪に押され、直は曲に勝ちがたきが常、何事も問ひ給ふな、臆いよ／＼亂るゝや
 うなりと、振あふく面氣の故にや、血の氣も見えず蒼く白く、唇を嚙んで沈思の體、
 お蝶たまらず兄の袂と曳けば、籟三少し前に進みて、善き事のみを聞き聞かせの友
 いくらもあり、喜憂ともにと言ふ處眞實の價値ならずや、これを隠されて悦ぶ者、世
 の中にはあるか知らねど、我等同胞おもしろくなし、とは不遜の詞なれど、兄弟と思
 ふ君の事、水火の中にも手を携へたきが願ひ、何と打明かしては下さらぬか、承はら

ねば氣も落附かず、我よりはお蝶何の位心ぼそきか、女は氣の狭きもの、役にも立たずくし／＼と氣にして、我れも迷惑、可哀さうにもあり、五歩十足の同じくは、諸にも苦を分けたしと肚からの詞、お蝶も言はず打萎れて、組み合はず手を解きつ返しつ、あはれや胸の動悸高かり、辰雄俄かに心づきてや、扱も馬鹿な事言出して、折角の面白さ臺なしになりぬ、苦あれば樂あり、樂あればこそ苦もあるなれ、循環して行くが奇なものなるを、一々に憂ればしと見る日には、五十年の壽命たまることか、お蝶さま案じ給ふな、今いひしは皆醉の上の讒言、泣上戸の言分何でもなし何でもなし、笑ひ顔みせて我れにも落つかせ給へと、から／＼と笑つて一物の残らぬ様子、再びもとの話に復つて、更くる夜遅く歸宅せしが、お蝶いよ／＼心悶へて、寝られぬ枕うくばかり、涙の床につく／＼と案ずれば、最惜しや君様、あれほど熱心の計畫に、何ごとの壁いたりたるか、談合する友は少く、打こはす仇は多き世の中、口惜しさいかばかりぞや、今宵の詞今宵の顔色、必らず仔細なくては叶はじ、我れに隔ての匿み隠しか、我れに歎きを懸けまじとてか、兎にもせよ角にもせよ、我れは君の妻、君を措きて我が夫なし、見すべき心は斯る時よ、萬人一樣表面は同じ、其皮一重下の下の骨

壽命
讒言

に刻んで忘れぬは何、知らせて知りて喜憂は借にしたきものと、思ひを曉の鐘にかぞへて、新玉のとしの始め長閑けからず、暇なき戀に身は使はれもの、三ヶ日も過ぎて七種の日、辰雄誕生日の祝ひながら、新年の宴開きたく、お蝶さま是非借りたしとの文言、我れ悦ばせん爲かあらぬか、當日一式の身の廻り、何處貴顯の席にも恥かしからず、心をこめし贈り物の品々、頼三喜んで許せば、我れも其人の意に背かじとこらす粧ひは錦上の花、あゝ純粹の淑女さま、此連此姿、見せたきものは亡き親といはれて、お蝶鏡の前に泣きけり。

(八)

百花に魁けて咲くや窓の梅、來鳴け鶯わが宿は、春風を吹く品物の落成、四窓八たびの窓の心配、薪の増減烟の多少、火色に胸をもやし微嚙にも氣をいためて、壘や入たる流れやしけん、金色の不明繪具の變色、苦を嘗めつくせし此處幾月、思ふこと思ふに叶ひて、新薬みがきに磨き出せし光澤、耀く光りは我が光り、花瓶の上部見切りの中、正面は龍に立つ浪の丸模様、周圍に飛ばす菊桐の、あしらひは古代唐草にして、見切りの境界雲形の、上下に描くや東大寺模様、此處さや形七寶の地つぶしに、帯の

菊の丸ありふれたれど、丹誠の筆いやしくもせず、上部終つて梓どりの内の書は、表面對の金銀閣寺、裏面向ひ合はす淡川稻村が崎、誠意誠心みちみちて、粧ひなす彩色凡筆ならず、梓の周圍は古薩摩風の秋の七草、金模様の蝶のちらしがき、此地つぶしの雲ほかし形金梨地、先人未發の工夫をこらして、刻苦の跡いちじるく、臺の描つぶし縁腰のわり模様、微ならず細ならずと請らばそしれ、眼を持つものは來ても見よ、一打棒にも美はこもる我れ簞三不器用の技倆、此品物に止めぬと誇りて、晩酌一杯酒氣さへ添へば心いよく面白く、篠原に風聽がてら、お蝶まねかれし日の禮も言はんと、立出づる門口に、兄様しばしと袖ひかへる妹、言はんとして言はんとして躊躇ふを、何ぞ用かと小戻りすれば、何でもなければ夜風お寒し、風引で給はるなの心づけ嬉しく、それほど遅くはならぬつもりなれども、酔ざめは油斷がならず、羽織今一つ着て行かんと、立歸つて着重ぬる縁の先、襟に手を添へて折りながら、兄様大層お罷が生へたり、新年といふに見苦しやと横顔つくく、眺められて、何の夜ではあり知れる事か、明るき處で明日剃りて給はれ、先づは品物も出來上りて、小成に安んずるではなけれど、祝ひてもよき事なり、四五日の中に辰雄との誘ひ出して、三人連れに何

處ぞへ行かん、其約束今宵して來る心、おそくはならねど金目の物、家にあるだけ不用心なり、門の戸さして待ち給へ、さりと胸に雲もなしあゝ月もよしと立上る兄、其手にすがつて門まで送れば、地上に落つる影二つ、見るく一つは遠くなるを、見送つて立つ影うらかなしく、夜風軒ばの板に淋し。

むかしは他處にみし表札、やがては弟の門くゝる簞三、頼む、どうれの玄關向き小うるさく、辰雄の居間は豫て知る、庭口の戸を押せば明きたり、霜にしめりし芝生の上、踏むに音なき袖がき隠れ、聞こゆる聲は高からねど、影は障子に二人三人、聞きたし何の相談會と、引き立つる耳に一言二言、怪しや夢か意外の事ども、某の子爵たまに遣ひて、何某長官に歎願さへせば、此事必らず成立つべし、某の殿の證印は柳橋の握らせ次第、金穴は例の大盞、氣脈は豫て通じ置きたり、跡は野となれ、山師ともいへ詐偽とも言へ、愚者に持たせて不用の財、引上げる事世の爲なり、思ふも腹筋は洋行がへりの才子どの、何の活眼知れたものよ、魔睡劑は入江の妹、此間の宴會に眼尻の角度見て取りぬ、彼の頑物に説きつけがむづかしけれど、恩といふ獄屋入り八重からげも同じこと、女は況て懷中そだちの世間見ず情の深きだけ丸め易し、おろ

す元手の細工は粒々、簾三といふ奴おもひの外、遣ひ道不向なれど、伺つて置かば何にかなるべし、楠どの、泣き男、人間に不用もなきもの、博く愛する是れも仁かと不敵の詞、聲は辰雄歎おのれとばかり、奮然立上つて更に摩する腕の無念さ、内にはいつか話絶えて、玉笛の聲院々と聞え出でぬ。

(九)

此人の一笑に無限の喜びを知り、此人の一滴に萬斛の憂ひを酌み、形より濃き影の如く、起居に心はしたかふ其人、玉をのべし容顔愁ひを含んで、しみぐとの物語り、何の契りの君と我れ、宿世あやしく忘れ難く、國家の爲めに盡す心、半分は君に取られて、人に言はれぬ物をも思ふ身、はかなしやお心も知らず、天下に妻は又なしと定めて、何の子爵の娘、振むく處か、にべもなく斷りしが蟻の一穴、實を言は、我が所爲わるかりし、其子爵殿今までの一臂にて、支出の金に事も缺かず、事業運びかけし今日になりて、俄かに破約の申込み、此途たえて復事成らず、怨みを呑んで我れ此まゝに退かんか、遣す譏りも嘲りも君故と知れば惜しからねど、何と成るべき世の中いや、國家の末を思ひいたれば、殘懷山のごとく此胸やぶるゝばかり、此事誰れに語ら

るべき、隔てぬ中の君にさへ、言はれぬは斯る譯、外にとる術なきでもなければ、それいよく心苦しくと、言ひはてぬ詞猶もどかしく、此真情まだ見えすやと打うらめば、さりとは其真情、見えて悲しきは事君が上なり、成否はいづれお心一つ、今日賓客の一人彼れ有力の貴顯、我が爲金穴たらんと言ふ、心はと問へば、苦しきは此處、君の噂を如何に聞きしか、一意妹と思ひ込みて、達ての所望つらからずや、君を他人にゆゑるして我れ、國家の爲と斷念られず、よし我れ怨を離るゝとも、この事何として我が口より言はるべきと、愛しや戀人斷腸のけしき、可憐の少女魂を奪はれ膽を消されて、責を我が身の上を負へば、操を破つて操をたてんか、人知らぬ罪わが心の裡にあり、さりとして我れ故君が名まで、世に滅ぶるを他處に見んこと、恩を仇なる畜類の所爲、あれも辛しこれも愛し、何とせんとばかりの胸、智慮分別の及ばぬ末は唯死の一つ、影あり形のある世なればぞ、障り多く妨げ多し、生れぬ昔の空無量、我れお蝶といふ身がなくなば、何方へ義理なく憚りなく、此戀圓滿にあるべき筈、よし是れも天命なり、病ひに死ぬも戀に死ぬも、命は一つよ二たびは行かぬ路、天地にも恥づる所あらず神佛もとがめ給はじ、兄さまもゆるし給へよ我れも悔む所なしと、決心するどく未練な

く、あはれお蝶潔白無雙の身、濁りに染まじ亂れじの行ひ、寐る夜の夢のしばしも忘
れず、富貴に眼をとち貧賤に心をみがきて、今歳十八年くもりなき美玉、打くたく大
魔王は戀といふ胸の一物、形を辰雄に假り聲を篠原にかりて、或時は誘ふ春風花ひら
く園、ある時は指さす秋雲月くらき天、喜憂を包みし袂のさき、引きて伴ふ果ては何
處ぞ、東西南北かけもなく形もなく、愛らしかりし双頬、慥いづくに往きし、なつか
しかりし遠山の肩いづくに往きし、星の眼番の口、復耀かす復開かず、黒漆の髮雪白
の肌、あれも無しこれも無し、寒風ふきしきる夜半の月に、追へども見えず呼べども
答へず、形見は留むる一封の文に、残す手蹟のうるはしきも涙

(十)

どつかと坐す花瓶の前、あふれ出る熱涙はらひもあへず、にらみつむる眼光火と散
つて、取りしむる腕、くだけよ此骨、寧ろ生れながらに指まがり筋つまりてあらば、
斯道にと志ざすこともなく、入立たぬ昔に何をか願はん、なまなか陶畫の粹と呼ばれ
し、先師の畫工場に一と稱へられて、我れは賣らねど自からは人も知る名、貧ゆえう
づもる、事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名譽ねがひしは何故、た

のむまじき人頼みしは何故、喰ふまじき不義の食この口に食みしは何故、許すまじき
お蝶、不義の人に許せしは何故、汝れ汝れ此腕此藝、心をまどはし目を眩まして、見
えず覺らず今月今夜、お蝶不幸の家出は誰が業、磨きし多年の筆故に、最愛の妹ころ
さするか、ねりし心の苦みは、汚濁を我身に浸みこませしか、冷笑ひし辰雄、嘲りし
辰雄、聲は彼れよ罪は汝よ、交りを断つて惡聲を出ださぬ、我れ君子の道は知らねど、
受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髓に徹れと思は恩なり、彼れ奸惡の秘事この耳にして、
まこと聞き捨てにすべきならず、世の爲人の爲正義の爲、揮ふべき拳こゝにあり、秘
藏の短劍ひらめかして、あの胸もとを貫くも容易、さりとは無念や此品物、此恩此恵み
身をしばりて、向くべき及なく揮ふべき拳なし、思へば恨みは我れにあり、腕にあり
藝にあり此花瓶にあり、憎し口惜し仇め敵め大惡魔め、汝れを碎いて辰雄も刺さん、
汝れなくば何の恩何の恵みと、拳をかためて突立上り、見れば見れば月明りに、浮き
て見ゆる金銀閣寺、砂子一つ筋一本心をこめぬ處もなく、まして周圍の金なし地、鳴
呼幾年の苦の名残、描きも描きたり我れながら、天晴斯道の妙の妙、この筆たえて繼
ぐ人ありや、我れ道に入りて十七年、惜みに惜みし名を記して、見よや海外の碧眼玉

奈れ萬國の陶器畫工、日本帝國の一臣民、入江頼三自まんの筆と、心に誇りし満足の品、これ何として碎かるべき、これ何として碎かるべき、兎にも角にも世に合はぬ身の一生の思ひ出これに止めて、入らんか深山のそれも口惜し、お蝶ふたゝび還りもせば、辰雄に邪心の無くもあらば、此品保存も成るべきを、雙手に抱いてためつすがめつ、眺め入る心惚として、我れ畫中に入りたるか、畫圖我が身に添ひたるか、お蝶もなし辰雄もなし我慢もなし意地もなし、金光我が身に輝いて、四方に湧く喝采の聲、莞爾と笑めば耳ちかく、頼三恐物のつかひ道なしと、聞え出づるは篠原か、汝れと振仰ぐ袖ひかへて、お風めすなと優しき聲、嬉しやお蝶かへりしが、兄さま彼處へ諸共に、指す方は金閣寺銀閣寺、咲くや秋風胡蝶飛んで、立わたる霧さりとは、我が金なし地にさも似たり、面白し面白し、蛟龍つひに池中の物ならず、湧き來る雲形のうちに立浪の丸椀様、登り龍下り龍龍の丸、蝶の丸花の丸鳳凰の丸、をどり桐くるひ獅子二葉葵、源氏車榎車ぼたん唐草菊がら草、吉野龍田の紅葉に花に、あれも美なり、これも美なり、お蝶も美なり辰雄も美なり、中に就て我が筆美なり、これを棄て、何處に行かん、天下萬人みな明きめくら、見すべき人なし見せて甲斐なし、我が友は汝よ、

汝が友は我れよ、いざ共に行かんと抱きあげて、投げ出だす一對庭石の上、憂然のひいき大笑のひいき、夜半の鐘聲とほく引きて、残るものは片々の金光一輪の月。

闇 櫻

(上)

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一本に兩家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相續は良之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世しての一粒ものとして寵愛はいと手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まづいとひて願ふはあし田鶴の齡ながれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ梅檀の二葉三つ四つより行末さぞと世の人のほめものにせし姿の花は雨さそふ彌生の山ほころび初めしつばみに眺めそはりて盛りはいつとまつの葉さしの月

いざよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきなまこ絞りくれなるは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝるゝ美人もうるさきものぞかしさても習慣こそは可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔は我も昔と思へど良之助お千代に向ふときはありし難遊びの心あらたまらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとまりもせず良さん千代ちやんと他愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口もう来玉ふな何しに來んお前様こそいひじらけに見合さぬ顔もわづか二日目昨日は私が悪かりし此後はあのやうな我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びられて流石にをかしく解けではあらぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味しらねどあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夜は嬉しき夢を見たりお前様が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ處をといふ夢は逆夢を馬車にでも挽かれはせぬかと大笑ひすれば美しき眉ひそめて氣になる事おつしやるよ今日の日曜はもう何處へもお出で遊ばすなと今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ竹

のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良さんお約束のもの忘れては否よ。あゝ大丈夫忘れやしない併しコート何だッけねえ。あれだものを出がけにもあの位願つておいたのに。さう〜おぼえて居る八百屋お七の機關が見たいと云つたんだッけ。あら厭嘯ばつかり。それぢや丹波の國から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようございませすよ妾はもう歸りますから。あやまつた〜今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云はれる人がそんな御註文をなさう筈がない良之助たしかに承はつて參つたものは。ようございませす何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩くと往來の人が笑ふぢやないか。だつてあなた彼様な事ばツかしおつしやるんだもの。それだからあやまつたと云ふぢやないかサア饒舌で居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらまあ何うしませうねえ未だ先にもありますか知ら。何うだかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何處に。もうそれは言ひツこなしと止めるも言ふも一筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露の

ひぬまのあはれく、粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の鹽せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。はああの紅梅がい、ことねえと餘念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てかおむつましいこと、無遠慮の一言たれが花の唇をもれし言葉か跡は同音の笑ひ聲夜風に残して走り行くを千代ちやんあれは何だ學校の御朋友か随分亂暴な連中だなアとあきれて見送る良之介より低頭くお千代は赧然めり

(中)

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の開色なき聲さへ身にしみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人戀しくなると共に耻かしくつゝましく恐ろしくかく言は、笑はれんかく振舞は、厭はれんと假初の應答さへはかくしくは言ひも得せずひねる疊の塵よりぞ山ともつもる思ひの数々逢ひたし見たしなどあらはに云ひし昨日の心は淺かりける我が心我と答むればお隣とも云はず良様とも云はず言はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覺えて夜はすがらに眠られず思に勞れてとろくゝとすれば夢にも見ゆ

其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現の折の心ならひに言ひも出でずしてうつぶけば隠し給ふは隔てがまし大方は見知りぬ誰れゆゑの戀ぞうらやましと憎や知らず顔のかこち言餘の人戀ふるほどならば思ひに身の瘦せもせじ御覽せよとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば曉の鐘枕にひゞきて覺むる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬくの空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず今朝は何とせしぞ顔色わろしと尋ぬる母はその事さらに知るべきならねど面頬らむも心苦し盡は手すさびの針仕事にみだれその亂るゝ心縫ひとめて今は何事も思はじ思ひてなるべき戀かあらぬか言ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顔もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人をとか望み給ふらんそは又道理なり君様が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を盡して糸竹文藝備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は猶なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせんそれこそは悲しかるべきを思ふまじ思ふまじ他し意なく兄様と親まんによも憎みはじ給はじよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもぞといふまじく

断念めながら聞かす顔の涙頬につたひて思案のより糸あつとに戻りぬさりとては其おやさしきが恨みぞかし一向につらからばさてもやまんを忘られぬは我身の罪か人の科か思へば憎きは君様なりお聲聞くもいや御姿見るもいや見れば聞けばまざる思ひによしなき胸をもこがすなる勿躰なけれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずば我れも更に参るまじ願ふもつられれど火水ほど中わろくならばなかく心に心安かるべしよし今日よりはお目にもかゝらじ物もいはじお氣に障らばそれが本望ぞとて膝につきつめし尺ゆるめると共に隣の聲を其の人と聞けば決心ゆらくとして今までは何を思ひつる身ぞ逢ひたしの心一途になりぬさりながら心は心の外に友もなくて良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一點のにごりなければ我戀ふる人世にありとも知らず知らねば愛きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後の世つれなく我身うらめしく春はいづこそ花ともいはで垣根の若草おもひにもえぬ

柵 (下)

千代ちやん今日は少し快い方かえと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に

亂せし姿耻かしく起きかへらんとつく手もいたく瘦せたり。寢て居なくてはいけない何の病中に失禮も何もあつたものぢやないそれとも少し起きて見る氣なら僕に寄りかゝつて居るがいと抱き起せば居直つて。良さん學校が御試験中だと申すではございませぬか。ア、左様。それに妾の處へばつかし來て居らつしやつてよろしいんですか。そんな事まで氣にするには及ばない病氣の爲にわるいから。だつて何うもすみませぬもの。すむのすまないのとそんなこと氣にするより一日も早くよくなつて呉れるがよい。御親切に難有うございませぬですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い氣だから病氣がいつまでも癒りやしない君が心細い事を云つて見たまへお父さんや阿母さんがどんなに心配するか知れませぬ孝行な君にも似合はない。でも快くなる筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる臉に涙は溢れたり馬鹿な事と口には云へどむづかしがるべしとは十指のさす所あはれや一日ばかりの程に瘦せも瘦せたり片慥愛らしかりし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいと透き通る程に散りかゝる幾筋の黒髪縁は元の縁ながら油けもなきいたくしよ我ならぬ人見るとても誰かは勝斷えざらん限りなき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄く

のしごき帯前に結びたる姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなる、間なく睦
 み合ひし中になど底の心知れざりけん小き胸に今日までも物思ひはそも幾干を昨日の
 夕暮お福が涙ながら語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の原はお
 前様と云はるゝも道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひし
 とき瘦せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ紀念とも見給はゞ嬉しとて心細げに打笑みた
 る其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじを我罪恐ろしく打まもれば。良さ
 ん今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ聲の細さよ答へは胸にせまりて口にのぼら
 ず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。私と思つて下さいと云
 ひもあへずほろ／＼とこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちやんひどく不快でもなつ
 たのかい福や薬を飲まして呉れないか何うした大變顔色がわろくなつて来たおばさん
 鳥渡と良之助が聲に驚かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穂取りに流し元へ立
 ちしお福もあわたいしく枕元にあつまればお千代閉ぢたる目を開き。良さんは。良さ
 んはお前の枕元にそら右の方においでなさるよ。阿母さん良さんにお歸りを願つて下
 さい。何故ですか僕が居ては不都合ですかえ居てもわるいことはあるまい。福やお前

から良さんにお歸りを願つておくれ。貴嬢は何をおつしやいます今まであれ程お待遊
 ばしたのに又そんなことをお心持がおわるいのならお薬をめしあがれ阿母さまですか
 阿母さまはうしろに。こゝに居るよお千代や阿母さんだよいゝかえ解つたかえお父さ
 んもお呼申したよサアしつかりして薬を一口おあがりエ胸がくるしいア、さうだらう
 此まあ汗を福やいそいでお醫者様へお父さんそこに立つて居らつしやらないで何うか
 してやつて下さい良さん鳥渡其の手拭を何だとニ良さんに失禮だがお歸り遊ばしてい
 たいきたいとあゝさう申すよ良さんおさゝの通ですからとあはれや母は身も狂するば
 かり娘は一語一語呼吸せまりて見るゝ顔色蒼み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふ
 に良之助起つべき心はさらにもなけれど臨終に迄も心づかひさせんことのをしく
 て屏風の外に二足ばかり糸より細き聲に良さんと呼び止められて何ぞと振返れば。お
 説は明日。風もなき軒端の櫻ほろ／＼とこぼれて夕やみの空鐘の音かなし

た ま 禪

(一)

をかじかるべき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋木の春またぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのばる、優しの人品、それも其筈昔をくれば系圖の巻のこと長けれど、徳川の流れ未つかた波まだ立たぬ江戸時代に、御用お側お取次と長銘うつて、席を八萬騎の上座に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせては、姫と呼ばれしこともなけれど、面影みゆる長襦袢の縫もやう、母が形見か地赤の色の、襦袢残るもあはれ痛まし、住む處は何方、むかし思へば忍が岡の名も悲しき上野のうしろ谷中のさにと形ばかりの枝折門、春は立どまりて御覽せよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしと伸びあがれど、見ゆるは萱ぶきの軒端ばかり、四邊はめぐらす花園に秋は鳴かん蟲のいろく、天然の籠中に收めて月に聞く夜の心きいたし、扱もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ふる茶湯の主が其れ、母も同じく佛壇の上にとかや、孤獨の身は霜よけの無き花壇の菊か、添へ竹の後見と

もいふべきは、大名の家老職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松野雪三とて歳三十五六、親ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町餘りなる我が家より、雪にも雨にも朝夕二度の機嫌き、怠らぬ心殊勝なり、妻持たずやと勸むる人あれど、何の我がこと措き給へそれよりは娘さまの上氣づかはし、廿歳といふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐なし、適應の聲君おむかひ申したきものと、一意専心主おもふ外なにも無し、主人大事の心にくらべて世上の人の浮薄輕佻、才あるは多し能あるも少からず、容姿學藝すぐれたればとて、大事の御一生を托すに足る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ途、そも何とせば宜からんかと、案じにくれては寐すに明す夜半もあり、嫁入時の娘もちし母親の心なんのものは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり、雪三かくまで熱心に聲えらみも、糸子は目の前すぐる雲とも思はず、良人持たんの念慮、何として夢さらくあらんともせず、樂みは春秋の園生の花、ならば蝴蝶になりて遊びたしと、取とめもなきこと言ひて暮しぬ、さるほどに今年も空しく春くれて衣ほすてふ白妙の色に咲く垣根の卯の花、こゝにも一つの玉川かと、遣水の流れ細き處に影をうつして、

風なくとも涼しき夏の夕暮、いと子湯あがりの道遙に、打水のあと軽く庭下駄にふんで、裳とる片手は透し骨の塗柄の團扇に蚊を拂ひつ、流れに臨んで立たる姿に、空の月恥らひてか不圖かゝる行く雲の末四邊俄に暗くなる折しも、誰か思ひにか比す螢一つ風にたいよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只はあられず、ツト團扇を高くあぐればあなや螢は空遠く飛んで手元いかゞ緩びけん、團扇は卵の花垣越えて落ちぬ、こは何とせんと困じ果て、垣根の隙よりさしのぞけば、今しも雲足されて新に照らし出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間に此處へは来て、今まで隠れていも居しものか、知らぬこととて取亂せし姿見られしか、見られしに相違なしと、顔俄にあつくなりて、夢現うつぶけば、細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんお受取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取らんと見あぐれば恥かし、美少年、引かんとする團扇の先一寸押へて、思ひにもゆるは螢ばかりと思召すかと怪しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間に迷ひし心、本の心に還りし時は卵の花垣に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人になりぬ、さるにても彼の人はい誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなと、其方を眺めて佇立めば、

風に傳はる朗詠の聲いと床しさの數を添へぬ、糸子世は果敢なきものと思ひ捨て、盛りりの身に紅白粉よそほはず、金釵玉帯なんの爲の飾り、入らぬことぞと願みもせず、過ぎし心に恥かしや、我れ迷ひたりお姿今一度見まほしと伸び上がれば、モシと控へらる、袂の先、誰れぞオ、松野か何として何處へは、否何時の間にと詞有哉無哉支離滅裂

(二)

丸窓にうつる松のかげ、幾夜ながめて月も闇になるまゝにいと子の心その通り、打あけては問ひもならぬ、隣の人の素性聞たしと思ふほど、意地わるく誰れも告げぬのかそれとも知らぬのか、よもや植木屋の息子にてはあるまじく、さりとて誰れ住替りし噂も聞かねば外に人のある筈なし、不審さよの底の心は其人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾たびか顧みて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素性も知らず、心情も何も知れぬ人に戀ふとは、我れながら淺ましきことなり、定めなき世に定めなき人を頼む、婦人の身はかなしと思ひ絶えて、松野が忠節の心より、我大事と思ふあまりに様々の苦勞心痛、大方ならぬ志は知るものから、

それすら空ふく風と聞きて、耳にだに止めんとせざりし身が、何ぞや跡もかたも無き戀に磯の鮑の只一人もの思ふとは、心の問はんもうら恥かし、人知らぬ心の惱みに、昨日一昨日は雪三が訪問さへうるさくて、詞多くも交はさざりしを、如何に聞て如何ばかり案じやしけん、氣の毒のこととしてけるよ、いで今日の日も暮れなむとするを、例の足音する頃なり、日頃くもりし胸の鏡すいしき物語に晴らさばやとばかり、垣根の近邊たちはなれて、見返りもせず二三歩す、めば遣水の流れおと清し、心こゝに定まつて思へば昨日の我れ、恍惚として何ゆゑに物おもひつる身ぞ、廣き園生は我が爲めに四季の色をたゝかはし、雅やかなる居間は我が爲めに起居の自由あり、風に鳴る軒ばの風鈴、露のしたゝる釣葱、いづれをかしからぬもなきを、何をくるしんでか、要なき胸は痛めけん、思しさよと一人笑みして、竹椽のはしに足を休めぬ、晚風涼しく袂に通ひて、空に飛かふ蝙蝠のかげ二つ三つ、それすら漸く見えす成ゆく、片折戸を靜かに音なふは聞なれし聲音なり、いと子厨のかたに聲をかけて、玉よ雪三が参りたりと覺ゆるに、燈火とくと命令ながら、ツト立て門の方うち見やりしが、闇にもしるき白き手を舉げて、稚兒が母よぶやうに差まねぎつ、座敷にも入らではるかに待て

ば、松野は徐ろに歩みを進めて、早く竹椽のもとに一揖するを、糸子かるく受けて荒爾に、花庭の半を分けつ、團扇を取つて風を送れば、恐れ多しと突く手慇懃なり、此ほどは御不快と承りしが、最早平日に復らせ給ひしか、御年輩には氣鬱の病ひの出るものと聞く、例の讀書は甚だわろし、大事の御身等閑におぼしめすなど、知らねばこそあれ忠實なる詞にうら恥かし、面すこし打赤めて、否とよ病氣はもう癒りたり、心配かけしが氣の毒ぞと我れ知らず出る詫の言葉に、何ごとの仰せぞ、主従の間に氣の毒など、の御懸念ある筈なし、お前さまのおん身に御病氣その外何事ありても、それはみな恐生が罪なり、御兩親さまのお位牌さては恐生が亡父母に對して雪三何の申譯なければ、假令身にかへ命にかへても盡し参らする心なるを、よしなき御遠慮はお措き下されたしと恨み顔なり、これ程までに思ひくるゝ、其心知らぬにもあらぬを、この頃の不愛想我が心の悶ゆるまゝに、詞交はすが懶くて、病氣など、ありもせぬ偽りは何ゆゑに言ひけん、空おろしさに身も打ふるへて、腹たちしならば雪三ゆるしてよ、隔つる心は微塵もなければ、主の家來の昔は兎もあれ、世話にこそなれ恩も何もなき我身が、常日ごろ種々の苦勞をかける上にこの間中よりの病氣、それ程のこと

もなかりしを何故か氣が鬱きて、心にもなき所置ありしかもしれず、それがつい氣の毒にて言ひたるなれど、心に障らば二度とは言はじ、汝に捨られて我れ何としてか世には立つべき、心稚ければ目にあまる事もあらん、腹立しきことも多ならんが、外に寄る邊のなき身なるを、妹とも娘とも断念めて、教へ立られなば嬉しきぞと、松野が膝より動かして涙ぐめば、雪三身を退りて頭を下げつゝ、分にあまりし仰せお答への言葉もなし、お心細き御身なればこそ、思生風情に御丁寧のお頼み、お前様御存じはあるまじけれど、往昔の御身分おもひ出されてお痛はし、我れ後見まゐらす程の器量なけれど、真心ばかりは誰れ人にまれ劣ることかは、御心やすく思召せよ世にも軟れし智君迎へ參らせて花々しきおん身にも今なり給はん、鳥澁がましけれど雪三が生涯の望はお前さま御一身の御幸福ばかりと、言ひさして詞を切りつ糸子が面じつと略めぬ、糸子何心なく見返して、我は花々しき身にならん願ひもなく、まして智君へんの嫁入りせんのと、世の人めかしき望み少しもなし、唯汝さへ見棄すば、御身さへ厭はせ給はずば、我が生涯の幸福ぞかしてと嬌然とばかり打笑めば、松野じりりと膝を進めて、嬢さまはそれほどまで雪三を力と思召してか、それとも一時のお戯

れか、御本心仰せ聞けられたしと問詰むるを、糸子ホ、と笑ひて松野が膝に軽く手を置きつ、戯れかとは問ふだけでも淺し、親とも兄ともなく大切に思ふものをと、無心に言へば忝なしと一言語尾ふるへて消えぬ

(三)

洗ひ髪の束髪に薔薇の花の飾りもなき湯上りの浴衣でたち、素顔うつくしき夏の富士の額つき眼に残りて、世は萩の葉に秋風ふけど螢を招きし塗柄の團扇、面影はなれぬ貴公子あり、駿河臺の紅梅町に其名も薫る明治の功臣、竹村子爵との尊稱は千軍萬馬の裡にめぐみし、つぼみの花の開けるにや、それが次男に縁とて才識並び備はる美少年、今歳の夏の避暑には伊香保に行かんか磯部にせんか、知る人おほからんは佗しかるべし、牛ながら引入れる中川のやどり手近くして心安き所なからずやと、打うめかれしをお出入の蒙駝師某なるもの承はりて、やつがれが谷中の茅屋せき入れし水の風流やかなるけ無きものから、紅塵千丈の市中ならねば涼しきかげもすこしはあり、足を運び給は、忍ぶが岡の緑樹の朝つゆ、寝間着のまゝにも踏み給ふべし、螢名所の田畑も近かり、只天王寺の近き爲に、蚊はあまり少からねど、吹き拂ふに足る風十分

なり、兎に角思ひ立たせ給へとて、紀の守が迷惑氣にも見えず誘ふにぞそれ宜からんとて夏のさし入りより、離座敷を假住に三月ばかりの日を消し、が、歸邸の今日の今も猶存る記憶のもの二つ、隣家に遅咲きの卯の花、都めづらしき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花の眉羞ぢて背けしえり足の美しさ、返す團扇に思ひを寄せし時憎からず打笑みし口元などと、只眼の先に湧き來りて、我れ知らず思案に沈むことあり、さるにても何人の住居にや人品の高尙かりしは、無下に賤しき種にはあるまじ、妻か娘かそれすらも聞き知らざりし口惜しさよ、宿の主は隣のことなり、問は素性も知るべきものを、空しくはなど過しけん、さりとて今更問はんもうしろめたかるべしなんど、迷ひには智慧の鏡も曇りはて、や、五里霧中に彷徨ひしが、さすがに定むる所ありけん、慈愛二となき母君に、一日しかくと打明けられぬ、さはいへと人妻ならば及ぶまじきことなり確めて後断念せんのみ、浮たる戀に心を盡くす輕卒しさよとも思さんなれど、父祖傳來の舊交ありとて、其人の心見ゆるものならず、家格に随ひ門地を尊び、擇に擇て取る蟲喰栗も世には多かり、藻屑に埋もる、美玉又なからずや、あはれこの願ひ許容ありて、彼女が素性問ひ定め給はりた

し、曲りし尺に直なる物計り難く、迷ひし眼に邪正は分け難し、鑑定は偏に御眼鏡に任さんのみと、恥たる色もなく述べらるゝに、母君一度は憫れもしつ驚きもせしもの、斯くまで熱心の極まりには、何事を惹出でられんも知るべからず、打明けられしだけ殊勝なり、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の間に、ある夕暮の暮參の戻り、植木屋許くるまを寄せて、入りもせぬ鉢もの、買上げ、扱は園内の手入れを賞めなどして、逍遙の端に若し其人見ゆるやと、垣根の隣さしのぞけど、園生廣くして家遠く、萱ぶきの軒端半は掩ふ大樹の松の滴る如き緑の色の目に立て見ゆるばかり、聲さくよすがも有らざりければ、離亭に濫茶すゝりながらそれとなき物語、この四隣はいづれも閑靜にて、手廣き園生羨まじきものなり、此隣りは誰様の御別荘ぞ、松ばかりにても見惚るゝやうなりとほ、笑めば、いや別荘にはあらず本宅にておはすなりと答ふ、これを話の端緒として、見惚れ給ふは松ばかりならず、美しき御主人公なりといふ、然ればよなと思ひながら、故らに知らず顔粧ひつゝ、主は御婦人なるにや、扱は何某殿の未亡人とか、さらすば嬖妾などいふ人か、別して與へられたる邸宅かと問へば、いや然らず昔をいはゞ三千石の末流なりといふ、さらば旗下の娘御にや、親御なども

おはさぬか、獨住みとは痛はしきことなりと、早くも其の人ふびんになりぬ、此處の主も話好にや咳勿體らしくして長々と物語り出でぬ、祖父なりし人が將軍家の覺え淺からざりしこと、今一足にて諸侯の列にも加へ給ふべかりしを不幸短命にして病没せしとか、或は其頃の威勢は素晴しきものにて、今の華族何として足下へも寄らるゝものでなしと、口滑らして遠しく唇嚙むもをかし、それに較べて今の活計は、火の消えしも同じことなり、あれほどの地邸に公債も何ほどかは持ちたまふならんが、それも嬢さまが身じんまくだけ漸々なるべしと、我れ入立つて見しやうな話なり、老爺は何として其様に委しく知るぞと問へば、いややつがれば皆目知る筈なけれど、一昨年歿亡りし嬢さまの乳母が、常日頃遊びに來ての話なりといふ、お歳は十九なれどまだ十六七としか見えぬ、それから思へば松野どのは大層に老けられたりと我一人呑込顔、その松野殿とかは娘御の何ぞと問はれて、成程々々御存じは無き筈なりとて、更に松野の爲に願しばらく働かせぬ、されば暮やすき秋日の短時間に、糸子主従が動靜のあらまはしは、早くも竹村夫人が胸中に宿りける

(四)

心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗は、糸子に對する觀念の潔白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、主人大事の一筋道、振むく方もなかりしもの、寄る邊なき御身憐れやとの情漸う長じては、我れ一人をば天が下の頼もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔てなく遠慮なく甘へもしつすねもしつ、睦れよる心愛らしさよと思ひしが、そもく流れに塵一つ浮ぶ初めに、此心追へとも去らず、澄まさんと思ふほど掻きにごりて、眞如の月の影は何處、朦々朧々の淵ふかく沈みて、目に遮るは唯いと子が花の顔のみなり、かゝりけれども猶一片誠忠の心は雲ともならず霞とも消えず、流石に顧みる其折々は、慚愧の汗背に流れて悔悟の念胸を刺しつ、こは魔神にや魅られけん、有るまじき心なり、我れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給ひて、心やすく瞑目し給ひけれ、亡主に何の面目かあらん、位牌の手前もさることなり、いでや一對の聲君選み參らせて、今世の主君にも來世の主君にも、忠節のほど顯したし、然かはあれど氣遣はしきは言葉巧みに誠少きが今の世の常と聞く、誰人か心より我が敬する主君の半身となりて、生涯の保護せらるべきにや、おもへばいと覺束なきことなり、我れに主従の關係なくば、青柳いと子の手を取りて、一生を偕にせ

んもの雪三の外に又とあるまじ、さりながらこは叫ぶべきことならず、假にもかゝる心を持たんは恐ろし、いで今よりは虚心平氣の昔に返りて何事をも思ふまじと、覺悟いさましく胸すくしくなるは、青柳家の門踏まぬ時なり、糸子が愛らしき笑顔に喜び迎へて、やさしき言葉かけらるゝ時には、道に背かば背け世の嗤笑にならばなれ、君故捨つる名しんぞ惜しからず、今日は思ふ心もさん、明日は胸の中うち明けんかと、實直なる人ほど戀は苦し、斯るおもひの幾筋を燃り合はされし身なるものから、糸子が心は春の柳、そむかず靡かすなよくとして、無邪氣の笑顔いつも愛らしく、雪三よ菊塙の秋草盛りなりとか聞くを、此程過ぎさず伴ひては給はらずやと搔口説きしに、何の違背のある筈なく、お前さま御都合にて何時にてもお供すべしと、松野は答へぬ、秋雨はれて後一日今日はと俄に思ひ立て、糸子例の飾りなき扮装に身支度はやく終りて、松野が来る間まち遠しく雪三がもと我れより誘ひぬ、と見れば玄關に見馴れぬ履一足あり、客來にやあらん折わるかりと歩を回せしが、さりとも此處まで來しものを此ま、歸るも無益し、と、庭よりまはりて縁に上れば、客間めきたる處に話し聲す、やをら次の間にかいひそまりて聞くとおなしに耳たつれば、客はそも誰れなるにや、

青柳といふこゑいと子と呼ぶ聲折々に交りぬ、さても何事を談するにや、我れにも關係ありげなるを、襖に寄りて靜かに聴けば、断れつ續きつ物語の意味明瞭ならねど、大方は知れ渡りぬ、聞く人ありとは知らぬものゝ詞あまりは高からず、松野に向ひて坐したるは竹村子爵が家従の某、生命に依りて糸子縁談の申込なるべし、其時雪三決然とせし聲音にて、折角の御懇望ながら糸子さま御儀他家へ嫁したまふ御身ならねばお心承はるまでもなし、雪三断然お断り申す御歸郎のうへ御前體よろしく仰せ上げられたしと言放てば、左様仰せあらんとは存せしなり、然らば翌君としては迎へさせ給はずやといふ、否とよ兔に角に御身分柄つり合はず、末のほど覺束なければと言ひかゝるを打けて、そは御懸念が深すぎすや、釣合ふとつり合ぬは御心の上のことなり、一應いと子さまの御心中お伺ひ下されたし、其お答へ承はらずば歸郎いたし難し平にお伺ひありたしと押返せば、それ程に仰せらるゝを包むも甲斐なし、實の事申上げん、糸子さまには最早定まる人おはすなりそれ故のお断りぞと莞爾と笑めば、家従は少し身を進ませて、始めて承はりたり何方への御縁組にや苦しからずば仰せきけられたしと雪三の面屹と見れば、糸子も間の襖の際にびつたりと身を寄せつあやしこの

とよと耳そばだつれば、松野例に似ぬ高調子に然らば聞かし参らせん御歸郎のうへ御主君、殊に縁君にお傳へ願ひたし、糸子が契約の良人とは、誰れにもあらず、松野雪三郎ち斯くいふ愚生

(五)

戀は一方に強く一方に弱きものと聞くは偽り孰れすてられぬ花紅葉の色はなけれど松野の心根あはれなり、さりとして竹村の君が優しき姿一度は思ひ絶えもしたれ、淺からぬ御志の忝なさよ、斯く思ふは我れに定操の無ければにや、脆き情のやる方もなし、扱も松野が今日の詞、おどろきしは我のみならず竹村のお使者もいばかりなりけん、立歸りて斯々なりしとも申さんに、何は措きて御さげすみ恥かし、睦まじかりしも道理、主従とは名のみなりしならんなど、彼の君に思はれ奉らん口惜しさよ、これも誰ゆる雪三故なり、松野が邪心一つゆるぞ、然はあれどもお使者歸路につき給ひし後、身を投げ出しての詞今も忘れ難し、御身は竹村をゆかしと思すか、縁どのとやら慕はしく思ひ給ふか、さらばいばかり雪三憎しと思すなるべし、さりながら往日の御詞は偽りなりしか、汝さへに見捨ずば我が生涯の幸福ぞと、忝けなき仰せ承は

りてよりいと狂ふ心留がたく、口にするは今日始めてなれど、盡したる心はおのづから御覽じしるべし、姿むくつけく器量世に劣りしとて厭はせ給は、我れも男のはしなり、きかれ参らせずとて徒やはある、よその眺めの妬ましきよりはと、花に吹く嵐のおそろしき心も我れ知らず起らんや、許させたまへとて戀なればこそ忠義に鍛へし、六尺の大男が身をふるはせて打泣し、姿おもへば扱も罪ふかし、六歳のむかし我れ兩親に後れし以來、伸びし背丈は誰の庇護かは、幼稚の折の心ならひに、慎みもなく馴れまつはりて、鐵石の心うごかせしは、構へて松野の咎ならず我心のいたらねばなり、今我れ松野を捨て、竹村の君まれ誰れにまれ、寄る邊を其處と定めなばあはれや雪三は身も狂すべし、我幸福を求むるとて可惜忠義の身世の嗤笑にさせらるゝことかは、さりとしてこれにも従ひがたきを、何として何とせば松野が心の迷ひも覺め、竹村の君へ我が潔白をも表されん、いづれにまれ憎き人一人あらば、斯くまで胸はなやまじを、果敢な身やとうち仰げば空に澄む月影きよし、臆を寄せたる丸窓のもとに何の叫きぞ風に鳴る萩の友ずり、我が陰言かあはれ耻かし、見渡す花園は夜の錦を月にほこりて、轉ぶ白玉の露うるはし、思へば誰れも消ゆる世なるを、我身一つな

き物にせば、いづくに何の障りかあるべき、我れ浮世の厭はしさは今はじめたることならず、捨てんは豫てよりの願ひなり、歎くべきことならずと嫣然と笑みて静かに取出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつ、書きながす文誰々が手に落ちて明日は紀念と見ん名残の名筆

五月雨

(一)

池に咲く菖蒲かきつばたの鏡に映る花二本ゆかりの色も薄むらさきか濃むらさきならぬ白元結きつて放せし文金の高髻も好みは同じ丈長の櫻もやう淡泊として色を含む姿に高下なく心に隔てなく増にせめぐ同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水と魚の君さまなくば我れ何とせんイヤ汝こそは大事なれと頼みにしつ頼まれつ松の梢の藤の花房かゝる主従の中またとありや梨本何某といふ富豪の娘に優子と呼ぶるゝ容貌よし色

白の細おもてにして眉は霞の遠山がた花といはいと譬喩を引くもこちたれど二月ばかりの薄紅梅あは雪といふか何か知らねど濃からぬほどの白粉に玉虫いろの口紅を品よしと喜ぶ人ありけり十九といへど深窓の育ちは室咲きも同じこと世の風知らねど松風の響きは通ふ爪琴のしらべに長き春日を短しと暮らす心は如何ばかり長閑けかるらん頃は落花の三月盡ちればぞ誘ふ朝あらしに庭は吹雪のしろ妙も流石に袖は寒からで蝶の羽うらのうらくとせし雨あがり露縁先に飼猫のたま軽く抱きて首玉の絞り放し結ひ換ふるものは侍女のお八重とて歳は優子に一つ劣れど劣らず負けぬ愛敬の片断誰れゆる寄せる目元のしほの莞爾として手を放しつ不圖見返りて眉を寄せしが又殊更にホ、と笑つて嬢さま一寸御覽遊ばせ此まお様子の可笑しいことよと面白げに誘はれて何ぞとばかり立出づる優子お八重は何故に其様なことが可笑しいぞ私には何ともなきをと惱ましげにて子猫のぢやれるは見もやらで庭を眺めて茫然たり嬢さま今日もお不愉快御坐いますか否左様もなけれど何うも此處がど押しして見する胸の中には何がありやおもふ思ひを知られじとか詞をかへて八重やお前に問ふことがある春につきての花鳥で較べて見て何が好きぞ扱も變つたお尋ねそれは心々でも御坐いませうか歸雁が憐れ

に存じられますさりとては異なご都の春を見捨て、行く情なしがお前は好きか憐れといへば深山がくれの花の心が無かしと察しられる世にも知られず人にも知られず咲て散るが本意であらうか同じ嵐に誘はれても思ふ人の宿に咲きて思ふ人に思はれたら散るとも恨みはあるまいもの谷間の水の便りがなくば流れて知られる頼みもなしマアどの位悲しからうと入らぬ事ながら苦勞ぞかしてと流石に笑へばテモ嬢さまは花の心を能く御存じ私が歸雁を好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の曉月夜さては春雨の夜半の床に啼て過ぐる聲の別れがしみんゝと身にしみて悲しいやうな淋しいやうな又來る秋の契りを思へば頼母しいやうにもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の事が思はれますと打しをるればそれは道理わたしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も居たなら廿へるものをと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ほそくも悲しくもあらうなれど及ばずながら私は力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれと歳上なれば其約束ぞいつも云ふことながら私は眞實の同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あればこそ親どもばかりか私までめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には何うも申されねどお前さまのお優しさは身にしみて忘れませぬ勿躰な

けれどお主様といふ遠慮もなく新參の身のほども忘れて言ひたいまゝの我儘ばかり雨親の傍なればとて此上は御座いませぬさりながら口惜しきは性來の鈍きゆる到底も御相談の相手にはなされて下さる等もなし別ものに遊ばすと知りながらお恨みも申されぬ身の不束がうらめしう存じますとホロリとこぼす膝の露を優子訝しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔て隠しだするものぞ母さまにさへ申さぬこともつひに話さぬ時はなきを今日に限つて其やうな事いはれる覚えは何もなければとまあ何と思ふてぞといふ顔じつと打仰ぎてそれ／＼それが矢張お隔て何故其やうにお隠し遊ばす兄弟と仰しやつたはお偽りか、偽りではなけれど隠すとは何を、デハ私から申しませう深山がくれの花のお心と言ひさして莞爾とすれば、アレ笑ふては言はぬぞよ

(二)

思ひ入る路は一筋なれど夏引きの手引きの糸の亂れぐるしきは戀なるかや優子もとより才はじけならず柔和しけれと利發にて物の道理あきらかに辨へながら聞きは晴れぬ胸の雲にうつ／＼として日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひのなき

身ならねば他人ごとなりとも悲しきを假初ならぬ三世の縁おなじ乳房の寄りし身なり
 山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日さへ東の方に足な向けそ受けし御恩は斯々云々
 母の世にては送りもあへぬに和女わすれてなるまいぞと寐もの語に言ひ聞かされ幼心
 のそもくより胸に刻みしお主の事ましてや續く不仕合に寄る方もなき浮草の我れ孤
 の流浪の身の方と頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的には
 譯もあれど思ひはいすかのほしも無く尋ぬる人を引かへて尋ねぬならねど身に恥づれ
 ば我れとは訪はれぬお主のもとへ又見出されて二度の恩あるが中にも取分けて娘さま
 の御慈愛は山の中の嶺たかきが上も高く海の中の沖深きが上も深しお可愛や誰れ人を
 彼のやうに思しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新参の勝手も知らずお手も用
 のみ勤めれば出入のお人多くも見知らず想像には此人かと思ゆるもなければ好みは人
 の心々何がお氣に染みしやら言はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも
 無なるべしお慎み深きはさることなれど御病氣にでも若ならば取かへしのなるべきな
 らず主は誰人えぞ知らねど此戀なんとしても叶へ参らせたし嬢さまほどの御身ならば
 世界に苦もなく憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとては又苦の世の中やと我身に

比べて可憐がり心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ染めし初花ごろも色には
 出でじとつゝみしは和女への隔心ならず有やうは打明けてと幾たびも口元までは出し
 ものゝ恥かしさにツイ言ひそゝくれぬ和女はまだ昨日今日とて見参らせし事も無きな
 らんが婢女どもは陰口にお名は呼ばずて光氏さまといふとかやお姿は察せよかしそれ
 に引かれていはなければと彼の人は父さま無二の御懇意とて恥かしき手前に薄茶一服参
 らせ初しが中々の物思ひにて袂紗さばきのしづ心なく成りぬるなり扱もお姿に似ぬ物
 がたき御氣象とや今の世の若者に珍らしとて父様のお褒め遊ばす毎に我ことならねど
 面赤みて其座にも得堪へねど慕はしさの数は倍りぬさりながら和女にすら言ふは始め
 て言はぬ心は描かぬ畫もおなじ事御覽じ知る筈もあらねば若やの頼みも無きぞかし笑
 はるゝか知らねども思ひそめし最初より此願ひ叶はずは一生一人で過ぐす心愛きに送
 る月日のほどに思ひこがれて死ねばよし命が若しも無情くて如何に美はしき夫人むか
 へ給ひぬとも愛らしき兒生れ給ふとも聞く身のつらさが思はるゝぞとてほろゝと打
 泣けばお八重かなしく身を寄せてお前さまは何故そのやうに御心よわい事仰せられる
 ぞ八重は素より愚鈍なり談してからが甲斐なしと思召してか馴れぬ御使ひも一心は一

心彼方さまどのやうな御情しらすであらうとも貫かぬといふ事あるやうなし何ともし
てお望み屹度叶へさせますものを御内端すぎたのお物思ひくよ／＼ばかりあそばせば
こそ昨日今日は御顔色もわるし御病ひでも遊ばしたら御兩親さまは更なる事なり申す
も慮外ながら妹と思ふぞとの御慈愛に身は姉上を儲けし心お前さま大切なほどお案
じ申さずには居りませぬを忌はしや何ごとそ一生一人で世を送るの死んで思ひを脱れ
たしのと突きつめた御心に必らずおなり遊ばすなと宥める身さへ眼はうるみぬ、堪忍
せよかし和女にまで苦をかけておらぬ思ひに心を盡くすが我身ながら口惜しきなりさ
りとても彼の人の事断念めがたきは何ゆゑぞ言はで止まんの決心なりしが親切な詞き
くにつけて日頃の恨みもなくなりぬと漸々せまりくる娘氣に涙に咽びて稍ありしが、
八重さぞ打つけなと呆れもせんが一生の願ひぞよ此心傳へては給はるまじや嬉しきお
返事聞きたしとは努々思はねど誰れ故みちかき命ぞとも知られて果てなば本望ぞかし
と打奏るれば、又しても其様なこと御前さま此れ／＼とお傳へ申さば好きお返事は知
れた事なりもうくよ／＼とは思しめすな、いや／＼それは八重が知らねばぞ杉原さま
は其やうな柔弱な放埒なお人で無ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者と

お怒りにならば何とせん、それは餘りのお取越苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情
き仰せのある筈なし扱も御戀人は杉原さまとやお名は何とぞ、三郎さまと申すなり此
頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひに御歸宅ゆる知らぬのは道理と云ひかけ
てお八重の顔さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の大恩ぞかし諄うは言はぬ心は是れよ
と合はす手に嬉しき色はあらはれたり

(三)

雲雀のあがる麥生な／＼に見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔は何の苦か有
りし野川の岸に菊の花手折るとて流れ一筋から渡りし給ふ時我はるかに歳下の身のこ
ましやくれにも君さまの袂ぬれると袖柳かけて参らせしを如何に人にも笑はれけん
思へば其頃が羨まし君さま東京へ歸り給ひし後さま／＼續く不仕合に身代は亂離荒廢
あるが上に二親引つゞきての病死といひ憂きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨空に
心のしめる我れを捉へて郡長の悴づらが些少の恩鼻にかけての無理難題やり返して遣
りたけれど女子の身は左様もならず柳にうけるを宜きことにして金やらん妾になれ行
々は妻にもせんと口惜しき事の限り聞くにつけても君さまのことなつかしく或る夜に

まぎれて國を出でつ漸う東京へは着きしもの、當處なければ御行方さらに知るよしな
く様々の憂き艱難も御目にかゝる折の衰められ種にと且は心に樂しみつゝ賤しき仕業
も身は清し行ひさへ汚れずばと都乙女の錦の中へ木綿木服に菅笠脚絆はづかしや女子
の身不似合の菓物賣りも偏に生計の爲のみならず便りもがな尋ねたやの一心なりしが
縁しあやしく引く方ありて不圖呼び入れられし黒塗塀お勝手もとに商ひせし時後にて
聞けば御稽古がへりとや嬢さまの召したる車勢ひよく御門内へ引入るゝとて出でんと
する我と行違ひしが何に觸れけん我がさしたる櫛車の前にはたと落ちしを知らず曳き
しかばなど堪るべき微塵になりて恨みを地に殘しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給
ひ此ぞこねたるは我身に取らせよ代りには新らしきのを取らすべしとの給ひしかど素
より落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理損ねしとて恨みもあらず況てや代りをとの
望みもなし是れは亡母が紀念のなれば他人に奉るべき物ならずとて拾ひ集めて懐にせ
しをいとしく御ふびんがり扱は親も無き人か憐れのことや先庭口より我が部屋まで
來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴れたる御座敷の結構お庭のたゝすま
ひ華族さまにやと疑ひしは一に嬢さまの御舉止にも依りしものが其お美しくし嬢さま

御親切にも女子同志は互ひぞとて御優しき御詞我もしきりに嬉しくて尋ぬる人ありと
こそ明さいりしが種々との物語に和女の母御は斯々の人ならずやと思ひ寄らぬ御問ひ
寔に然かぞ何として御存じと云へば忘れてなるべきか和女と我れとは姉妹ぞかし我れ
は梨本の優なるをとて手を取りての御喜び扱は母が乳を參らせたる君なりしか御目に
かゝりし嬉しさに添へて落ぶれし身はづかしと打泣きしに榮枯は時なるものを歎くこ
とかは萬は我れに委せよかし悪きやうには爲すまじければ今日より此處に身を落つけ
すや母様には我れ願はんとて放し給はず奥様も又くれくの仰せに其まゝの御奉公都
會なれぬ身とて何ごとも不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古參の婢女
も侮らず昨日の我れ忘れしやうな樂な身になりたるは嬢さまの御情一つなり此御恩何
として送るべき彼の君さまに環會は二人共々心を合せてお話し相手に成るべきをと
何につけても偲ばるゝは又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま昨日今日のお物思ひ命
にかけてお慕ひなるゝ主はと問へば杉原三郎どのとや三輪の山本しるしは無けれど
尋ぬる人ぞと知る悲しき御存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま
可憐やと思はぬならねど彼の人何として取持たるべき受合ひては立ちしものゝ此文に

は何の文言どういふ風に書いてあるにや表書きの常磐木のきみまゐるとは情無き人へといふ事か岩間の清水と心細げには書き給へど扱も扱も御手のうるはしさお姿は申すも更なり御心だてと云ひ御學問と云ひ御方さまに思はれて嫌とはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身としてくらべ物になる心はなけれど今日までの愛き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思ふそれ一つに萬の願ひをかけ置きしに今日の前に逢ふ日は來ても逢ふが悲しき事儀に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を搜れと仰せらるゝともそれに違背はすまじけれど我が戀人取持たんこと何う諦めてもなる事ならず御恩は御恩これは是なり寧ろお文取次いだる牀にして此儘になすべきか いや／＼それにては道がたゝず實は斯々の中なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそはそれで宜けれどあれほどまでに思召し入れたもの然らばと云ひてあきらめのつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現在お心知りながらそれも辛しこれも愛しと迷ひに心も夕暮の空お八重つく／＼ながむれば明日も晴日か西の方のみ紅の雲たな引きぬ

(四)

男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みと言の葉なりけん杉原三郎と呼べるゝ人面ざし清らかにけにくからず誰か目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我故に人二人まで同じ思ひに苦むともいざやしら檜の若葉の露風に散る夕暮の散歩がてら梨本の娘病氣にて別荘に出養生とや見舞てやらんとて柴の戸音づれしにお八重初めて對面したり逢はゞいはんの千言百言うさも辛さも胸に吞みて恩とも言はず義理とも言はず湧かへる涙も人事にしておいとしや嬢さま此程よりのお煩ひのものはと云はゞ何ゆゑならず温和しき御性質とて口へとは出し給はぬほど猶さらに御いとほしお心は中々我が言ふやうなものにはあらず此お文御覽せばお分りになるべけれどお前様つれなきお返事若し遊ばされなばあのまゝに居給ふまじき御決心ぞと見る目は如何につらからぬことか久し振にて御目にかゝりし我身の願ひこれ一つなり叶へさせ給はゞ嬉しがるべきをとて取次ぐ文の思ひ切りても涙はろ／＼膝に落ちぬ義理といふもの世になかりせば言ひたきこといと多し別れしよりの辛苦は如何に或時はあらぬ人に迫られて身の通ればの無かりし時操はおもし命は鷲毛の雪の夜に刃手に取りしこゝろあゝお討ね或時はお行方たづね能根根みは長也大河の水は沈む覺悟も極めむかき引

かれし後髪うしろがみの千筋ちぢんにはあらで一筋ひとぢんに逢あふといふ日を頼たのみにして今日けふまでも過すせし身みなりと言いひたれど嬢ぢやうさまの戀こゝろも我が戀こゝろにも淺あき深かさのあるべきにあらす我われまだ其事そのことを口くちにせねば入譯いりわけ御存ごぞんじなきこそよけれ御恩ごおんがへしには望のぞみ叶かなへさせまして悦よろこび給たまふを見るが樂たのみぞと我われを捨すてゝの周旋しゅうせんなるを仇あだしごとと思おもふまじさるにても君様きみさまのお心氣こゝろづかはしと仰うぎ見れば端はじなくも男をとこはじつと暗くらめ居ゐたりハツと俯うつく櫛紅葉しほもみせのかげ美うらしき秋あきの山里やまさとに葎たけがりして遊あそびし昔むかしは蝶々てつてつの夢ゆめとたちて姿すがたやさしき都風みやこふうたれに劣せらん色いろなるかは愁うれを含めめど愛あいらしき雨あめの撫な子こしをれて床ゆかし三郎さぶらうの心何こゝろなんと知らねど優子ゆうこの文ふみを手てにとりつ淺あからぬお心辱こゝろかたじけなしとて三郎さぶらう喜びしと傳つたへ給たまへ外ほかならぬ人の取次とりつぎ殊更ことさらに嬉うれしければ此文このふみは賜たまはりて歸宅きたくすべしとて懷中ふところに押おいれつゝ又またこそと坐すを立つに扱さは嬢ぢやうさまの心酌こゝろくみとり給たまひてかと嬉うれしきにも心こゝろぼそく立たち上あがる男をとこの顔かほそと窺うかがひてほろりとこぼす涙なみだを隠かくし嬢ぢやうさまにも嘸まお喜よろこび我身わがみとても其通そのとほりなり御返事おへんじ屹度きつとまぢますと云いへば點頭うなづながら立出たいづる廻まり椽えん端はの橋袖はしなでに薰かりていつしか月に中垣なかがきのほとり吹ふくばる若竹わかたけの葉風はかぜさらさらとして初はつほとゝぎす待つべき夜よなりとやをら降立おりたつ後姿うしろすがた見送みおくるものはお八重やへのみならず優子ゆうこも部屋へやの障子しょうじ細目こまめに明あけて言いはれぬ心々こゝろくを三郎さぶらう一人ひとりす

いしげに行々ゆくゆく吟げんずる詩かうたきいたし

(五)

便たりまつ間まの一日ひとひ二日ふたひ嬉うれしきやうな氣きづかひな八重やへに遠慮えんりょは入いらぬものゝ又また言いひ出だすかと思おもはるゝも恥はづかしくじつとこらゆる返事へんじの安否あんびもしやと思おもへばもしやになるなり八重やへは大丈夫だいぢやうぶと受合うけあへどそれは氣きやすめの詞ことばなるべしあの文ふみとても御受取ごうけとりになりしやならずや其場そのばで其まゝ御突戻おつきたりしになりたるを我われに力落ちからおとさせまじとて八重やへの繕つくろひて居ゐるにはあらずやいやゝ八重やへとして其様そのようの事ことある筈はずなし人を疑うたがふは罪つみふかき事ことなり一日ひとひ二日ふたひ待給まちたまへ好き御返事おへんじの参まゐるは定じやうぞと言いひしに違ちがひは無なかるべし若もしさうならば何なんとせん八重やへは上うへもなき恩人おんじんなれば何事なにことなりとも氣きに入いることとして悦よろこばせたり歳としは下したなれど分別ぶんべつある人ひととて言ことば寡ひやくなれば願ねがひはあるや望のぞみはなしや知しれ難がたきを何なんとせん扱さりも人妻ひとつまとなりての心得こころえは娘むすめの時ときとは異なるものとか御氣おきに入いらばよけれど若もし飽あかれなば悲かなしき事ことよ先まづそれよりも覺束おぼつかなきはあの文ふみのお返事おへんじなり御覽ごらんにはなりたりとも其まゝ押おしまりめ給たまひしやら却かへつて御機嫌ごきげんをそこねもして愛想あいせづかしの種たねにもならば言いはぬにまさる辛つらさぞかし君きみさまこそ無情むじやうしとも思おもふ心に二ふたつは無なし不孝ふかうか知らねど父ちち

機母さま何と仰せらるるも他處は誰れ長火に持つべき八重は平生長火は持たず
 と云ふものから我が身とは自から異なりて係はることなく心安がるべし羨ましやと羨
 まるゝ我をば知らず吐息をもらしぬお八重はつくづく有し日の事を思ふに 男心の頼
 みがたさよ我れ周旋する身として事調ふは嬉しけれと優子どの、心よく見えたり三郎
 喜びしと傳へ給へとは餘りといへば昔を忘れ給ひしお詞なりとおもふは我身の妬みに
 やお主様ゆるには身を殺して忠義を盡くす人さへあるを我一人にて愛きをしのばし何
 處も事なく治まるべきなり何氣なき娘さまが八重や八重やと話相手に遊ばすを御恨み
 申すは罪のほども恐ろし、何ごとも残さず忘れてお主さまこそ二代の御恩なれ杉原三
 郎といふお人もとよりのお知人にもあらず況てや契りし事も何もなし昨日今日逢ひし
 ばかり併かもお主さまの戀人に未練のつながる筈はなし御縁首尾よく整へて睦まじく
 暮らし給ふを見るが切めての樂みなり我れは望みとて無き身なれば生涯この家に御奉
 公して御二方さま朝夕の御世話さては孩兒さま生れ給ひての御抱き守り何にもあれ心
 を責めて仕へんかそれは何としてもなる事ならず兎ても角ても愛き世なれば人訪はぬ
 深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさは宜かるべけれどそれすら彼の人見棄てゝは

入り難かるべしとてつくづくと打歎けど人に見すべき涙ならねば作り笑顔の片頬さび
 しく物案じの主慰めながら我れ先づ亂るゝ暮の戀はくるしきものなるにや成るとは見
 えて覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまはお廿四とやお歳よりは老けて見え
 給ふなり和女は何と思ふぞとて臆氣なこと言ふて見る心や流石に通じけんお八重一日
 にこやかに娘さまお喜び遊ばす事あり當て、御覽じろと久し振の戯れ言さりとはい餘り
 に廣すぎて取處が分らぬと微笑めばさらば端を少し聞し參らせんお前さま何より何よ
 りお嬉しと思召す事あるべしそれなりとて容易くは言ひもせずそれぞとは知れど猶も
 知らぬ顔に八重が常に似ぬことよ先づ言ふて聞かしても宜さうなと打怨ずれば其や
 うにおいそぎなされますなと打笑ひながら彼の君より御返事が参りしなりこれがお嬉
 しからぬ事かと叫かれて耳の根くわつと熱くなり胸とらわかれて噛む袖の下に密と
 置く藻しほぐさ俄には手にも取らぬをお八重察して侷めつゝ取まかなひて封を切らす
 に文にはあらで一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな

みるべきものを空の月かげ

意味の存する所いづこそや茫として開きわか葉のかけいと迷ひは茂り合ふばかり晴るよしなき空の月の心々に判じて見れど何れ真意と得ぞわき難く喜ぶべきか歎くべきかお八重はお八重優子は優子斯く云はれなば斯くせんの決心互に堅けれと思ひの外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つながめに飽かねど吐息されて八重はマア何と思ふぞと人の詞を待ちて見るあな覺束なの三十一文字や

(六)

怪しや三郎の便りふつと聞えずなりぬ待つには一日も詫しきを不審しかりし返事の後今日や來給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日愛き身につらき卯月も過たり五月雨ごろのしめり勝に軒の葱は我がたぐひの引きては菫かねと池のあやめの根ながき思ひにかき暮らされて袖にも水かさの増さりやすらん此處は別莊の人けも少く氣に入りの八重を措ては別莊守りの夫婦のみなれど最愛の娘病氣との事なり本宅よりの使ひ絶間なければ事によそへて杉原のこと問はするに本宅にも此頃さらに参り給はずといふさるにても何とし給ひしにや我心稚くてうちつけに文など参

らせたるを如何に厭はしと思しながら返しせざらんも情なしとてあれよりはそれとなく御出のなきか此頃のお歌の心は如何に茂るわか葉の今こそは聞けれど時節を待たば空の月の逢みるべきぞとならば嬉しけれど若しやの願ひに左様見ゆるにや寧つらからば一筋ならで頼みのあるだけ惑はるなり扱もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處へこそ御入來なくとも本宅へまで御疎遠とは訝ししそれほどまでに御嫌ひになるほどなら優しげな御詞なせ仰せおかれけん八重が思ふも恥かしきまであの時は嬉しかりしを此まゝに見返りもし給はずは今さら面も向けたし悲しき事よと娘氣に頼みをかけて見つ又ときつ思案にもつるゝ撚糸の八重が歎きは亦異なり茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事ならずや闇き迷ひと歎じ給へとそれ悟りたればこそのお取持なれ思ひ合ふ中のお二方に我が生涯の望みも頼みもお譲り申して思ひ置くこと聊かなきを何はかりての御遠慮ぞや身を観ずればお恨みも未練も何もあらずお二方さま首尾とへのひし曉には潔よく斯々して流石は節操を立つるとだけ君さまに知られなばそれを思出の我れなるに此身ある故に娘さまの戀叶はずとせば何とせん身退くは知らぬならねと義理ゆる斯くと御存じにならばお情ぶかき御心として人は兎もあれ我よくば

と仰せらるゝものでなしさらでもお弱きお性質なるにいかにか突詰めたお覺悟をも遊ばすまじきものならず御最愛のお一人子とて八重や何分たのむぞとむづかしい大旦那さまへ我身風情に仰せらるゝはお大事さのあまりなるべし彼につけ此につけ氣づがはしきは彼の人の事よ有りし日の對面の時此處に居給ふとは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦さこそなるべけれど奉公大事に勉め給へと仰せられしが耳に残りて忘れぬなりあれほどにお優しからずばこれほどまでも歎かじと斷ち難き絆つらしとて人見ぬ暇には部屋のうち伏沈みぬいづれ劣らぬ雙美人に慕はるゝ身嬉しかるべきを何を厭ふてか三郎かき絶えて影も見せず疑念は重なる五月雨の雲薄らぐべき由もなくて世をうみ梅子の落つる音もそいろ淋しき日を幾日小暗き窓のあけくれにをち返りなく山時鳥の唐紅にはふり出でねと涙に袖の色かはるまで同じ歎きを別に知る主従の思ひさても果敢なし優子はいとゞ世を知らぬ身のお八重が素振り得も察せず氣の毒や我身大事にかけるとて瘦せ見ゆるほど心配させし和女の情は忘れぬなりさりながら如何ほど盡くしてくるゝとも成るまじき願ひぞとは漸うに斷念めたりそれにつきて又別に父様母さまへの御願ひあれど御二方なり和女なりに歎きをかくるがづらきぞとて

しみぐと物語りつお八重の膝に身をなげ伏して隠しもやらぬ口説ごとにお八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよと泣きしがお前さまに其やうなお覺悟させますほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは訝しけれどつれなき御返事といふにもあらぬを早まつてのお考へはお前様のやうにもなし今しばしの御辛抱ぞ其うちには何ともして屹度お喜ばせ申すべし八重が一心を憐れとも思召して其やうな悲しいことお聞かせ遊ばすなとて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世では何でありしやら姉妹にもなき親切この後とも頼むぞやこれよりは別しての事何ごとも汝の異見に従はん最う今のやうな事言ふまじければ免してよと詫らるゝも勿躰なく待てば甘露と申しますぞやと輕げに云へば義理は重し袖に晴れ間は見えぬものゝ限りあればにや今日珍らしく齋啼きて雨のなごりに軒の露に照る日あたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地よげなるを垂籠てのみ居給ふは御體にも毒なるものとお八重さまへに誘ひて遊りちかき野の景色田面の庵の詫たるも又をかしかるべし御覽せずやとわりなくすゝめて柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ人の心のうやむやは知らずや茂る木立すゝしく袖に吹く風むねに欲しゝ植わたす小田の早苗青々として處々に鳴き立つ蛙の聲さまへなるあれ

も歌かや可笑しとしてほ、笑む主に我も嬉しく彼處の萱ぶき此處の垣根お庭の中に欲し
きやうなりあの花は何ならんと小走りして進み寄りつ一枝手折りて一輪は主一輪は我
れかざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらす畔路つたひ行返りて遊ぶともなく
暮らす日の鳥も寐に歸る夕の空に行く雲水の僧一人たたく月下の門は何處ぞ羨ましの
身の上やと見送れば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくオ、と叫びぬ

別 霜

(一)

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠は邪魔くさし覺め際まではと引しむる利慾の心の
秤には黄金といふ字に重りつきて増す實なき子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初め
ぬ覆車のそしりも我が棍棒には心もつかす握つて放さぬ熊鷹主義に理屈はいつも筋違
なる内神田連雀町とかや、友轉りの喧しきならで客足しげき呉服店あり、賣れ口よけ

れば仕入あたらしく新田と呼ぶ苗子そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にやに下るあるじ
の運平不惑といふ四十男赤ら顔にして骨たくまじきは薄醬油の鱧鯨に育ちて世のせち
辛さなめ試みぬ附け渡りの旦那株とは覺えざりけり、妻はいつ頃なくなりけん、形見
に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべど齋が産んだるおたかとして今年二八のつぼみの花色
ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめと世間に出さぬも道理か荒き風
當りもせばあの柳腰なにとせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の縁日に後姿のみも
拜し得たる若ものは榮譽幸福上やあらん卒業試験の優等證は何のものは國會議員の
椅子にならべて生涯の希望の一つに數へいる、學生もありけり、さればこそ一たび見
たるは先づ驚かれ再び見たるは頭やましく駿河臺の杏雲堂に其頭腦病患者の多かり
しこと一つに此娘が原因とは商人のする掛直なるべけれど兎に角其美は争はれず、姿
形のうるはしきのみならで心さまのやさしさ情の深き絲竹の道に長けたる上に手は瀧
本の流れを汲みてはしり書うるはしく四書五經の角々しきはわざとさけて伊勢源氏の
なつかしきやまと文明暮文机のほとりを離さず、さればとて香爐峯の雪に簾をまくの
才女めきたる行ひはいさゝかも無く深窓の春深くこもりて針仕事に女性の本分を盡す

心懸け誠に殊勝なりき、家に居て孝順なるは出で、必らず貞節なりとか、これが所天と仰がれぬべく定まりたるは天下の果報の一人じめ前生の功德いか許り積みたるにかと世にも人にも羨まるゝはさしなみの隣町に同商中の老舗と知られし松澤儀右衛門が一人息子に芳之助と呼ぶる、優男、契りは深き祖先の縁に引かれて櫻の實の一人子同士、いひなづけの約成立しはお高がみどりの振分髪をお烟草盆にゆひ初むる頃なりしとか、さりとは長かりし年月、ことしは芳之助もはや廿歳今一兩年経たる上は公に夫とよび妻と呼ぶるゝ身ぞと思へば嬉しさに胸をどりて友達の朋ごとと恥かしくわざと知らぬ顔つくりながらも潮す紅の我しらす掩ふ袖屏風にいと心のうちあらはれて今更泣きたき事もあり人みぬひまの手習に松澤たかとかいて見て又塗隠すあどけなさ利發に見えても未通女氣なり同じ心の芳之助も射る矢の如しと口にはいへど待つ歳月はわが爲に弦たゆみしやうに覺えて明かし暮らす程のまどろかしさよ、高殿に見る月の夕影を分つはいつぞとしのび花の下ふむ露のあした双ぶる翅の胡蝶うらやましく用事にかこつけて折々の訪おとづれに餘所ながら見る花の面わが物ながら許されぬ一重垣にしみくとは物言交すひまもなく兎角うらめしきは月日なり隙行く駒に形もあ

らば我れ手綱を取り鞭を揚げていそがさばやとまで思ひ渡りぬ、されども天は美人を生んで美人を恵ます多くは良配を得ざらしむとかいへり、彌生の花は風必ずさそひ十五夜の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳人かゝなへて待つ歡びの日のいつか來べき、あし分船のさはり多き世なればこそあれ親にゆるされ世にゆるされ彼も願ひ此も請ひよしや魔神のうかへばとてぬば玉の髪一筋さしはさむべき間も見えぬを若此縁結ばれずとせばそは天災か將た地變か。

(二)

隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千を願ひ千にいたれば又萬をと諸願休む時なければ心常に安からず、つらく思へば無一物ほど氣樂なるはあらざるべし、大抵が五十年と定まつた命の相場黄金を以て狂はせる譯には行かず、花降り樂きこえて紫雲の來迎する曉には代人料にて事調はずとは誰もかねて知れたる話、鶴千年龜萬年人間常住いつも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀するなかれとは大福長者と成るべき人の肝心肝要かなめ石の固く執つて動かぬ所なりとか、そも松澤新田らが祖先と聞えしは神風の伊勢の人にて夙に大江戸に志を立て、鞆吳服

の見るかげもなかりしが六間門口に黒ぬり土藏時のまに身代たち上りて男の子二人の内兄は無論家の相續弟には母方の絶えたる姓を興させて新田とは名告らすれど諸事は別家の格に准じて子々孫々の末迄も同心協力事を處し相隔離すべからずといふ遺旨かたく奉戴して代々交りをかさね來しが當代の新田のあるじは家につきての血統ならず一人娘に入夫の身なりしかば相思ふの心も深からず且は利にのみ走る曲者なればかねては松澤が隆盛をたのみてあやにかけたる許嫁のえにし親なり子なり同舅同士なり不足の品あらば持ち給へと彼方にばかり親切を盡さして引入れし利も少なからず世は塞翁がうまさ事して幾歳すぎし朝日のかげ昇るが如き今の榮は皆松澤が庇護なるものから咽元すぐれば忘るゝ熱さ斯く對等の地位に至れば目の上の瘤うるさくなりて獨りつくく案ずるやう徑十町を距てぬ處に同商業を營むが上に彼れは本家とて世の用ひも重かるべく我とて信用薄きならねど彼方に七分の益ある時こゝには僅かに三分の利のみ我が家繁榮長久の策は彼れ松澤の無きにしかず且つは娘の容色世に勝れたれば是とも又一つの金庫芳之助とのえにし絶えなば通り町の角地面持參の聲もなきにはあらし一舉兩得とはこれなんめりと思ふ心は娘にも秘め同氣求むる番頭の勘藏にのみ割て

明かせば横手を拍つて賛成し主従日夜額をあつめて其方法を講じ居たりき、時なる哉松澤はさる歳商法上の都合に依り新田より一時借り入れし二千許の金ことは既に期限ながら一兩年引つゞきての不景氣に流石の老舗も手元豊ならず殊に織元その外にも仕拂ふべき金いと多ければ新田は親族の間柄なり且は是迄我が方より立かへし分も少からねばよもや事情打あけて延期を乞はゆるさじと言ひもすまじ他人に内兜を見すかさね機械仕掛のあやつり身上松澤ももう下り坂よと囃されんは口惜しく脊なる新田は後廻し腹の織元其他へ有金大方取あつめて仕拂ひたる時こそ耳よりのことなれと平生ねらひすませし的彼方より延期をいひ出さぬ間に、切て放して急催促に言譯すべき程もなく忽ち表向きに訴訟沙汰とは成れりける素松澤は數代の家柄世の信用も厚ければ僅々千や二千の金何方にても調達は出來得べしと世人の思ふは反對にて玉子の四角まだ萬國博覽會にも陳列の沙汰をかねと晦日に月の出る世の中十五夜の闇もなくてやは奥は朦朧のいかなる手段なりしか新田が畫策極めて妙にしていさゝかの融通もならず示談を請はゞやと奔走せしかどそれすらも調はずして新田は首尾よく勝を制し凱歌の聲いさましく引揚げしにそれとかはりて松澤が周章狼狽まこと寐耳に出水の騒

動おどろくといふ暇もなく巧みに巧みし計略に争ふかひなく敗訴となり家藏のみか敷
代續きし暖簾までも皆かれが手に歸したれば木より落たる山猿同様のむ木蔭の雨森
新七といふ番頭の白鼠去年生國へ歸りし後は十露盤玉と筆先に帳尻つくろふ溝鼠のみ
なりけん主家一大事の今日も申合せたるやうに富士見西行きめ込み見返るものさへあ
らざれば無念の涙を手荷物にして名のみ床しき妻戀坂下同朋町といふ處に親子三人雨
露を凌ぐばかりの家を借りて辛く膝をば入れたりけり、海ならず山ならぬ人世の行路
難今初めて思ひ當り淵淵ことなる飛鳥川の明日よりは何とせん、もと富家に人となり
て柔弱にのみ育ちし身は是れと覺えし藝もなく手に十露盤は取りならへど物に當りし
事なければ時の用には立ちもせず座して喰へば空しくなる山高帽子半靴と昨日かざり
し身の廻りも一つ賣り二つ賣りはては晦日の勘定さへ胸につかふる程にもなりぬ。

(三)

一人並の男になりながら何の胼甲斐ない車夫風情にまで落魄すとももの事外に仕様の
あらうものをと大言吐きし昔の心の恥かしさよ誰れが好んで牛馬の代りに油汗ながし
塵埃の中馳せ廻る者ぞ仕様模様の端きはてたればこそ恥も外聞もなひませにからめて

捨てた身のつまり無念も残念も餓頭笠のうちに包みて参りませうと聲低に勸める心い
らぬとばかりもぎだうに過ぎ行く人それはまだしもなりうるさいはと叱りつけられて
我知らずあとじさりする意氣地なさま霜こぼる夜嵐に辻待の提燈の火の消えかへる
迄案じらるゝは二親のことなり馴れぬ貧苦に責めらるゝと懐舊の情のやる方なさとが
老牀の毒になりてや涙がちに同じやうな煩ひ方それも御尤もなり我さへ無念に腸の
沸え納まらぬものを胸さける程にも思召すなるべし憎きは新田なり恨めしきは運平な
りよしや血をすゝり肉をつくすとも厭るべき奴ならずと冷凍る拳握りつめて當處もな
しに睨みもしつ思ひ返せばそれも愚痴なり恨みは人の上ならず我れに男らしき器量あ
らば是れ程までには窮しすまじア、と歎すれば吐く息しろく見えて身を切る夜風に
破れ屏風の内心配になりて絞つて歸るから車財布のものゝ少き程苦勞のたかの多くな
りてまたぐ我家の闕の高さ、ア、お歸りかと思ひ返る母、お父さんは御寝なッていす
かさぞ御不自由で御座いましたらう何もお變りは御座いませんかと裏問ふ心は疵もつ
足、オ、お前の留守に差配どのが見えられてといひさしてしばたゝく臉の露白岡鬼平
といふ有名の無慈悲もの悪鬼よ羅刹よと隘口するは濫團扇の縁はなれぬ店子共が得手

勝手家奇麗に拂ひて益暮の砂糖、甘き汁さへ吸はし置かば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地蔵顔にも見ゆべけれど今の身の上には憎し剛愎もの事情あくまで知りぬきながら知らず顔の烟草ふか／＼身に過りあればこそ燃に額ほり埋めての歎願も吹出だす烟の輪と消して、言譯きく耳はなし家賃をさめるか店を明けるか道は二つぞ何方にでもなされとぼんとはたく其煙管で打つてやりたい面がまぢ目的なしに今日までと日を延べしは重々此方が悪けれど母上とらへて何言居つたかお耳に入れまいと思へばこそ様々の苦勞もするなれさらでもの御病氣にいと重さを添へたやうなものとは困つたと言ひはせて低頭く心思案にくれぬ、差配どのが見えられてと母は詞を繰返して何か譯は知らねど今直ぐに此家を立て一寸の猶豫もならぬとそれは／＼盡にもかゝれぬ談じやうお前にも料簡あること、やう／＼に言延べて歸ります迄と頼んでは置いたれどマアどうしたら宜からうか思案して見てくだされと小聲ながらもおろ／＼涙お案じなされますな何うにかなります今夜は大分更けましたから明日早々出向きまして談合ひをつけませうナニ少しの行違ひでそれほどの事では御座いませんと我が親にまでいつはるとはさても後のよ恐ろし、寢ぬに明くる夜明け鳥もこつと鳴きて反哺の

教となるものを生甲斐なや五尺の身に父母の恩荷ひ切れずましてや暖簾の色むかしに染めかへさんはさて置きて朝四暮三のやつ／＼しさにつく／＼浮世いやになりて我身捨てたき折々もあれど病勞れし兩親の寝顔さし覗くことに我なくば何とし給はん勿躰なしと思ひ返せど沸くは涙か藥鍋の下炭火とろ／＼と消え勝の活計とて良醫の手にもかゝられねば見す／＼重り行く心ぐるしさよ思へば天も地も神も佛も我爲には皆仇か今この場合を見すぐしにするとは何の事ぞ新田こそ運平こそ大悪人の骨頂なれ娘ばかりはよもやと思へどそれもこれも心の迷ひか姿こそ詞こそやさしけれ瓜の蔓に生らぬ茄子父親と同じ心になつて今の我身に愛想が盡きてか人傳の文一通それすらもよこさぬとは外面如菩薩、内心はあれも如夜叉め。

(四)

他人はとまれお前さまばかりは高が心御存じと思ふたは空だのめか情ないお詞お前さまと縁きれて生存へる私と思召すか恨みを申さば其お心が恨みなり父様が惡計それお貴め遊ばすにお答への詞もなければと其くやしきも悲しさもお前さまに劣ることかは人知らぬ夜の夜具の襟何故にぬるゝものぞ涙に色のもしあらば此袖ひとつにお疑ひは

晴れやうもの一つ穴の獸とは餘りの仰せつもりでも御覽せよ繋かれねど身は籠の鳥も
 同じこと風呂屋に行くも稽古ごとく一人あるきゆるされねば御目にかゝる折もなく文
 あげたれど御住所誰れに問ひもならず心にばかり泣て居りましたを薄情もの義理
 しらすと押くるめてのお詞お道理なれど御無理なり此身一つに科があらば打れもせん
 突れもせん膝ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を鋭く拂てお高ど
 の詞ばかりは嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る目は芳之助あやにく持たず父御の
 心も大方は知れてあり甲斐性なしの我れ嫌になりて縁の絶ちどが無さに計略三昧かゝ
 りし我等は畏のうちの獸ぞ手を打て笑はるゝ筈を何の涙お化粧がはげては氣の毒なり
 牛に乗換へるうまさ話も内々は有ることならんを家藏持參の業平男に見せ給ふ顔我等
 づれに勿躰なしお退きなされよ見たくもなしとつれなしや後むき憎らしき事の限り並
 べられても口惜しきはそれならず解けぬ心にあらはれぬ胸うらめしく君様こそは何と
 も思召すまじけれど物ごゝろ知る其頃よりさま／＼のこと苦勞にして身だしなみ物學
 び彼れか此れかお氣に入りたや飽かれまじと心のたけは君様故に使はれて片時安き思
 ひもせずお友達遊びも芝居行きもお嫌ひと知れば大方は斷りいふて僻物と笑はれしは

誰れの爲をさな遊びの昔は知らず陸しき中にも恥かしさが楯に成りて思ふこと思ふま
 へにも得いはざりしを淺き心と思召すか假令どのやうな事あればとて仇し人に何のそ
 の笑顔見せてならうことかは山ほどのお恨みを受くる筋あれば詮方なし君様に愛想つ
 きての計略かとはお詞ながら餘りなり親につながらゝ子罪は同じと覺悟ながら其名ば
 かりはゆるし給へよしや父様にどのやうなお憎しみあればとて渝らぬ心の私こそ君様
 の妻なるものを何とげくしい他人あしらひ聞えぬお心やといひたさを押ゆる涙袖に
 置きてモシと止めれば振拂ふ羽織のすそエ、何さるゝ邪魔くさし我はお前さまの手遊
 ならずお伽になるは嬉しからず其方は大家の娘御暇もあるべしその日暮しの身は時間
 もをしく誰れぞ相手をお探しなされと振はらへば又すがり芳さまそれは御眞實かと思
 上ぐる面睨みかへして嘘いつはりはお前さまなどのなさること義理人情のある世なら
 よもやと思ふ生正直から飼ひ犬同様な人でなしに手をかまれて暖簾に見る耻は誰れゆ
 るぞ原を正せば根分けの菊親子の中に知らぬといふ道理はなしし知らぬにせよ知る
 にせよそれは其方の御勝手なり仇敵の子を妻にもせられず嫁にもすまじ言ふこともな
 し聞くことも無し恨みつらみを並べ立てなば力車に牛の汗何の積み載せきれるものか

は言はぬが花ぞお前さまは盛り身の春めき給ふは今の間なるべし薦かぶりながら見送らんと詞町噂に氣込あらく齒の根きりく喰ひしばりて釣り上ぐる眉根おそろしく散髪斜めに拂ひあげて白き面に紅の色さしも優しき常には似ず止めれば振る袖袂まづ今しばしと詫びつ恨みつ取りつく手先うるさしと立蹴にはたと蹴倒されわつと泣く聲我れとわが耳に入りて起き返るは何處、平常の部屋に倚りかゝる文机の湖月抄こてふの巻の果敢なく覺めて又思ひそふ一睡の夢夕日かたぶく窓の簾風にあほれる音も淋し。

(五)

お珍らしやお高さま今日の御入來は如何いふ風の吹きまはしか一昨日のお稽古にも其前もお顔つひにお見せなさらずお師匠さまも皆さまも大抵でないお案じ日かな一日お噂して居りましたと嬉しげに出迎ふ稽古朋輩錦野はな子と呼ばれて醫學士の妹博愛仁慈の聞えたかき兄を見真似か温順しづくり何某學校通學生中に萬緑叢中一點の紅と稱へられて根あがりの高髻に被布扮粧廿歳を越しての肩縫あげ可愛らしき人品なりお高さま御覽なされ老人なき家の母のなさ兄は兄とて男の事家内のことはとんと棄物私

一人が拍つも舞ふもほんの埃だらけで御座いますと笑ひて誘ふ座蒲團の上おかまひ遊ばすなと沈み聲にお高うやむやの胸の關所たれに打明けん相手もなし朋友の誰れ彼れ陸まじきもあれどそれは春秋の花紅葉對にして挿す簪の造物ならねど當座の交際姿こそはやさしげなれ智慧宏大と聞くは此人すがりて見ばやとこれも稚氣さりながら姿に知れぬは人の心笑ひものにされなばそれも耻かし何とせんと思ふほど兄弟ある人羨ましくなりてお兄様はおやさしいとかお前さま羨ましと口を洩るれば花子少し笑みを含んでこればかりは私の幸福さりとて喧嘩する時もあり無理な小言いはれまして腹立ち合ふこともあれど跡も無し先もなし海鼠のやうなと笑はれます此頃は施療に暇がなうて芝居も寄席もとんと御無沙汰その内にお誘ひ申します兄はお前さまをといひかけて笑ひ消す詞何としらねどお施しとはお情深い事さぞかし可哀さうのも御座いませうと思ふことあれば察しも深し花子煙草は嫌ひと聞きしが傍の煙管とりあげて一服あわたしく押やりつそれはもうさまぐツイ二日許前のご極貧の裏屋の者が難産に苦みまして兄の手術に母子とも安全ではありましたれど赤子に着せる物がなにか聞きませば平常の心に承知がならず其の夜通して針仕事着るもの二つ遣はしましたと得

意顔の物語り徳は陰なるこそよけれとか聞きしが怪しのことよと疑ふ胸に相談せばや
 の心は消えぬ花子さまぐの患者の語に昨日往診し同朋町とやら若しやと聞けばつゆ
 違はぬ様子なりそれほどまでにはよもやと思へど正しくならば何とせん實否くはしく
 聞きたしと思へど咎むる心に詞つまりて應答何やらうろくになりぬお高さま御ゆる
 りなされ今兄も戻りまする先それよりはお目に懸けたきもの往日お話し申せし兄が秘
 藏の書帖イエお前さまに御覧に入るゝに賞められこそすれ何として小言聞くことでは
 なしお待遊ばせよと待遇ぶり詞滑かの人とて中々に歸しもせず枝に枝そふ物がたり
 花子いと眞面目になりて斯う申してはをかしけれどお前さまは一人子私とても兄
 ばかり女の同胞もちませねば淋しさは同じこと何かにつけて心細し御不足かは知らね
 と妹と思召してよと底にもある詞遣ひそれは私より願ふことゝいふ詞聞きも畢らず
 それならばお話ありお聴き下さりますかと怪しの根問ひお高さまお前さまのお胸一つ
 伺へば譯のすむ事外でもなし實の姉さまにおなり下さらぬかと決然いはれて御申戯私
 こそ實の妹と思召してと言ふを遮りそれでは未だ御存じの無きならん父御さまと兄と
 の中にお話し成立つてお前さまへ御承知ならば明日にも眞實の姉様お厭かゝお厭

ならばお厭でよしと薄氣味わろき優しげの聲嘘か實か餘りといへば餘りのこと、亂る
 心を流石に静めて花子さま仰せまだ私には吞込めませぬお答へも何も追てのこと今
 日は先づお暇と立たんとするを強ても止めず然らばお歸りか好きお返事お待申します
 と送り出す玄關先左様ならばを跡になして乗り出す車の掛聲に走り退く一人の男あれ
 は何方の薬取憐れの姿やと見返れば彼方よりも見返る顔オ、芳さま詞の末だ轉び出で
 ぬ間に車は輻輳として轍のあと遠く地に印されぬ。

(六)

中硝子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四布蒲團すつぼりと炬燵の内
 あたゝかに、美人の酌の舌鼓うつなく、門を走る櫛ひろひあれは何處の小僧どん雪中
 の一つ景物おもしろし、とても積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程に降らして常闇の長
 夜の宴、張りて見たしと縋れ舌に譚言の給ふちろく目にも六花の眺望に別は無けれ
 ど身にしむ寒さは降かゝりての後ならで知らぬ事なり、うそ寒しと云ひしも二日三日
 朝來もよほす薄墨色の空模様は頭痛もちの天氣豫報相違なく西北の風ゆふ暮かけて鷺
 毛か柳絮かはやちらく〜と降り出でぬ、入相の鐘の聲陰に響きて埒にいそぐ友鳥今宵

の宿りの詫しげなるに誰が空せみの夢の見初め、待合の奥二階に爪弾きの三下り階を
 渡る、笑ひ聲低く聞えて思はず停る行人の足元、狂ふ煩惱の犬の尻尾、しまつたりと
 飛び退きて畜生めとはまこと踏みつけの詞なり、我が物なれば重からぬ傘の白ゆき往
 來も多くはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄然とせし提燈の影かせに瞬くも心細げなる一
 輛の車あり、齒代の安さ顯はれて剥けたる塗り破れし母衣、夜目なればこそ未しもな
 れ晝はづかしき古毛布に乘客の品も嘸と知られて多くは取れぬ疥せ田作り米の代ほど
 有りや無しや九尺二間の煙の綱あはれ手中にかゝる此人腕力おぼつかなき細作り車
 夫めかぬ人柄華奢といふて賞めもせられぬ力役社會に生ひ立つた身とは請取れず履歴
 は如何に聞きたしと問ふ人なければ我れと唇開きもならず、ア、と出る溜息を噛し
 める齒の根寒さにふるひて打仰ぐ面を見れば扱も美男子色こそは黒みたれ眉目やさし
 く口元柔和に歳は漸く二十か一か繼々の筒袖着物糸織ぞろへに改めて帯に巻く金鎖り
 きらびやかなの姿させて見たし流行の花形俳優何として及びもないこと大家の若旦那そ
 れ至當の役なるべし、さりとては是れ程の人品備へながら身に覺えた熱は無きか取上
 げて用ひる人は無きか憐れのことやとは目の前の感じなり心情さら／＼知れたものな

らす美しくしき花に刺もあり柔和の面に案外の所以なきにもあらじ恐ろしと思へばそん
 なもの、最負目には雪中の梅春待つまの身過ぎ世過ぎ小節に關はらぬが大勇なり辻待
 ちの暇に原書縮いて居さうなもの色眼鏡かけて見る世上の物映るは自己が眼鏡がら
 なり、夜はまだ更けねど降りしきる雪に人足大方絶々になりて戸を下す商家こゝかし
 こ、遠く引く按摩の聲に近く交る犬の子の叫びそれすらも淋しきを路傍の柳にさつと
 吹く風になよ／＼と靡いて散るは粉雪、物思ひ顔の若者が襟のあたり冷いやりとして
 ハツと振拂へば半面を射る瓦斯燈の光蒼白し、行く人はなし乗る人は猶更なからんを
 何を待つとか馬鹿らしさよと他目にも見ゆるものからまだ立去りもせず前後に目を配
 るは人待つ心の絶えぬなるべし、凍る手先を提燈の火に暖めてホット一息力なく四邊
 を見廻し又一息此處に車を下してより三度目に聞く時の鐘、今はと決心の臍固まりけ
 んツト立上りしが又懷中に手をさし入れて一思案ア、困つたと我知らず歎息の詞唇
 をもれて其儘に身はもとの通り舌打の音續けて聞えぬ、雪はいよ／＼降り積るとも歌
 むべき氣色少しも見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音辱しと願み
 れば角燈の光り雪に映じ巡回の查公怪しげに目を注いで行き過ぎられし後に又人音

この度こそはと見れば情なし三軒許手前なる家に入りぬ、流石に氣根も竭果てけん茫然として立つく折しも最少し参ると御座いませうと話し聲して黒き影目に映りぬ、天の與へ人こそ來つれ外すまじと勇み立て進み寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生憎や、車は一人乗りなるを。

(七)

心苛られのさるゝものは散會過ぎて來ぬ迎ひの車と數へ入れたし、待たせて置きても宜かりしを供待の雜沓遠慮して時間早めに言付て還せしもの何としての相違ぞやよもや忘れて來ぬにはあらじ家にても其通り何時まで迎ひ出さすには置かれまじ、例の酒辦何處の店にか酔ひ倒れて寝入りても仕舞しものかそれなればいよく困りしことなり家にても嘸お案じ此家へも亦氣の毒なり何とせんと思ふ程より積る雪いと心細く燭源ながるゝ表二階に一人取殘されし新田のお高、げにも浮世か音曲の師匠の許に然るべき會の催し漸りいはれぬ筋ならねどつらきものは義理の柵是非と待たれて此日の午後より、飾る錦の裏はと問は涙ばかりぞ薄化粧に深き苦勞の色を隠して友が無邪氣の物語りを笑ふて聞く胸ぐるしさ思ひに拵し手首に取りすがりてお美ましやお高

さまのお手の細さよお酢めし上りしか御傳授聞きたしと眞面目に問ふ人可笑しくはなきて其心根羨ましくなりぬ其の人々歸り果てゝより一時間許待つには長き時間ながら車の音門にも聞えず捨置かれなば未だしもなれとお茶參らせよお菓子あがれ夜はまだそれほど深くもなしお迎ひも今參らん御ゆるりなされと好遇さるゝ程猶更氣の毒さ堪へ難くなりて何時まで待ちても果て見えませねば憚りながら車一つ願ひたしと婢女に周旋のほど頼み入ればそれは何の造作もなきことなれどつひ行き違ひにお迎ひの参るまじとも申されず今少しお待ちなされてはと濫々にいふは車もとめに行くがつらさになるべし、それも道理雪の夜道押してとは言ひかねて心ならねど又暫時二度目に入れし茶の香り薄らぐ頃になりても音もなければ今は來ぬものか來るものか當てにもならず當てにして何時といふ際限もなし行き違ひになるともそれはよし兎に角車願ひたしと押かへして頼み入るゝに師匠實にもと氣の毒がりて然らばお止め申すまじともお歸りなさるゝに夜が更けてはよろしからず車大急ぎに申して來よと主の命令には詮方なくてや恨めしげながら承はりて梯子あわたしく馳せ下りしが水口を出づる大黒傘の上に雪つもるといふ間もなきばかり速かに立歸りて出入の車宿名残なく出拂ひて挽

子一人も居りませねばお氣の毒さまながらと女房が口上其まゝの返り事に然らば何とせんお宅にお案じはあるまじきに明早朝の御歸館となされよなど親切に止めらるれど左様もならず、雪こそふれ夜はまだそれほどにも御座りませねばと歸り支度とへのるにそれならば誰ぞ供にお連なされお歩行御迷惑ながら此邊には車鳥渡むづかしからん大通り近くまでは御難澁なるべし家内にてすら火桶少しも放されぬに夜氣に當つてお風めすな失禮も何もなしこゝより直にお頭巾召せ誰れぞお肩掛お着せ申せと總掛りに支度手傳はれて憚りさまといひも敢へず更けぬ内にお急ぎなされなまなかお止め申さずば是れ程に積るまいものお氣の毒のこといたしたりお詫はいづれと送り出す門口犬の子の聲恐ろしけれど送りの女中が骨たくまじきに心強くて軒下傳ひ三町ばかり御覽なされませあの提灯は屹度車今少しの御辛防と引く手も引かるゝ手も氷りつくやうなり嬉しやと近づいて見ればさても破れ車モシと聲はかけしが後退りする送りの女中ソツとお高の袖引さてもう少し参りませうあまりといへばと跡は小聲なり折しも降しきる雪にお高洋傘を傾けて見返るともなく見返る途端目に映るは何物蓬頭亂面の青年車夫なりお高夜風の身にしみてかぶるゝと震へて立止りつ、此雪にては先へ行

きても有るか無きか知れませねば何にてもよし此の車お頼みなされてよと俄に足元重げになりぬあの此様な車にお乗しなるとかあの此様な車にと二度三度お高軽く點頭きて詞なし我れも雪中の隨行難儀の折とて求むるまゝに言附くる那の車さりとては不似合なり錦の上着につれの袴つき合したやうなと心をかしく挽出すを見送つて御機嫌よう車夫さんよくお氣をつけ申して。

(八)

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか車上の動揺する割に合せて道のはかは行かず萬世橋に來し頃には鐵道馬車の喇叭の聲はやく絶えて京屋が時計の十時を報ずる響空に高し、萬世橋へ参りましたがお宅は何方と軾を控へて佇む車夫、車上の人は聲ひく、鍋町までと只一言、車夫は聞きも敢へず力を籠めて今一勢と挽き出しぬ、靄々たる雪夜の景に異りはなければと大通りは流石に人足絶えず雪に照り合ふ瓦斯燈の光り皎々として、肌をさす寒氣の堪へがたければにや車上の人は肩掛深く引あげて人目に見ゆるは頭巾の色と肩掛の派手模様のみ、車は如法の破れ車なり母衣は雪を防ぐに足らねば、洋傘に辛く前面を掩ひて行くこと幾町、鍋町は裏の方で御座

いまずかと思返れば否鍋町ではなし、本銀町なりといふ、然らばとばかり馳せ出す又一町、曲りませうかと問へば、眞向にと答へて此處にも車を止めんとはせず日本橋迄行きたしといふに何かは知らねど詞の通り、河岸につきて曲りてくれよ、とは何方右か左か、左へいや右の方へと又一横町、お氣の毒なれど此處を折れて眞直に行て欲しいと小路に入りぬ、何の事ぞ此路は突當り、外に曲らん路も見えねば、モンお宅はどの邊でと覺東なげに問んとする時、何とせん道を間違へたり引返してと復跡戻り、大路に出れば小路に入らせ小路を縫ては大路に出で走幾走、轉幾轉、蹴立る雪に轍のあと長く引てめぐり出れば又以前の道なり、薄暗き町の片角に車夫は茫然と車を控へて、仰の通りに参りましたら又以前の道に出ました若しやお間違ひでは御座いますまいか此角を曲ると先程の糸屋の前眞向に行けば大通りへ出て仕舞ひますたしか裏通りと仰せで御座いましたが町名は何と申しますか夫次第大抵は分りませうと問掛けたり、車上の人は言葉少に兎に角曲つて見て下され、たしか此道と思ふやうなりとて棍棒を向きかへさせぬ、御覽なされまし矢張りこゝは元の道これで宜しう御座いますかと訝しみて問ふ車夫の言葉にはんにこれは違ひたりもう一つ跡の横町がそれなりしか

も知れずと曖昧の答へ方、さればといふて挽き返す二横町こゝにもあらず今少し先へといふ提燈揺り消して商家に火を借りしも二度三度車夫亦道に委しからずやあらん未だ此職に馴れざるにやあらん同じ道行返りて困じ果てもしたらんに強くいひても辭しもせず示すが儘の道を取りぬ、夜は漸々に深くなるとす人影ちらほらと稀になるを雪はこゝ一段と勢をまして降りに降れど隠れぬものは鍋焼餛飩の細く哀れなる聲戸を下す商家の荒く高き音、さては按摩の笛犬の聲小路一つ隔て、遠く聞ゆるが猶更に淋し、さても怪しや車上の人萬世橋にもあらず鍋町にもあらず本銀町も過ぎたり日本橋にも止まらず大路小路幾筋幾通りも何方に行かんとするにか洋行して歸朝の後に妻を忘るゝ人ありとか聞きしがこれは又いかに歸るべき家を忘れたるか歳もまだ若かるを笑止といはば笑止思へば扱も訝しき事なり、今度は京橋へと急がせぬ、裏道傳ひ二町三町町名は何と知れねど少し引き入りし二階建てに掛行燈の光り朧々として主はありやなしや入口に並べし下駄二三足料理番が欠伸催すべき見世が、りの割烹店あり、車上の人は目早く認めて、オ、此處なり此家へ一寸と俄の指圖に一聲勇ましく引入れる車門口に下ろす棍棒と共にホット一息内には女共が口々に入らつしやいまし。

(九)

勢ひよく引入れしが客を下ろして扱おもへば恥かし、記憶に存る店がまへ今の我が身には往昔ながら世の人は未だ昨日といふ去年一昨年、同商中の組合會議或は何某の懇親會に登りなれし梯子なり、それと知れば俄に肩すぼめられて見る人なければ退しく片蔭のある薄暗かりに車も我も寄せて憩ひつ、靜かに顧みれば是れも笹原走るたぐひ、誰が目に見えて知るものぞ松澤の若大将と稱へられて席を上座に設けられし身が我れすらみすばらしき此服装よしや面に覺えが有ればとて他人の空背、それもあんならひなり況してや替りたる雪と墨おろかなこと雲と泥ほど懸隔のおびたしき如何に有爲轉變の世とはいへ是れほどの相違誰れが何として氣のつくべき心の鬼に見知り越しの人目厭はしく態と横町に道を避けて見られじとする氣あつかひも他人は何の感じもなく摺れ違つて見合はず眼の電光、ハツと思ふは我ればかり、態とつくるかまこと見忘れてか知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむらくと感じるはさても人情こそ薄きものなれ紙といは、吉野紙見えすいたやうな世の中なり、知り顔して欲しきにもあらず詞かけられては身の置場もなけれどそれにも何か色のあるもの、物いは

振切らん袖がまへ嘲るやうな尻目遣ひ口惜しと見るも心の僻みか召使ひの者出入のもの指折れば少からぬ人數ながら誰れ一人として我れ相談の相手にと名告出づるものもなし、富貴には寄る親類顔幾代先きの誰様に何の縁故ありとかなしとか猫の子の貰ひ主までが實家あしらのえせ追従、棧で掃く庭石の周旋を手はじめに引き入れる工夫算段はじいて見ねば知れぬもの、割りにも合はぬ品いくら冠せて上臈は自己が内懐中ぬくくとせし絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思はずお庇護に建ちましたと空拜みせし新築の二階造り其の詞は三年先の阿房鳥か、今の零落を高見に見下して全體意氣地が無さすぎると言ひしとか酷と思ふは心からなり、他人が聞けば適當の評といはれやせん別家も同じき新田にまで計らるゝ程の油斷のありしは家の運の傾く時かさるにても憎きは新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬは心小學校通ひに紫袂紗對にせし頭年上の生徒に喧嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口惜しげに相手を睨みしこともありしがそれは無心の昔なり我れ性來の虛弱とて假初の風邪にも十日廿日新田の訪問解れば彼處にも亦一人の病人心配に食事も進まず稽古ごとに行きませぬとか、お前さまお一人のお煩ひはお兩人のお悩みと婢女共に笑はれて

嬉しと聞きしが今更おもへば故らに言はせしか知れたものならず此頃見しは錦野の玄
 關先うつくしく粧ふた身に比べて見て我れより詞は掛けられねど無言に行過ぎるとは
 不埒ならずや身こそ零落たれ許嫁の縁きれしならずまこと其心なら美しく立派に切
 れてやりたし切れるといへば貧乏世帯のカンテラの油、今宵の用ひだけありしか如何
 に、さらでも御不自由のお兩親が燈火なくば嘸お困り早く歸りて様子知りたきもの、
 今の客人の氣の長さまだ車代くれんともせず何時まで待たする心にやさりとてまさか
 に促りもされまじ何としたものぞとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも一面赫と熱く
 なりて我知らず又蔭に入る、思へば待たる、やうな待たれぬやうな萬一車代を渡す人
 知りし顔の女中ならば何とせん詞かけられなば何といはん恥の上塗りは要なきことな
 り車代といふも知れたもの受けずともよし此まゝに歸らんか否是れ欲しければこそ雪
 の夜を二時三時恥も外聞も親には換へられたものならず、はて誰れでも出て來よ此姿
 に何として見覚えがあるものかと自問自答折しも樓婢のかなきり聲に、池の端から來
 た車夫さんはお前さんですか。

(十)

それは何ぞのお間違ひなるべし私 お客様にお懇親はなし池の端よりお供せしに間違
 は無けれど車代賜はるより外に御用ありとは覺えず其譯仰せられて車代の頂戴お願ひ
 下されたしと一步も動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、お間違ひやら何や
 ら私等の知る事ならねど只お客さまの仰せには今の車夫に用事がある足を洗はせて此
 室へ呼びたしと仰せられたに相違はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んで
 くる、はよも申藏にはあらざるべし僞りならずとせば眞以て奇怪、何人が何用ありて
 逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄にてさへ面背くる我に對して一面の識なく一語の
 交りなき然かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違ひと思へば譯もなければ彼處
 といひ此處といひ乗り廻しの方角の不審しさそれすら事の不思議なるに頼みたきこと
 あり足を洗ひて上りくれよとは扱も意外わからぬといへば是れ程わからぬ話はなし何
 とせば宜からんかと佇立たるまゝ躊躇へば樓婢はもどかしげに急がしたて、お客さ
 まも嘸お待ちかねお逢にならば、譯はどの道知れる筈なり先づお出なされよと手をと
 らへて引立つるに然らば參るべしお手お放しなされ大方は人違ひと思へどお目にかゝ
 りし上ならではお疑ひ晴れ難からん御案内お頼み申すと明瞭に答へながら心の裡は依

然潔々漢々、靜かに足を淨め丁りていざとばかりに誘はれぬ、流石なり商賣から燦として家内を照らす電燈の光りに燈樓の針の目いちじるく見えて時は今極寒の夜ともいはず背に汗の流るぞ苦しき、お客さまはお二階なりといふ伴はる、梯子の一段又一段浮世の憂きといふ事知らで昇り降りせしこともありし其時の酌取り女我が前離れず喋々しく款待したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りなり其頃の朋友今も遊びに來んは定の物何ぞのはしに我がこと引き出して斯々云々とも物語りなば何處まで知らる恥ならん思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る梯子を登り果て、右手の小座敷、お客さまは此處にと示したるま、樓婢は急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが果つべきことならずと身を低くして靜かに明くる座敷の内これは如何に頭巾に見えざりし面肩掛につみし身今ぞ明らかに現はれぬ、寢寐にも離れず起居にも忘れぬ我が後來の半身二世の妻新田が娘のお高なり、芳之助はそれと見るより何思ひけん前後無差別、踵を回してツト馳出づればお高走り寄つて無言に引止むる帯の端振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまお腹だちは御尤もなれども暫時、お長うとは申しませぬ申しあげたき

と一通りと詞きれぐに涙漲りて引止むる腕ほそけれと懸命の心は蜘蛛の圍の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよくとなれど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其様な仰せ承はる私にはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何のことやら理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき管御申儀はお措き下されと言ひ拂つてすつくと立てば、あんまりなり芳さま其お心ならそれでよし私にも覺悟ありと涙を拂つてきつとなるお高、お、おもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲し、とのお望みかそれは此方よりも願ふ事なり何の迂りくどい申上ぐるごとの候の一通りも二通りも入ることならず後とはいはず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作もなしと嘲笑ふ胸の内に沸くは何物、お高涙の顔恨めしげに、お情なしまだ其様なこと自由にならば此胸の中斷ち割つて御覽に入れたし。

(十一)

又逢ふ場所は某の辻某の處に待給へ必らずよと契りて別れし其夜のこと誰れ知るべきならねば心安けれと心安からぬは松澤が今の境涯あらまはしは察しても居たものゝそれ程までとは思ひも寄らざりしが其御難儀も誰れがせし業ならず勿躰なけれど我が親う

らみなり聞かれぬまでも諫めて見んか否父はともあれ勘藏といふものある以上なまな
 かの事言出して疑ひの種になるまじとも言ひ難しお爲にならぬばかりかは彼の人の
 逢瀬のはしあやなく絶もせば何かせん然るべき途のなからずやと感ふは心つゝむ色目
 に何ごとも顯はれねど出嫌ひと聞えしお高昨日は池の端の師匠のもとへ今日は駿河壑
 の錦野へと駒下駄直さする日の多かるを不審といは、不審もたつべきながら子故にく
 らきは親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時無邪氣の子供伸びしは脊丈ばかり
 と思ふか若しやの掛念少しもなくハテ中の好かりしは昔のことなり今の芳之助に何と
 して愛想の盡ぬものがあらうか娘はまして孝心ふかし親の命合ること背く等なし心配
 無用と勘藏が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望恰もよし彼れは有徳の醫師なりと
 いふ故郷某の地には少からぬ地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末
 わろき縁組ならずとよりよりの相談を洩れきく身の腹だゝしさ縦令身分は昔の通りな
 らずとも現在ゆるせし良人ある身に忌はしき嫁入沙汰きくも厭なり表にかざる仁者顔
 は畢竟何事か的手段かも知れたことならず優しげな妹御も當てにならぬよし折々見た
 こともあり毒蛇のやうな人々信用なさるお心には何ごと申すとも甲斐はあるまじさり

とて此儘に日を送らば悲しきことの來んは目の前なり聞かせて心配さするも愛けれど
 頼むは彼の人の力のみ男の智慧には良き考へもなからずやと思ひたてば心は矢竹、は
 やるほど猶落附てお友達の誰さま御病氣ときく格別に中の好き人ではあり是非お見舞
 申したく存じますがと許容を請へば平常の氣だてに有るべき願ひとて疑ひもなく運平
 點頭きて然らば疾く行きて疾くかへれ病人の處に長居はせぬもの供には鍋なりと連れ
 て行きなされと氣をつくれればイエそれには及びませぬ裏通りを行けばつい其處なり鍋
 も家のことが忙しう御座いますツイ行てツイ歸るに供などは大層すぎます支度も何
 も入りませねば此儘すぐにとそこ〱身仕度して庭口出でんとする途端嬢さま今日も
 お出かけか何處へぞと勘藏がぎろ〱目恐ろしけれど臆してなるまじと態とつくる笑
 顔愛らしく今日もとは勘藏酷いぞや今日はと言はねばてにをはが違ふ所ぞとは、笑み
 て何氣もなしに家を出でぬ約束の辻往つ返りつ待てどもまてども今日はいかにしけん
 影も見えず誰れに聞かんもうしろめたし何とせん必ず訪ひ給ふな我家知られんは恥か
 しとして町所つけ給はねと嬢に錦野にてそれとなく聞きしはうる覺えながら覺えあり
 縦しお怒りにふれゝばそれまで、空しく物をおもふよりは寧お目にかゝりしうへにて

兎も角もせんと心に答へて妻戀下とばかり當所なしにこゝの裏屋かしこの裏屋さりとては雲掴むやうな尋ねものと思ふ心かするべにや松澤といふか何か知らねど老人の病人二人ありて年若き車夫の家ならば此裏の突當りから三軒目溝板の外れし所がそれなりとまで教へられぬ時は夕暮の薄くらきに迷ふ心もかき暮されて何と言入れん戸のすき間よりさし覗く家内のいたましさよ頭巾肩掛に身はつゝめと目をもるものは紅の涙

(十二)

さらでも老ては僻むものとか況んや貧にやつれ苦にやつれ人恨めしく世の中つらく明けては歎き暮れては怒り心晴間なければさまでには無き病氣ながら何時癒るべき景色もなくあはれ枯木に似たる儀右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の運さよ好き客ありて遠くまで行きたるにやそれにしても最う歸りさうなもの日没まへに一度づゝ様子見に戻るが常なるを何として今日ほど頸を延ばす心は同じ表のお高も路次口願みつ家内を覗きつ芳さまはどうでもお留守らしく御相談すること山ほどあるを一目に懸らでは戻らるゝことかはさるにても此病人のうへに此お生計右も左もお身一つ

に降りかゝる芳さまが御心配は無なるべし尋常ならば御両親の見取り看護もすべき身が餘所に見聞く苦しさと沸き返る涙胸に呑みて差のぞかんとする二枚戸を内より明けて面を出すは見違へねども昔は残らぬ芳之助の母が姿なり待つ人ならで待たぬ人の思ひも寄らず佇むかげに驚かされて物はいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに誰何さまぞと問はるゝもつらしお高頭巾を手早く取りてお忘れ遊ばしたかと取すが、て啼く音に知るゝ焼野の雉子我子ならねど繋がる縁とて母は女の心も弱くオ、お高か否お高どのか何として此様な處へ何う尋ねて知れましたとおろゝ涙の聲き、附けてや膝行出づる儀右衛門はくぼみし眼にキツと睨みてコレ何を云つて居るぞ夕方は別して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助に對しても濟むまいぞやといふ詞の尾に附いてお高おそるゝ顔をあげ御病氣といふことを人傳に聞きましてお怒りにふれるとは知るも御様子が伺ひたさに出にくい所を繕つて漸うの思ひで参りましたお父様にもお執成をとしほゝとして言出づるを取次ぐ母が詞も待たず儀右衛門冷笑つて聞かんともせずさりとは口賢くさまゝの事がいへたものかな父親に薰陶れては其等の事ながらもう其手に乗りはせねぞよ餘計な口に風引かさんより早く歸宅さるゝが宜さゝうな

もの誠と思ひて聞くものは此家の内に一人もなし老婆さまも眉毛よまれるなど憎々しく言ひ放つて見返りもせずそれは御尤の御立腹ながら是れまでのこと露ばかりも私知りての事はなしお憎しみはさることなれど申譯の一通りお聞き遊ばして昔の通りに思召してよと詫入る詞聞きも敢へず何といふぞ父親の罪は我れは知らぬ今まで通り嫁貞になりたしとか聞て呆れるなり考へても見よ人非人の運平の娘を妻に持つ芳之助と思ふかよしや芳之助が持つといふとも我れある以上は嫁にすること毛頭ならぬ汚らはしし運平の名思ひ出しても胸が沸くなり泥てやそれが娘を嫁になんぞ思ひも寄らぬことなり詞かはすも忌はしきに疾々歸らずやお歸りなされエ、何をうちく老婆さま其處を閉めなさいと詞づかひも荒々しく怒りの面色すさまじきを母は見かねてそれはあまりに短氣なりあの子の詞も一通りは聞てお遣りなされぬかと執成すをハタと睨んで汝までが同じやうに何の噓語最早何事聞く耳もなし汝が追ひ出さずば我れ自身にと止むる妻を突のけつゝ病疲れても老の一徹上りがまちに泣顔れしお高が細腕むづと取りつ力を極めて押出す門口お慈悲に一言お聞き入れを詫びるも泣くも何の用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし舅でなし阿伽の他人の來る家でなし何といふとも

う逢はぬぞ、ハタとたて切る雨戸の闕くちしは溝か立端もなくわつと泣く空に闇を縫ひ行く鳥の兩三聲。

(十三)

覺悟の身に今更の涙見苦し、と勵ますは詞ばかり我れまづ拂ふ臉の露の消えんとする命か扱もはかなし此處松澤新田が先祖累代の墓所晝猶暗き樹木の茂みを吹拂ふ夜風いと悲惨の聲をそへて梟の叫び一段と物すごしお高決心の眼光たじろがすお心怯れかさりとては御未練なり高が心は先ほども申す通り決めし覺悟の道は一つ二人の身を犠牲にしてもお前さまのお心伺ふ先に生きて還る念はなし父御さまの今日の仰せ人非人の運平が娘を嫁になど、は思ひも寄らぬことなり芳之助は兎もあれ我れ許さずと御立腹の數々それいさ、かも御無理ならねどお前さまと縁されて此世何の樂しからずつらき錦野がこともあり所詮は此命一つぞと覺悟の道も同じやうに行逢つてお前さまのお心伺へば其通りとか今更御違背のある筈なし私に嬉しう存じますと美事に言ひ放つて嘸む襦袢の袖、未練などがあることかは我れ男の一疋ながら虚弱の身の力及ばず只にもあらで病ひに臥す兩親にさへ孝養、抱持の不十分さ甲斐なき身恨めしく

なりて捨てたしと思ひしは昨日今日ならず我々二人斯くと聞かば流石運平が邪慳の角も折れる心になるは定なり我が親とても其の通り一徹の心とらぎ寄らば兩家の幸福の上やある我々二人世にありては如何に千辛萬苦するとも運平に後悔の念も出まじく況してや手を下げての詫ごと何としてするべきならずよしや膝を屈げればとて我親決して肯れはなすまじく乞食非人と落魄るとも新田如きに此口腐れても助けを求むることとはせずとそれ平生の詞なるもの盡未來この不和の中解ける筈なし數代續きし兩家のよしみ一朝にして絶やさんこと先祖の遺旨にも違ふことなり世の人は愚とも笑はん痴とも見んさりながら先祖に對し家に對す孝は二人が命なり捨て、榮ある身ぞと思へば何處に残る未練もなしいざ身支度をと最期の用意あはれ短き契りなるかな井筒にかけし丈くらべ振わけ髪のかみならねば斯くとも如何しら紙にあね様こさへて遊びし頃これは君さまこれは我今日は芝居へ行くのなり否花見の方が我れは宜しと戯れ交はせしそれ一つも願ひの叶ひしことはなくて待にまちし長日月のめぐり来て見れば果敢なしや世は桑田の海ともならねど變るは現在親の心、ましてや他人に底ふかき計略の淵知るべきならねば陥れられて後の一悔恨空しく吞む涙の晴れ間は無くて降りかゝる憂

苦と繋がる、情緒に思慮分別も鳥羽玉の闇くらき中にも星明りに目と目見合せて莞爾とばかり名残の笑顔うら淋しくいざと促せばいざと答へて流石にたゆたはる、幾分時思ひ定めてツト立よりつ用意の短刀とり直せば後の籤に何やら物音人もや來つると耳を澄ますに吹き渡る風定かに聞えぬ扱は迫手にもあらざりけりお高支度は調ひしか取亂さんは亡き後までの恥なるべし心静かにと誠める身も詞ふるひぬ慘まし、可惜青年の身花といは、苔の枝に今や吹き起らん夜半の狂風、お高が胸先くつろげんとする此時はやし間一髪、まち給へとばかり後の籤壇まろび出で、利腕しつかと取る男誰れぞ放して死なしてと脆弱き身にも一心に振切らんとするをいつかな放さず、いや放しませぬ放されませぬお前さま殺しては旦那さまへ濟みませぬといふは正しく勘藏か、とお高の詞の畢らぬ内閣にきらめく白刃の電光アツと一聲一刹那はかなく枯れぬ連理の片枝は。

(十四)

こぼれ松葉の土になるまで二人ともにと契りしものを我ばかり何として後るべきと足すりして歎きしが命敢果なく止められて再び見んとも思はざりし六疊敷の我が部屋

をその儘の座敷半椽の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏が注意周到翼あらば知らぬこと飛ぶ鳥ならぬ身に何方ぬけ出でん隙もなしあはれ及物一つ手に入れたや處は異れど同じ道に後ればせじの娘の目色見てとる運平が氣遣はしき錦野との縁談も今が今と運びし中に此こと知られれば皆齋餅なるべし包まるだけとは秘しかくして宥めてみつ賺してみつ異見に手をかへ品をかふれと袖の涙晴れんとせす兎もすれば我も俱にと決死の素振に油斷ならず何はしかれ命ありての物だねなり娘の心落附かすに若くはなしと押しては婚儀をすゝめもなさず去るものは日々に疎しの俚諺もあり日をだに経れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定なるべし心ながく時を待つて春の氷に朝日かげおのづから解けわたる折ならでは何事の甲斐ありとも覺えず誰れも一異見は言ふな心の浮く話に氣をなくさめて面白き世をおもしろしと思はするのが肝要ぞと我先立ちて機嫌を取りつ慰めつ一方は心を浮かせんと力め一方は見張りを嚴にして細ひも一筋小刀一挺お高が眼に觸れさせるな夜は別して氣をつけよと氣配り眼配り大方ならねば召使ひの者も心を得て風の音をも只には聞かず鼠の荒れにも耳そばだてつ疑心は暗鬼を生ずる奥の間に其人現在坐すを見ながら嬢さまは何處へぞお姿

が見えぬやうなりと人騒がせするもあり乳母は夜の目ろくく合さずお高が傍に寢床を並べて浮世雑談に諷諷の意をこめつ可笑しく面白く物がたりながら沈みがちな主の心根いぢらしくも氣遣はしく離れぬ守りにこれも一つの關所なり如何にしてか越えらるべき如何にしてか遁るべきお高髪とりあげず化粧もせず粧ひし昔の紅白粉は誰れが爲の色ならず君におくれて鏡の影に合す面つれなしとて伽羅の油の香りも留めず亂れ次第の花の姿やつれる身を我と頼母しく、ならば此儘に死にたしと願へと命は心のまゝならず病むともなく煩ふともなくつくづくと眺めてつくづくと泣く涙と空とを意中の友として送らねど迎へねど來るものは月改まるは歳ちりて返らぬ君を思へば何ぞ櫻の春しり顔に今度も咲ける面にくさよ又しても聞く堀切りの菅蒲だより車をつらねて見に行きしはそもいつの世の夢になりて精霊棚の眞こもの上にも表だちては祀られずさりとは世の中うらめしく照る月の秋の夜草葉に脆き白玉の露と答へて消えかぬる身を何と御覽じて何とお恨みなさるべきにや過ぎし雪の夜の邂逅に二つなき貞心嬉しきぞとてホロリとし給ひし涙の顔今も眼の前に存るやうなりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通すまじきにや無情く悲しく引止められし命を未練に惜みてとも思召

さん苦しさよと思ひやりては伏し沈み思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢にも忘れ
 て知るものは人世の憂きといふ憂きの數々來るものは無意無心の春夏秋冬落花流水ち
 りて流れて寄せ返る波の年又年今日は心の解けやする明日は思ひの離れやするあはれ
 榮花の身にしたりし娘にも綺羅かざらせて我れも安心の樂隱居願はくは家連長久なれ子
 孫繁昌なれ兎角は身の上に凶事あらせじとの親心に引かへし願ひも逆さまながら今日
 身をすてんか明日こそはと窺ふ心に怠りなれど人目の關守何として隙あるべき此處
 に七年身はまだ籠中の鳥。

(十五)

お父様にも勘藏にも乳母には別しての事いろく苦勞をかけまして今更おもへば
 恥かしいやらお氣の毒やら幼心のあと先見ずに程のない無分別さりながら盡きぬ命
 かや事も無く助かりしを嬉しいと思ひもせでよしなき義理だてに心ぐるしく芳さま
 のお跡追ふてと思ひしは幾たびかさりとては命二つあるかのやうに輕々しい思案なり
 しと後悔して見れば今までの事口惜しくこれからの身が大切になりました阿房らしい
 死んだ人への操だて何に成ることでもなきを何時まで獨身で居る心か數へる歳の心細

さはれほどならばなせ昔お詞をむいて厭ひしか我れと我が身知れませぬ母さまなしの
 お手一つに御苦勞たんと懸けまして上の上にも又幾年お心休めぬ不料簡不孝のお詫は
 向後さつばり芳さまのこと思ひ切つて何方への縁組なれ仰せに違背はいたしませぬ勘
 藏も乳母も長の間の心づかひ嘸かしと氣の毒な私の心は今もいふ通り晴れてみれば迷
 ひは雲霧これまでの氣は少しもなし必らず必らず心配して下さるなよと流石に心の弱
 ればにや後悔の涙を目にたへてお高斯くとは言ひ出しぬ歲月心を配りし甲斐に漸く
 の此詞まづ安心とは思ふものゝ運平なほも油断をなさず起居につけて目をそぐにお
 高は詞に違ひもなく愁の眉いつしかとけて昨日にかはるまめくし父のもの我がも
 の云へば更に手代小僧の衣類の世話縫ひほどきにまで氣を用ひて浮々とせし様子に扱
 は真に悔悟して其心にもなりぬるかと落附くは運平のみならず内外のものも同じこと
 少し枕を安んじけりさるにても訝しきは松澤夫婦が上にこそ芳之助在世の時だに引窓
 の烟たえくになりしを今はたいかに其日を送るや可惜若木の花におくれて死ぬべき病
 は癒えたるものゝ僅か手内職の五錢六錢露命をつなぐ術はあらじを怪しのことよと尋
 ぬるに澆季の世とは聞くものゝ猶陰徳者なきならで此薄命を憐みてや恵むともなき恵

みに浴して鹽噌の苦勞は知らずといふなるそは又何處の誰れなるにや扱も怪むべく尊むべき此慈善家の姓氏といはず心情といはず義理の柵さこそと知るは唯りお高の乳母あるのみ忍びくの貢のものそれからそれと人手を換へて誰れと知らさぬ用心は昔氣質のこくを立て通さる遠慮心痛おいたはしや右に左に御苦勞ばかり世が世ならばお嫁さまなり舅御なり御孝行に御遠慮は入らぬ管をと或時泣きしにお高同じく涙になりて私の心知るものは和女ばかり芳さまのことは思ひ切りても御兩親の行末が心配なり明日が日我が身縁に附きなば兎に角自由は叶ふまじ其時たのむは和女ぞかし父さまのお心よく取りて松澤さまとの中昔の通りにして欲し、是れ一つがお頼みぞとて兩手を合せて伏し拜みぬ失せし芳之助を悼まぬならねど主の身の上猶さらに氣づかはしく陰になり日向になり意見の數々貫きてや今日此頃の袖のけしき涙も心も晴れゆきて縁にもつくべし嫁にも行かんと言出でし詞に心うれしく七年越しの苦も消えて夢安らかに寝る夜幾夜ある明方の風あらく枕ひいやりとして眼覺れば椽側の兩戸一枚はづれて並べし床はもぬけの殻なりアナヤとばかり蹴かへして起つ枕元の行燈有明のかけぶつと消えて乳母が涙の聲あわたくしく嬢さまが嬢さまが。

渝らぬ契りの誰れなれや千年の松風颯々として血沙は残らぬ草葉の緑と枯れわたる霜の色かなしく照らし出だす月一片何の恨みや弔ふらん此處鴛鴦の塚の上に。

雪 の 日

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや胡蝶の羽袖軽く、枯木も春の六花の眺めを世にある人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて稱ふらん羨ましさよ、あはれ忘れがたき昔を思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔の八千度其甲斐もなければど、勿躰なや父祖累代墳墓の地を捨て、養育の恩ふかき伯母君にも背き、我名の珠に恥かしき今日、親は瑕なかれとこそ名け給ひけめ、死に劣る世を経よとは思しも置かじを、そもや谷川の水おちて流れて、清からぬ身に成り終りし、其あやまちは幼氣の、迷ひは我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。

我故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身

は其一粒ものなりしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁ぎし伯母の是れも良人を失ひたるが、立歸りて我をば生したて給ひにき、さりながら三歳といふより手しほに懸け給へば、我れを見ること實の子の如く、蝶花の愛親といふともこれには過ぎまじく、七歳よりそ手習ひ學問の師を選びて、絲竹の藝は御身づから心を盡し給ひき、扱もたつ年に關守なく、腰揚とれて細眉つくり、幅びろの帯嬉しと締めしも、今にして思へば其頃の愚さ、都乙女の利發には比ぶべくもあらず、姿ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり幼くて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明かし暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何處の誰れか認めけん、吹く風傳へて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名ぐさ戀すてふ噂なりけり。

世は誤の世なるかも、無き名取川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通學せし學校の師なり、東京の人なりとて容貌うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室を假すみなりけり、幼きより教へを受ければ、習慣うせがたく我れを愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴ひて、おもしろき物がた

りの中にさまざま教訓を含めつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同胞なき身の我れも嬉しく、學校にての肩身も廣かりしが、今はた思へば實に人目には怪しかりけんよしや二人が心は行水の色なくとも、結ふや島田髻これも小兒ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には學びたるを、忘れ忘られて睡みけん愚かさ。

見る目は人の咎にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜白玉の瑕になりて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母育てにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行さ、兩親あればあのやうにも成らじものと、言ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方が母、臨終の枕に我れを拜みて、姉様お願は珠が事をと微かに言ひし一言あはれ千萬無量の思ひを籠めて、まこと開路に迷ひぬべき事なるを引受けし我れ其甲斐もなく、世の嗤笑に爲しも了らば、第一は亡き妹に對し我が薄井の家名に對し、伯母が身は抑も何とすべき。と御聲ひく、四壁を憚りて、口數すくなき伯母君が思し合はすることありてか、しみなくと諭し給ひき、我れ初めは一向夢のやうに迷ひて何事とも思ひ分かざりしが、漸々伯母君の詞するどく、よく聞けよお珠桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も亦慕はしかるべし、されども此處に規定あり

て、我が薄井の家には昔より他郷の人と縁を組まず、況てや如何に學問は長じ給ふとも、桂木様は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の聲とも言ひがたぐ嫁にも遣りがたし、よし戀にても然かぞかし、無き名なりせば猶更のこと、今よりは構へて往來もし給ふな、稽古もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追従もしたれ、益も無き他人を珍重にはあらず、年來美事に育て上げて、人にも褒められ我れも誇りしものを、口惜しき濡れ衣きせられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以來は斷然と行ひを俊め、其方が名をも雪ぎ我心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思はし、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門よぎるとも寄り給ふな。と曇みかけて仰する時我が腸は斷ゆるばかりになりて、何の涙ぞ險に堪へがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。

口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村擧りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを、汚れたりと思す恨めしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覽じ知る筈を、誰が讒言に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かきさばきても身の潔白の顯

はしたやと歎きしが、其心の底何者の潜みけん、駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり。

小簾のすきかげ隔てといへば、一重ばかりもやましきを、此處十町の間に入目の關きびしくなれば頃は木がらしの風につけても、散りかふ紅葉のさま羨ましく、行くは何處までと遠く眺むれば、見ゆる森かけ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かげに浮かんで、夕暮ひやく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へど流石に誠しめ重ければ、足は其方に向きも得せず、せめては師の君訪ひ來ませと待てど、立つ名は此處にのみならで、憚りあればにや音信もなく、杜絶えし中に千秋を重ねて、萬代いはふ新玉の、歳たちかへつて七日の日來りき、伯母君は隣村の親族がり年始の禮にと赴き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗くなるまゝに、吹く風絶えたれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心ほそく不圖ながむる空に白き物ちらく、扱こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬燵のもとに思ひやれば、いと降る雪用捨なく綿をなげて、時の間に隠れけり庭も離も、我が脇かけ窓ほそく開けば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森の空と一

つの色になりぬ、あゝ師の君はと是れは抑もまよひなりけり。

禍ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さぞはれしなり、此時の心何思ひけん、善しとも知らず悪しとも知らず、唯なつかしの念に迫られて身は前後無差別に、のがれ出でしなり薄井の家を。

これや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返へらず心急ぎて庭口に出でしに、娘様この雪降に何處へとて、お傘をも持たずにかと驚かせしは、作男の平助とて老實に思かなる男なりし、伯母様のお迎ひにと語れば、いや今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕が参らん、先待給へと止めらるゝ憎さ、實は此雪に宜くこそと賞められたく、是非に我身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、お子達は扱埒も無きもの、さらば傘を持ち給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、轉ばぬやうに行き給へと言ひけり、由縁あれば武藏野の原戀しき習ひ、此一言さへ思ひ出らるゝを、無情りしも我が爲、殿しかりしも我が爲、末善かれとて盡くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君の事なり。

斯く迄に師は戀しかりしかど、ゆめさら此人を夫と呼びて、俱に他郷の地を踏まん

とは、かけても思ひ寄らざりしを、行方なしや迷ひ、窓の吳竹ふる雪に心下折れて我れも人も、罪は誠の罪になりぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨まんも果敢なし、都は花の見る目うるはしきに、深山人の我れ立並ぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔を問へば、何ごともし總て誤なりき故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎き歎きて、其歳の秋かなしき數に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保たんのみ、思へばまこと式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔の戀しきものを。

。琴の音

(上)

空に月日のかはる光りなく、春さく花のどけさは浮世萬人おなじかるべきを、梢のあらし此處にばかり騒ぐかあはれ罪なき身ひとつを枝葉ちり／＼の不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに残る玉の絡の我れとくやしき境界にたゞよふ子あり。

母は此子が四つの歳、みづから家を出で、我れ一人苦をのがれんともあらねど、傾きゆく家運のかへし難きを知る實家の親々が、斯く甲斐性なき男に一生をまかせて涙のうちに送らせん事いとほし、乳房の別れのつらしとて、子は只一人なるぞかしと、分別らしき異見を女子ごゝろの淺ましき耳にさゝやかれて、良人には心の残るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かされては此子の親なる人をかゝる中に棄て、我が立去らん後はと、流石に血をばく思ひもありしが、親々の異見は漸く義理のやうにからまりて、弱き心の押切らんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを知りつゝ、家も此の子も此子の親をも捨て、出でぬ。

父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したさに

いかにもして今一たび戻りくれよ、長くとにはあらず今五年がほど、これに物ごゝろのつきぬべきまでと、頼みつつすかしつ歎きけるが、さりとも子故に聞なるは母親の常ぞ、やがては戀しさに堪へがたく、我れと詫して歸りぬべきものをと覺束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎてはては尋ね行きたりとして、面を合はする事もなく、乳母にや出でけん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父にあらずなりぬ、見かぎりて出でにし妻を、あはれ賢しと世の人はほめものにして、打すてられし親子の身に憐れをかくる人は少なかりきそれも道理、胸にたゞまるもや／＼の雲の、しばし晴るゝはこれぞとばかり、飲むほどに酔ふほどに、人の本性はいよく暗くなりて、つものりゆく我意の何處にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしがん軒もなくなりぬ、されども父のありけるほどは、頼む大樹のかげと仰ぎてよしや木ちんの宿に蒲團はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、それすら十歳と指をるほどもなく、一とせ何やらの祝ひに或る富豪の、かゝみを抜いていざ

と並べし振舞の酒を、うまし天の美祿、これを榮りに我れも極樂へと心にや定めけん
 飢ゑたる腹にしたゝかものして、歸るや御深の松の下かけ、世にあさましき終りを爲
 しける後は、來よかし此處へ、我れ拾ひあげて人にせんと招くもなければ、我れから
 願ひて人に成らん望みもなく、はじめは浮世に父母ある人羨ましく、我れも一人は母
 ありけり、今は何處に如何なる事をしてと、そいろに戀しきこともありしが、父が終
 りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末を思ふにも、母が所業は惡魔に似たりとさ
 へ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎に、袖のぬれしは昔なりけり、浮世に情なく
 人の心に誠なきものと思ひ定めてよりは、生中あはれをかくる人も、我れを嘲るやう
 に覺えて面憎し、いでや、つらからば一筋につらかれ、とてもかくても髮身の果はと
 ねぢけゆく心に、神も佛も敵とおもへば、恨みは誰れに訴へん、漸々尋常ならぬ道に
 尋常ならぬ思ひを馳せけり。

おどろに亂れし髪ひのひまより、人を射るやうなる眼のきら／＼と光るほかは、垢に
 塗れし面かげの、何處にはいかならん好き處ありても、凡人の目に好しと見ゆべきか

は、恐ろしく氣味悪く油断ならぬ小僧と指さるゝはては、警察にさへ睨まれて、此處
 の祭禮かしの縁日、人山築くが中に忌はしき疑を受けつ、口をしや剪兒よ盗人と萬
 人にわめかれし事もありき。

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、誤り傳へたる事は復び
 きえず、渡邊の金吾は眞の盜賊に成りぬ、やがては明治の何と肩がきのつくべきほど
 おそろしがらるゝ身却りて恐ろしく、此處を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事
 もあり、恨みに堪へかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに臨みて
 これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり。

捨てはてし身にも猶衣食のわづらひあれば、晝は其處となくさまよひて何となく使
 はれ、夜は一處不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ、日一日とたゞよひにたゞよひ
 て、過ごしゆくほどに、脊たけと共にのびゆくは、ねぢけたる心なるべし。

(下)

御行の松に吹く風音さびて、根岸田甫に晩稻かりほす頃、あのあたりに森江しづと
 呼ぶ女あるじの家を、うさんらしき乞食小僧の目につかけつゝ、怪しげなる素振あるよ

じ、婢女ども氣味わるがりて叫き合ひしが、門の扉の明くれに用心するまでもなく、垣に枝垂れし柿の實ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時となく忘れず噂も出でずなりしが、主の女が敏き耳には少しあやしと、聞かるゝ事あり、秋雨しとくと降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに獨り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘のさりとほ、更けぬるかなと、さしおきて聞けば、軒ばを傳ふ雨しだりのほかに、梢をゆする秋風の外に、物のけはひの聞ゆるやうなること度重なりぬ。

軒ばに高き一もと松、誰れに操の獨栖ぞと問はひ、斯道にと答へんつま琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居すまひを改むる時は、塵のうきよの亂れも何ぞ、松風かよふ絃の上には、山姫きたりて手やそふらん、夢も現も此うちにとほ、笑みて、雨にも風にも、はた、めく雷電にも、悠然として餘念なし。

頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上の照る月の、誰が砥にかけて磨きいだしけん、老女が化粧のたとへは凄し、天下一面くもりなき影の、照らすらん大厦も高

樓も、破屋も板間も犬の臥床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ牙ゆる古宅の池も、寛のおとなひ心細き山した庵も、田のものを案山子も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまに、八面玲瓏一點無私のおもかげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の樂にも似たりけり。

お静が琴の音は此月此日うき世に一人人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねぢけゆく心は巖のやうにかたく、射る矢も此處にたちがたき身の、果は臭骸を野山に曝して、父が末路のあはれや學ぶらん、さらすば悪名を路傍につたへて、腰に鎖のあさましき世や送るらん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴聲に和して、こぼれ初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも代へがたし、戀か情か、其人の姿をも知らざりき、わづかに洩れ出づる柴垣ごしの聲に、嬉しといふ事も覺えぬ、恥かしさをも知りぬ、かねては悪魔と恨みたる母の懐かしさへ身にしてみても、金吾は今更此世のすて難きを知りぬ、月はいよゝみ牙ゆる夜の垣の菊の香袂に満ちて、吹くや夜あらしの心の雲を拂へば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の友とやなる

らん、百年の悶へをや遣すらん、金吾はこれより百花爛熳の世にいでぬ。

花ごもり

(一)

本郷の何處とやら、丸山か片町か、柳さくら垣根つゞきの物しづかなる處に、廣からねども清げに住なしたる宿あり、當主は瀬川與之助とて、こそ秋山の手のさる法學校を卒業して、今は其處の出版部とやら編輯局とやらに、月給なにはどなるらん、静かに青雲の曉をまつらしき身の上、五十を過ぎし母のお近と、お新と呼ぶ従妹の與之助には六歳をとりにて十八ばかりにや、をさなきに兩親なくなりて哀れの身一つを此處にやしなはるゝ、此三人ぐらしなりけり、筒井づゝの昔もふるけれど、振わけ髪のをさなだちより馴れて、俱に同胞なき身の睦ましき一しほなるに、お新はまして女子の身の浮世に交はる友も少なければ、與之助を兄のやうに思ひて、心やすく嬉しき

後だてと頼み、よし風ふかば吹け波たゞばたて與之様おはしますほどはと憑りかゝれる心の憐れに可愛く、此罪なく美しき人をおきて、いさゝかも他處に移る心のあらんは我れながらよからぬ業と、與之助が胸に思ふことあり、八つの年より手鹽にかけたれば、我が親族にはあらねどお近とても憎くはあらで、同じくは願ひのまゝに取むすびて、二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人になりて、すべての願ひ、望み、年來むねに描きし影を夢なりけりと思ひきり、幾ほどもなき老らくの末を、斯くて此まゝやさしき婆々様に成りて送らばや、さらばお新が喜びは如何ばかりぞ、與之助とても我れをつらしとは思ふまじけれど、あはれ今一方の人の涙の床に起臥して、悲しき闇にさまよふべきを思へば、いづれ恨みの懸かるべきは我れなり、天より降り来りし如き幸福の眼のまへに沸き出でたるを取らで、はかなき一筋の情に引かれるれば、恨みは我れに残りて、得がたき幸福は天の何處にか行き去るべし、與之助の女々しく未練なるは弱年のならひ、見る目の花に迷ひて行末の慮りなければなるを、これと一つになりて我れさへに心よわくば、辛き浮世になりのぼる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中にうごめかんのみ、親子夫婦むつまじきを人間

上乘の樂みと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の言の葉ぞかし、心は彼の岸を願ひて中流に棹す舟の、寄る邊なくして波にたゞよふ苦しきは如何ばかりぞ、我れかしこしと定めて人を頼まぬ心だかさは、ふと聞きたるにこそ尊くもあれ、遂に何ごとを爲すべき場所も無くして、玉か瓦か人見わけねば、うらみを骨に残して其の下に泣いたぐひもあり、今の心にいさゝか肩からずとも、小を捨て、大につくは恥とすべきにも非ず、此ごろ名高き誰れ彼れの奥方の縁にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを陋劣しきこと、誹るは誹る者の心淺きにて、男一疋なにほどの疵かはつかん、草がくれ拳をにぎる意氣地なさよりも、ふむべき爲のかけはしに便りて、をしく、たけく、榮ある働を浮世の舞臺にあらはすこそ面白けれ、お新がことは瑣細なり、與之助が立身の機は一度うしなひて又の日の測り難きに、我れはいさゝかも優しく脆く尋常一とほりの婦女氣を出だすべからず、年來馴れたる中たがひに思ふ事も同じく、瑕なき玉のいづれ不足もなき二人を、鬼ともなりて引分る心は、何として嬉しかるべきぞ、我れになしても思ひしる、お新が乙女心に何ごとの念ひもなくて、はるかに嬉しき夢を見つゝ、與之助をば更なり、我が内心に何者の住め

りとも知らで、母が懷中に乳房をさぐるが如き風情のたらまちにして、驚き覺めたらん時は、恨みに詞の窮まりて、泣くに涙も出でざるべし、さても浮世は罪の世の中よな、酌むにあまれるのはれの我が心一つよりこそ、愁ひの眉を笑みにかへて和風こゝに通ふの景色をも見らるべけれど、我が瀬川の家爲に、與之助が行末の爲に、時の運の我が親子を迎ふるを見て、知りつゝ、我れは仇になりて、可愛き人を涙の淵に擠すぞかし、されどもお新はお新の運ありて、與之助に連れ添ふ一生の嬉しき願ひはこゝに絶ゆるとも、さるべき縁にしたがひて、さるべき幸福のめぐりも來りぬべきに、我れはお新がことを思ふべきにあらず、可愛しとても、いちらしとても、振かへりて抱きあぐるは只暫時の心やりにて、遂に右左り分つ袂の宿世なりけるを、我が一日の情は與之助に一日の未練をまさせて、今一方の人に物思ひの數を添へつゝ、其兩親が闇に迷へる悲しみを増さするより外に、功は露ほどもあることならねば、よし鬼ともなり蛇ともなり、つれなく憎き伯母になりて、與之助が心の彼方に向ふべきやう扱ふは我が役なり、嬉しき迎ひは我足もとまで來りけるものと、お近は瑞雲の我家の棟に棚引ける如き念ひに驅られて、八字の鬘に威嚴をなはる與之助が、黒ぬり馬車に榮華

をほこる面かげまで、ありくと胸のうちに描かれぬ。

(二)

世の人よりは柔かに穏かすぎたる良人を持ちて、萬事にもどかしく齒がゆかりし年月も、流石女子の我が一存をふるひ難くて、空しく胸のうちに藏めたりし思ひは、中々に消えんともせず、ともすれば燃え出で、押へ難き炎に身をも焼くめり、お近が願ひは不二の嶺の上もなく立のぼれるに、身は麓の裡に交れる如く、我れ同列の人々より見れば、やさしく温順に勉強家の聞えさへある子を持ちたるが上に、姪とはいへどこれも子にひとしきお新が、朝夕をいたはり仕へて、行々は樂隠居さまの羨ましき身の上ながら、思ひあがれる心には、此樂みの如何ばかり小さく、とるに足らぬ事に覺えて、我腹より出でたるやうにもなく、與之助が世間一通りの働きをなしつゝ、世に抜けていでたる考へのあらぬさへ恨めしく、望みは高くせよ、願ひは大きくせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、垣の瓢のぶら／＼として卵の毛の先の疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、何事のをかしさあるべき、一人に知らるべき事は百人に、百人に知らるべき事は萬人の目に前に顯はして、不出來も失敗

も功名も手柄も、對手を多數に取りて晴れの場所にて爲すぞよき、衆人の讀むべき書物をよみ、衆人のいふべき事をいひ、衆人の行ひたるあとを踏んで、糸もて操らるゝ木偶のやうに、我が心といふものなく、意氣地なくつまらなく、過失もなく誹りもなきは男の身として本意にてはあるまじ、事に臨みては母ありとも思ふべからず、家ありとも思ふべからず、執るべき途の大きなるに寄りて進み給へと、これは平常の詞なりけり。

花にうく露の戀とは何ぞ、をかしやと言ひ消すべきお近が、與之助故に命とこがるゝ人の、あはれ玉緒のたえ／＼になど、取次ぎが言葉のかなしげなるを受けて、此頃の明け暮れ思ひを碎くに理由あり、花ちらす吹雪の風は此處に憂からねど、嬉しき使ひは此戀にのりて來にけり、父は有名の某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女と傳へたるにこそ。

移りゆく人の心に做はぬ花の、今を春へと時しり顔には、笑みそめし垣根の梅の一枝二枝を折りて、お新はむつまじき手ならひの師のもとへ清書の直しを乞はんとて、伯母にも與之助にも挨拶しとやかに出で行きし後、輪にふく煙草のむすば／＼れたる思

ひにお近は茶の間の火鉢をはなれて、三疊の小座敷に何の書物なるらん文机の上にくりひろげしまゝ、梅が香蒸る窓の外をながめて讀むとも見えぬ與之助が傍に、灰がちの火のうそ寒き火鉢をかき起しつゝ、自ら持ち來し座蒲團に悠然と座をかまへて、物いひたき景色は、例のそれなるべしと、聞かぬほどより、五月蠅しの素振あらはるれば、與之助、汝はまだ子供のやうと少し笑ひて身を進ませ、思案はまだまとまらぬかの、言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つのみなるを、何れにとも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差圖はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではなし、否ならば否にて、誰れに遠慮の入るでもなければ、決然といふて宜さうなもの、母は何れに好悪の念もなく、お新は稚きより手元には置きたれど、末の松山何とちかひの有るでもなければ、これを取分けて可愛しにもあらず、まして田原の娘は逢ひしこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人して是非にも嫁にと願ふ道理はなし、唯可愛く大事に行末までを案じて、明け暮れ胸を痛め思ひになやむは汝が其身一つぞや、父様はやく亡り給ひしより、知れるが如く親族とても悪臭に寄る青蠅のやうに、追ふがうるさきほどの人々なれば力になる者とてもなく、あはれ思ひは雲井にま

で登れど、甲斐なき女の手に學士の號をも取らせかねて、猶すくなからぬ借財さへ身にまつはれる苦しさ、かくて汝の行末をおもへば、嬉しき夢は見る夜すくなくして、眠りがたき宵々の老ては殊につらきものぞよ、されば田原がことの果敢なき筋より出で、媒の女も我が身には嬉しからねど、運は目に見えぬ處にありて、天の機は我々が心に測り難きに、年來ねがひたる念慮の叶ふべき兆かと、母が拙き胸に感じたればこそ言ふなれ、無理とは思すな、もとより汝がためをおもひてなれば厭といはいそれまで、人々の心々一つならねば、浮かべる雲の危きにのぼらんより、八重葎にさし入る月を眩まくらに眺め、我れ一人たのしくはそれにて事の足りぬべしとならば、母もこれより其心になりて、高きを願ひし今までを夢とあきらめ、二間三間の借家を天地と定めて、洗ひすゝぎに、襦袢つゝくり、老の眼かすむ六七十を、孫の傳して暮らさんも宜し、いかにや與之助、汝が胸はと静かなれども底に物ある母が詞の、ちりちりと疝にもさはれば、をかき仰せ、とんと私には含こめませぬ、お手一つにて育ちたる厚恩のなみならぬを知らば、及ばぬ心に鞭ちてもと、これは朝夕の願ひ、さりながら、内縁にすがりて男の袖の下にかくれ、これを立身のかけはしになどは懸けても

思ひ寄りませぬこと、未熟なれども我がことは我れでなすべく、此綱なければ世に立たれぬかのやうな、心配は御無用に御座りますと決然こたふれば、母は其顔をじつと眺めてさればよなと、歎息の聲をもらしぬ。

(三)

それは眞實か、さても若き料簡よな、さればこそ母が行末を案じて、亡き後までを氣遣ふはそれゆゑ、うき世を机の上の夢に見て、重き物は六寸の筆より外もたず、書物によまれて我心なき人はそれも道理か、其心にて押しゆかば、事成就の曉は幾跌きの後なるべき、東照宮様御遺訓に重荷を負ひて遠路を行くが如しとありけれど、恐らくは半道も三分一も得行かぬほどに投げ出して閉口せねばなるまじ、我れは我れによりて事を爲すとは、さても立派の言の葉ながら聞けよ與之助、汝ほどの博識は廣き東京に掃くほどにて、塵塚の隅にもごろくごあるべし、いづれも立身出世の望みを持たぬはなく、各自ことは異りて、出世の向きも種々なるべけれど、名を揚げ家をおこしてなど、これを誰しも基礎なり、汝の思ふ如く一筋繩に此望みの叶ふものとせば、世はえら者の巢に成りて、闇夜のはち合せ危かるべきを、十分が九分は屑にして、

心寛くも手段の上手なる人が其一分の利は占むるぞかし、小と大との差別を知りたらば、田原が聲となるを恥とは言ふまじき筈、其袖の下にかくれて、これに操らるゝと思へば口をしくもあれ、我が爲の道具につかひて、これを足代にとすれば何の恥かしきことか、却つて心をかしかるべし、誹はほまれる裏なれば、群雀の囀りかしましとても、垣のほととの諸聲は天まで届かず、雲をけり風にのる大鵬の、嬉しきは此姿ならずや、近くたとへを我女同志にても見よ、彼の田原殿が奥方は京の祇園の舞妓とかや、氏ははるかに劣りし人とか、尋常一様の娘にて過ぎなば、前垂れ襷の縁をはなれず、井戸端に米やかしぐらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを小き手の中に丸め奥方とさへ成り澄ませば、そしりは物のかげに隠れて名は公の席にも高く、田原夫人と並べ書けるが、公侯伯子の誰夫人にも劣ることか、慈善會、音楽會、名は聞きながら見ることの難き人さへあるに、幹事とかや何とかや、それは未だ小さし、事ある時はおほけなき御前にも出づるとぞ、これを我等が上に比ぶれば、空に流るゝ銀河と、つちに埋るゝ溝川との違ひあり、小き貞婦孝女は遂に彰はるゝ事なくして、うき世の中利は此たゞひの人なるぞや、なき人の上に批

點もいかなれど、汝が心根に似たりける父様の、我れが我れがと思召しは奇麗なり
 しが、人をも世をも一包みにする量なければ小き節につながれて、我れと我が身を思
 になしつゝ、それはまだしも、先にも我が身が言ふ如く、遇はぬ浮世に何事の望みも
 捨て、苔に雨きくたのしみをも、茅が軒ばに味ひたらば、別に長閑けき月日ありて、
 それは又其筋に面白かるべけれど、かなしきは生にえの人の事ぞかし、すき間も風
 霜夜さむけく、薄き衣に妻子の可愛さしみくゝと身にしみれば、一日半夜やすらけき
 思ひはなく、身はけがれざる積りにて汚き人の下に使はれ、僅かの月給に日雇にひと
 しき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく畢り給ひしは汝とても知れるが如
 し、されば汝が心根の清く尊く美しく立派には聞えたれど、仕種は父様の二の舞に
 て、笑止や小さき結構人にて終りやせん、と言はゞ堪へぬ心に腹もたつべし、母は汝
 が爲をおもへば、怒る、はらたつ、何の憚りはせぬぞや、よしや汝が望みの判事試験
 に、首尾よく及第して奏任のはしに列りたりとも、田舎まはりに幾年を渡り、猶その
 上に種々の規則にしばらくれば、花の都に名を揚げて世間の耳目を集むるほどの事は、
 保證の印のしかとおして、無しと言ふとも誤りはあるまじ、一生を秤にかけ尺にはか

り、これほど、限りある圖の中に、身は目に見えぬ細につながれ、人の言葉を守り人
 の指圖に働き、功は後の世に残る事もなく、死しては知己に吊はれ子孫に祭らるゝそ
 れ丈を差別にして、さのみ犬猫と變りもなく、夢と暮らし烟と消え、それにて汝は満
 足なか、夢ならば彌勒の世までを夢につゝんで、嘘も誠も偽りも、美しきも醜きも一
 呑みに呑みつくして、此世の中に高く飛ぶ心は無きか、いかにぞや與之助、返事のな
 きは不承知か、口をしや我が思ふ半をも解し得ず、汝はまだいさゝかの情に引かるゝ
 と見えたり、其愚かしき性根とは知らず思ひを碎きしは我があやまりよ、今は何ごと
 も口入れなすまじければ萬汝の勝手たるべし、否、お新故のめしさをならすとは言譯、
 これに引かるゝ心ならずば、いつか一度は持つべき妻の、口約束ばかり何の大事かは、
 田原に不足は言ふまじき筈と責められて與之助、我れを白痴にしたりける母が詞と非
 癪のむらくゝと加へて、厭で御座ります、田原もいやお新もいや、諸事萬事氣に入り
 ませぬと、有りし昔の悪あがきに、強情はりける時の面かけを其まゝ、折角のお近が
 談義は揉みくちやにしてのけられたり。

これは瀬川さま、ようこそと玄關に高き婢女が聲を、耳とく聞きて、膝にねぶれる小猫をおろし、よみさしの繪入新聞その茶だんすの上にのせて、お珍らしや何風に吹かれ給ひてぞ、谷中の道はお忘れなされしかと存じましたにと、障子の内より美くしき聲をもらせば、西北か、但し南か、天氣豫報にも見えざりし曇りの何處やらに出来て、肝癢にもやもやの雲が沸きたれば、お辰様が扇の風にでも拂ひてほしく、お宿もとまで罷り出たる次第と例に似ぬ與之助がをかしき詞に、お辰座をたちて迎へながら、大分御機げんで御座んすの、梅見のお歸途か、橋本あたりのお名残と見えまする、さりとはお土産もなしに御不心中やと笑へば、それ處の勢ひかと、與之助も笑ひて、さし出す友仙のふとんの素人めかぬを引寄せ火ばちの向ひ合せに座をしめれば、ほんにお顔色もよからず、御不快か、但しは例のね、様が我まゝからの肝癢に、母様したゝか困らせ給ひて、お足の向くまゝ、此方角へお越しなされしか、どの道うれしからぬお顔色と、圖ぼしをさゝれて其通りとも言ひかねけり。

むかし覺ゆる姥櫻の色はなけれと陰ゆかしき美人の末の四十女、切髪姿に被布の好みも何處やら洒落て、良人なき後の世渡りは昔覺えの三味も流石とはいかりて、月琴

の師と聞くぞをかしき、お辰は長羅字に一服すひて與之助に手渡し、つ瀬川さま私の言ふは當りましたら、よい加減になされませや、さもなくてさへ母様の御苦勞は山ほどなるに、よい年しての大供様が、髭くひ反らして甘ゆるは可愛けれど、すねるおれ、何で御坐ります、お腹が立たば寝かしてお置きなされと片頬に笑みてたしなめれば、異見は眞平、やうく逃げのびて、此處で二の矢は御免蒙りたし、理屈は捨て、陽氣に面白く、我が常は知り抜き給ふお辰様が匙加減に、嬉しくをかしと思ふ話を聞かせ給へといへば、それは造作もなき事、春さく堤の花よりも美しく、秋てる中洲の月よりも清く歌舞の菩薩が手を盡くす物の音も及ばねば、お前様がお好きの書や歌や何のく、見れば嬉しく、聞けば床しく、ぢれも疝も皆をさまりて、思ひ出してさへ魂のふらつくやうな事が御坐んす、とは又何ぞと問へば、身邊の新聞をつきつけて、それ此處にと、指さすは新の字、これは解らぬこと禪僧が問答でもあるまじと笑へば、お辰眞面目に、眞言の秘密で御坐んすぞえ、其字を一目御覽じるよりお胸に現はれる影は可愛らしき島田鬘にじやばらの結び下げ、兄様此字は何と讀みますると御本を前に畳まりしお姿が見えます等、何と無類にお嬉しかると、言了りておほくと笑へば、

馬鹿なと言苦しげに笑ふ。

戯言は戯言、お新様といふ稚馴染の可愛らしき方があれば他處にお心の散らぬは無
理ならねど、全躰あのお嬢をどうなさる思召しぞや、初春の三日の歌がるたに、其美
しきお顔を見せましたは私の科なれど、誠の罪は何處やらのお人と田原がことに話の
移れば、それを今日は抜きにして貰ひたし、氣色のすぐれず頭の痛きに、ぶらりと家
を出でたれど、さして面白き處もなければ、常に憂きことを知らず顔の、此宿には定
めし胸のすくやうな事もとて来りけるものを、いぢめられては何の甲斐もなしと迷惑
がれば、どうでも嬰兒様は猿蟹の嘶でなくばお氣に入らまじ、胸のすくやうなとても
氣の利たもので一口といふ宿がらでなければ、ね、様相應これで我慢なされませと、
甘味にそへて差出す茶の浮かすはお手のものと知るや知らずや。

(五)

我れながら解しがたき心のいづ方に向ひてすゝむらん、あとにも先にも今日までに
逢ひみしは初春の三日、年始まはりの屠蘇の酔ひ、目もとにあらはれて心は夢とこ
げこみし谷中のやどに、うつくし人の寄り合ひて今宵は歌留多の催し、お迎ひの使ひ

をもあげたかりしに、ようこそその御入來と喜ばれて、若きものゝならひ與之助いやな
らぬ心地のして、つひ其まゝにお仲間入りの源平合戦、組わけの三たびが三たび連れ
になりしはお辰が門下に隨一のお家から、例の田原どのが愛子にお廣さまとて、父さ
ま似の色は白からねど、娘ざかりは山茶も出ばなの色ふかく、派手すきの母様がお好
みとありて、模様も花やぎたる薄藤の中振袖、もれてぞにほふ入つ口の緋ぢりめん、
人目をうばふ織ものに、帯は緋珍か夏雄の彫りのばちんの金具は瀧に鯉、はつきりと
せし氣象はとりなり活潑とおもしろく、勝ちの喜び、まけての腹たち、我儘なほど
憎からぬお人なりける、されば與之助とても其おもかげの空にうかべば、母が前に断
りたるほど實いやといふにはあらねど、男の身として少しうれしからぬ筋もあり、か
つはお新がうらみの心にかへれば、いづれにせよ胸のうちには屹とせし定まりもなく、
何が何やら五里の霧中にさまよふやうにて、月も花もはるかの彼方におぼめきながら、
ならべ得がたき處に悶はおこりて人しれぬ苦勞この間にあり、されば眞向よりの母が
異見に疳癪の火の手つりて、よしさらば立派に我戀を通して見すべし、馬鹿なこと
をと齧ひたちしは一時、今朝の勢ひにては谷中に足のむくべくもあらず、もとより此處

は由縁のかけ、むらさきの一もと根ざしはほかならぬに、行かばかならず彼のことを言ひ出すべし、さては五月蠅しとして行かねばそれにては事のすむべきを、むしやくしやとせし思ひの晴るゝ處なければ、暫時にても此苦のわすらるゝやう、その一條は面倒なれどお辰が話ををかしきは聞きたくなきにもあらで、よし例の話の出でたらば、あたまたから亂離荒廢にこなして、言葉のたくみをどれほどに并ぶるとも、知らぬ知らぬと亂暴に狼藉に蹴退けたらば、いかなお辰も閉口して二の句は出まじ、と心がまへをせしやらせぬやら、我れもわからぬ料簡にて谷中の扉をたゞきぬ。

行末は八重の沙路に大船うかべて、空や波なる青海原とても、源は山路の苦のつゆ、さてもわけなしのお弱年さまとにらむ目もとに何見えざらん、問はねどしるき與之助が心の宙宇に迷ふ有様までそれと呑みこめば、思ひしには異りてお辰のみ田原がことも語らず、案じたるよりは産の安きもてなしに、恐れてよりつかざりし日ごろの馬鹿らしさ我れと笑はれて、母が前におこりたる疳癪の雲もやう／＼散すれば、おのづから詞に花も咲きて聲だかに笑ふやうにもなれば、時分をはかりてお辰、のう瀬川さま、人は何時どのやうな事で苦勞するやら知れませぬもの、うき世を切り髪の今日

この頃、我身にかゝる浮雲さへ大方は拂ひつくして、心の月のたかく澄むやうにと願ひながら、さて左様もならぬもの、見きくにつけて人の哀れぞと知らぬ顔して過ぐされねば、酔狂らしき心配に身さへやせて、一人やきもきと氣はもめども、肝心の御本尊さまがいたちの道きりでは困るでは御坐んせぬかと恨まれて與之助、それはお氣の毒さまと軽くすまます言葉も出かねて、左様いふ次第ではなしなど、言譯をなしける、お辰いよく眞面目に、弟子は子もおなじなれば我身も可愛きあのお嬢の爲、早く埒のあかせましたけれど、それは一筋、お前さまのお情實も酌まぬでは御坐んせぬ、まゝのごとの昔より別れて今ではお前さまお一人をたよりの、お新さま可愛しとあるは御尤、言譯あそばすほどがをかしく、左様ありてこそ嬉しきお心を喜んで居ります、なれども田原さまが事とてあのみまゝでは置かれもすまじく、我れさへよくば他人は勝手と其やうな無茶は平常の御氣質とてお言ひになる譯が無ければ、どうでも二道にまよひて御苦勞なさるので御坐りまじよ、おのづから母様には仰せにくきことも私には御遠慮の入らぬ筈なれば、何ごともお打あけなされて御相談下さりませやと、をさな子に飯粒くゝめるやうな申分を、さすが亂暴に狼藉に言ひやぶらるゝものでなければ、

與之助少し勝手のかはりて、しばらくは默然となりぬ。

次第に我が本陣へきりこまれて、いづれにか返答せねばならぬやうになれば、いつまで嘔のまねも出来ねば思ひきりて與之助、我れはお辰さまがいつもの給ふね、様なれば、其やうな義理はりのむづかしきことは知らず、粹とやら通とやら鶯なかせし末の人こそ奥ふかきおもひやりは有るもの、何となりとも察してよきやうに計らひ給へ、我れは小豆まくらが相應なればと、美事とほけた積りでやれば、ほんに左様で御坐んしたものの、海山三千年の我れに比べて力まけのせし可笑しさ、知らざるを知らずとせよも生意氣らしければ、ね、様の小癩だては入らぬ事なれば、以來は何事も我身にまかせてお小言は仰せられますなやと言へば、萬事よろしくお差圖をと、與之助はどこまでも戯言のつもりなりしが。

(六)

その次の日お辰田原どのに車を飛ばせて何事を言上しけん、奥方の眉ひらけて見えさせられしが、歸るとそのまゝ、呼出しに人の魂をふらつかせし昔より、書きなれたる長文の滞るところなく、我れながらをかきさを水いれの水にそいで、する墨のあ

とこまやかに、筋は立派に萬歳を祝して、きのふは與之助さまお入り嬉しく、然るべく取はからへと仰せのありけるまゝ、唯今例のに参りて、奥方まで委細申上げぬるに、お喜びのほどはさる方に推し給へ、猶この後のさまぐにつきて、お打合せいたしましたき事の多ければ、みづから参上て、とはおもへど、少しさゝはる事のありて今日明日自由のきかねば、おはこびの願ひましたきよしをお近のもとまで申送りける、此文を受とりたるお近が喜びより、あきれはてし與之助が、あまりの事に戯れとも思はれず、さりとして青筋たてゝ怒りもせば、いよゝゝ笑はれて茶にされて、我が言條は何處にか立たすべき、母はもとより同意も同意、望みに望む所なれば、我がもしも厭なと、言は、お辰と同盟してどのやうの難儀を言出すやも測られず、彼方よりも此方よりもくどくどと面倒を持ちこまれて、長く苦境に身を置かんより、今後のことは今後の處し方もあるものをと、詮方なしの断念めにお辰がいふ嬰兒さまの本色が、うまゝく深淵に引入られしを悔みながら、手玉に取られて手も足も出ぬやうになりぬ。

お近はもとゝお辰とは意氣の合ふといふ中にもあらず、亡き良人が親友の寡婦さまといふばかり、平常は與之助の好きて通ふをさへ苦々しく言ひけるも、此度のはか

らひの如何に説きてか我手にさへ乗らざりしを鎮めて、うれしき順序のはこびける喜ばしさに、お新のことをさへ打あけて談合するやうになりける、狭き家のうちの出来ごとを、かくしたりとも遂には知れずに居まじく、知りたりとて故障のあるではなけれど、氣まづき思ひをさせるだけが厭なれば、おもてだちたる事の整はざるさきに、何とか好き手段もあらば、お新が爲の後來もわるからぬやう、人の妻にといひては未だ與之助が事情をしるまじき彼の娘が、應とはかならず言ふまじければ、行儀見習ひもをかしけれど、何とか名をつけて華族がたの大奥にでも一時の御奉公に出だすか、ともかくも一二年のほど家をはなしたらば、双方に忘れ草のつまるゝ種にもなりて、其後に聲をとるなり嫁にやるなり、無關係の人にならば事の易かるべしと、此やうの話をなしける、その中に與之助、此場合になりて我身の方はゆるぎの取れぬ事なるを知りつゝ、あかす惜しき心の十分に残れば、取とめて我がものにの念は今さら出すべきにもあらねど、何心なく罪なき人を、寄り集りて術計のうちに陥れる如きを憐れめど、我が喉をはさみたらば其處を怪しくとられて、いよ／＼お新を邪魔ものにさるゝ種ならんも知れねば、何事にまれ話の始まりて、いざといふ時に臨まば、お新をつゝ

きて當人より厭を言はする外に途はなし、お新の厭とかぶりを振りなば、誰れも無理にとは言ひ難きに、我れも共に詞をそへて理屈をつくり、しばしの時日を延ばすほどには、天に風雨の變あるとおなじく、はからぬ處よりはからぬ事も出で来るものなれば、今までの事の目茶になりて、田原が事の彼方より破れて來らぬとも言ひ難しなど、人は厭ふ破綻といふ事を空に願ひて、我心にもあらずはじまりたる縁なれば、萬づ串戲のやうに誠しからず、今日の我身の成りゆきの夢のやうなるに、いづぞは覺めて氣樂に愉快の奮にかへり、お辰、田原などいふ文字の腦裏をはなれて、大川に足を洗ひたるほど、さつぱりと爲したきものよと思ふに、生憎やお新があはれいちらしのやうなる無邪氣の様子にて、我れをいさゝかも見よげにとの親切より、衣類の洗ひそゝぎ扱は縫はりの暇なく、夢にも母子が心をさとりたらば斯くはなすまじき朝夕のやさしさ、其身の爲には鬼にも似たりける伯母を、知らぬ心の介抱なほざりならず、今日は谷中に行きて足の疲れぬといへば、少しおさすり致しましよと取つく憐れさ、常は何とも思はざりしことが目に映りて、何ともいはれぬ厭らしき氣もちの爲しける。

といめんと願ふは與之助が心一つにて、出ださんとつとむるは多数なるに、八方にまはしたる手の届きて、よろしき奉公口ふたつ見當りぬ、一つはお辰の手より出で、霞が關にさる名高き舊諸侯の與づとめ、むかしと違ひて御質素との表面なれど、衣類もち物の支度なみくの嫁入りよりは仰山なれば、御奉公人とても小商人小官吏などの娘小供はなく、よしある嬢さま方の上つ方を見習ひにお上り遊ばすなれば、お行儀はもとより志しがあらば諸藝に通じる事もなりて、三五年の後にはやさしき身代に及ぶまじき拜領ものもありて、よろづ富貴に結構なるお邸のこと、一つは瀬川が舊知己に折々は出入りも爲したりし黒澤何がしと呼ぶお畫師との、浮世に大名流の聞えも無けれど、斯道にあつき志しは却て其大家などいはいはるゝを厭へば、おのづから隠逸といふ風もある隠居さまにて、家をゆづりし息子の律義なるにかへり見る煩はしさもなければ、先祖が生國ときく甲斐の差手に、磯千鳥君が千代をば八千代となく景色さぐりがてら、厭氣の出づるまであのあたりの山家にしばし引こもらんといふ、妻は此地に育ちたる人なれば、話しがたきもなき山猿の中に這入りて、さを淋しからん月日を思へば、いつそ家にとりまりてお歸りを待つ方がよしとも思へど、年ごろ睦まし

き中は月花のいづくにも手を携へぬ時なく、寸の間もはなれざりしものを、今さら一人は遣りともなきに、我まなれども此處より一人手廻りの婢をつれたく、お新さんを良き口あらばとの頼みなりしが、あのやうに可愛くしかも柔順しき娘を、我子同様に伴ひもしたらば、畫ごゝるもなき我山すみの憂さも慰むべく、萬事に嬉しき連ねるべけれど、良人にしたがふ我れさへさのみ進みては行きともなき山の中へ、花の都を捨て、若き人の行かんともいはれまじく、又よき御奉公をと望まるゝに貧乏畫師がお預かり申したしとは口巾たくてお願ひも申されねばと、壁訴訟のやうに妻なる人の來て語りたる、此二つが此頃の題になりけり。

その身一生の利害を説きて、はじめ奉公をと勧めたる時、いぶかしく怪しき事におもひて、俄かに承知はなすまじと思ひたるに、お新さのみは驚きもせで、思ひ設けたる如く出で、行くべきよしを合點しける、與之助かげに廻りて心を引き見れば、それは伯母さま兄さまのお傍にいつまでも暮らさるゝものなればそれの上こそ喜びはなけれど、左様あらぬが世のならひと聞けば、これも詮なきこと、うき世といふものゝ力はいかほどのものやら目には見えねど、かなしきも嬉しきも我が手業にあたわぬこ

と、あきらめぬる身は、つらき時はつらき時の来りぬと思ひ、嬉しき時は嬉しき時とおもふ、其ほかには何とも爲れぬでは御座りませぬか、と思ひきりのよきに與之助といめもならず、さらば同じき奉公といへども、立派にうつくしき奥づとめの、いさゝか氣骨は折れるにせよ遊ぶにひとしき多人數の中にまじりて、絹布づくめに勤めらるる華族の奉公ならば、その身の爲の行末もよく、世間の聞えも宜かるべきに、お新はいかにぞと問へば、お言附ならば是非がなけれど私に擇ばして給はらば華族さまは厭といふ、さては黒澤の方がよしとか、我意に氣樂なるには相違なけれど、行々の事につきて何ほど頼もしき宿でもなく、それも東京にでも居ることならば氣やすさに任せ、もとより奉公などいふでは無く奥様に細工ものでも習ふ料簡にて行くも宜けれど、今が今田舎にこもりて、はて白雲の雲水も同様なる彼の人々につきて何處まで行くべき、されば先方よりも遠慮して欲しとは明白に言はぬほどなるを、何故に又妙な處をも望むものかなといへば、黒澤さまはお書師では御座りませぬか、兄さまもお書はお好きなるに、私は畫が學びたう御座ります、畫をならひて如何するつもりぞと再問へば、戀しき時にお姿をかきても慰められまする事故といはれて、與之助あとは

聞くことの出来ず、一人胸のうちに泣きける。

かくと事の定まりぬる後は猶豫もなく支度のととのひて、一日なりとも長くといめんとおもふは與之助ばかり、表面よりは黒澤が立出の近づきぬと告ぐるに、田原が方は何といふ目だちたる事もなければ、裏面の交通やうくはじまりて、お近が胸にはひやくとする事のなきにもあらねば、これは一日もはやくたせたまき思ひ、かゝる時は是非無差別の日のかけにお近が念慮の勝をしめて、いよく明日のあけの一番に、上野發の汽車にてといふ段になりぬ、お新は何ごとを思ふらん、言はぬおもひは人しるによしなけれど、一語にても意味の有りける詞の與之助には利き及にてえぐらるゝやうに胸のくるしく、寝られぬ夜半の殘燈のかけ薄れゆくまゝに、やがては鳥もなくらん、かねも驚かすべし、いざと敷居をまたぐ時、汽車の笛の音ひやく時、やうく煙りにかけ消えゆくとき、いかならんと思ひやる與之助より、さし手が磯に千鳥を友として、かなしき戀のおもかけを描くらん、ふびんやお新が心の裡。

の 軒 も る 月

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りに歸らせ給は
 興なくや思さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、
 酒もあたゝめんばかりなるを、時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、
 二つ三つ四つ、八時か、否、九時になりけり、さても遅くおはします事かな、いつも
 九時のかねは膳の上にて聞き給ふを、それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此
 子が爲の收入を多くせんと仰せられしなりき、火氣の満たる室にて頸やいたからん、
 振あぐる錠に手首や痛からん。

女は破れ窓の障子を開きて外面を見わたせば、向ひの軒ばに月のぼりて、此處にさ
 し入る影はいと白く、霜や添ひ來し身内もふるへて、寒氣は肌針さすやうなるを、
 しばし何事も打わすれたる如く眺め入りて、ほと長くつく息月かげに煙を忍がきぬ。
 櫻町の殿は最早寢處に入り給ひし頃か、さらすば燈火のもとに書物をや披き給ふ、
 然らずば机の上に紙を展べて靜かに筆をや動かし給ふ、書かせ給ふは何ならん、何事

かの御打合せを御朋友の計へか、さらすば御母上に御機嫌うかいひの御状か、さらす
 ば御胸にかぶ妄想のすて處、詩か歌か、さらすば、さらすば、我が方に賜はらんと
 て甲斐なき御玉章に勿躰なき筆をや染め給ふ。

幾度幾度の御文を拜見だにせぬ我れいかに憎しと思召すらん、拜さば此胸寸断
 になりて常の決心の消えうせん覺束なき、ゆるし給へ我れはいかに憎きものと思
 召されて物知らぬ女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちて此世
 に生れたるなれば、殿が憎しみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちて此世に生れたる
 なれば、ゆるし給へ不貞の女子に計はせさせ給ふな、殿。

卑賤にぞだちたる我身なれば初めより此上を見も知らず、世間は裏屋に限れるもの
 と定め、我家のほか天地のなしと思は、はかなき思ひに胸も燃えしを、暫時がほ
 ども交りし社會は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、身は櫻
 町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけが
 すものぞかし。

言は、我が良人をはづかしむるやうなれど、そもく御暇を賜はりて家に歸りし時、

聲と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿躰なき比較なれど我れは殿の御地位を思ひ合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

よしや此縁を厭ひたりとも野末の草花は書院の花瓶にさゝれんものか、恩愛ふかき親に苦を増させて我れは同じき地上に彷徨はん身の取あやまちでも天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも开は邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らはしく淺ましき身とおとされぬべき、我れはさても、殿をば浮世に譏らせ參らせん事くち惜し、御覽せよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを。

女子は太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目さめて泣出つる稚兒を、あはれ可愛しいかなる夢を見つる乳まわらせんと懐あくれば笑みてさぐるも憎からず、勿躰なや此の子といふ可愛きもあり、此子が爲我が爲不自由あらせし愛き事のなかれ、少しは餘裕もあれかしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞はつらくとも暫時の辛防ぞしのべかし、やがて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、家は今少し廣く小女の走り使ひを置き、其かよわき身に水は汲まされ、我れを厨甲斐なしと思ふな、腕には職あり身の健

かなるに、いつまで斯くてはあらぬものをと口癖に仰せらるゝは、何處やら我が心の顔に出で、卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ちて苟にも其色の顯はれもせば。

父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜も帯を解き給はず、咳き入るとは脊を撫で、寢がへるとは抱起しつ、三月にあまる看病を人にかけてと思召しの嬉しさ、そのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振のありしか、我れは知らねど然もあらば何とせん、果敢なき樓閣を空中に描く時、うるさしや我名の呼聲、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、勿躰なき罪は我が心よりなれど櫻町の殿といふ面かけなくば胸の鏡に映るものもあらじ、罪は我身か、殿か、殿だになくば我が心は静なるべきか、否、かゝる事は思ふまじ、呪咀の詞となりて思むべきものを。母が心の何方に走れりとも知らず、乳に飽きれば乳房に顔を寄せたるまゝ思ふ事なく寢入し兒の、頬は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる腮の二重なるなど、斯る人さへある身にて我れは二心を持ちて濟

むべきや、ゆめさら二心は持たぬまでも我が良人を不足に思ひて濟むべきや、はかなし、はかなし、櫻町の名を忘れぬ限り我れは二心の不貞の女子なり。

兒を静かに寢床に移して女子はやをら立上りぬ、眼ざし定まりて口元かたく結びたるまゝ、蠟の破れに足も取られず、心ざすは何物ぞ葛籠の底に藏めたりける一二枚の衣を打返して淺黄縮緬の帶揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通の文を出して元の座へ戻れば、燈のかけ少し暗きを捻ち出す手もとに見ゆるは殿の名、よし匿名なりとも此眼に感じは變るまじ、今日迄封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺はかさよ、胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りの棄難くば同じ不貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拜し參らせん、殿も我心を見給へ、我が良人も御覽せよ。

神もおはしまさば我家の檐に止まりて御覽せよ、佛もあらば我が此手元に近よりても御覽せよ、我が心は清めるか濁れるか。

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難き事の數々、辱なき事の山々、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縦横に散らして、文

字はやがて耳の側に恐ろしき聲もて呷くぞかし、一通は手もとふるへて巻收めぬ、二通も同じく三通四通五六通より少し顔の色かはりて見えしが、八、九、十通十二通、開きては読みよみて開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、古たる衣になへたる帯、窶れたりとも美貌とは誰が目にも許すべし、あはれ果敢なき塵塚の中に運命を持ちりとも汚き垢れは蒙らじと思へる身の、猶何處にか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波騒ぎて沖の釣舟おもひも亂れんか、風ぎたる空に鶉啼く春日のどかになりなん胸か、櫻町が殿の面影も今は飽くまで胸に浮べん、我が良人が所爲のをさなきも強て隠さじ、百八煩惱自から消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃えばもえよとて、微笑を含みて読みもてゆく、心は大瀧にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人がためしにも同じく、戀人が涙の文字は幾筋の瀧の迷りにも似て、氣や失はん心弱き女子ならば。

傍には可愛き兒の寢姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御聲ありく聞えて、外面にも良人や戻らん更けたる月に霜さむし、たとへば我が良人

今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此際なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隠さん。

殿、今もし此處におはしまして、例の辱けなき御詞の数々、さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さても勿躰なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸の騒がんものか、動くは逢見たき慾よりなり、騒ぐは下に戀しければなり。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、孤燈の火かげ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にteri返すやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すごとく、隙間も風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、來し方行く末おもひ忘れて夢路をたどるやうなりしが、何ものぞ俄にその空虚なる胸にひびきたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧みて高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ、目の前に散亂れたる文をあけて、やよ殿、今ぞ別れまゐらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面の手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に爲し了りて、熾

んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に柵引き消ゆるを、うれしや我執着も遣らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

う つ せ み

(一)

家の間敷は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狭なれども北南吹とほしの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、場處も小石川の植物園にちかく物静なれば、少しの不便を疵にして他には申す旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにもなりけれど、いまだに住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて來るものも無きにはあらね

と、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、それは下町の相場とて折かへして来るはなかりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そとくさと落つき無きが差配のもとに來りて此家を見たしといふ、案内して其處此處と戸棚の數などを見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れて、唯四邊の静にさはやかなるを喜び、今日より直にお借り申します、敷金は唯今置いて参りまして、引越は此夕暮、いかにも急速では御座りますが直様掃除にかゝりたう御座りますとて、何の仔細なく約束とのひぬ。お職業はと問へば、いえ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人にもなりますし、始終ごたくして埒は御座りませぬといふ、妙な事と思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來りしは、合乘りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を眞直に入りて玄關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗り居たるは三十許の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未と思はるゝやうの病美人、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白き

がいたましく見えて、折柄世話やきに來て居たりし差配が心に、此人を先刻のそとくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。
荷物といふは大八に唯一くるま來りしばかり、兩隣にお定め土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極寂寞とせしものなり。人數は彼のそとくさに此女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、其夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど來りし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髪の老人、一人は妻なるべし對するほどの年輩にてこれは實法に小さき丸鬘を結ひける、病みたる人は來るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くありて悄然とせし老人二人の面やう、何處やら寢顔に似た處のあるやうなるは、此娘の若しも父母にてはなきか、彼のそとくさ男を始めとして女中ども一同旦那様御新造様と言へば、應々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。
あくる朝風すいしきほどに今一人車を乗りつけ、る人のありけり、細の單衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯のある三十位のでつぷりと肥りて見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て貼りたるを讀みて此處だくと車より下りける、姿を

見つけて、お、番町の旦那様とお三どんが真先に櫓をはづせば、そいくさは飛出して
 いやお早いお出、よく早速おわかりになりましたな、昨日まで大塚にお置き申したの
 で御座りますが何分もう、その何だか頻りに嫌におなりなされて何處へか行かう行か
 うと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸と此處をば見つけ出しまして御座ります、
 御覽下さりませ一寸斯うお庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分
 の爲にもよからうかと存じまする、はい昨夕はよくお眠になりましたが今朝ほどは又
 少し、その一寸御様子か變つたやうで、ま、いらしつて御覽下さりませと先に立て案
 内をすれば、心配らしく髪をひねりて、奥の座敷に通らぬ。

(二)

氣分すぐれてよき時は三歳兒のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切て姉様のお製に
 餘念なく、物を問へばにこくと打笑みて唯はいくと意味もなき返事をする温順し
 さも、狂風一陣梢をうごかして來る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後
 生、顔を見せて下さるなとて、物陰にひそんで泣く、聲は腸を絞出すやうにて私
 悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し、さながら目の前の何やらに向つ

て詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から参りますと
 て日のうちには看護の隙をうかひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置
 き、それ物としては鉄一挺目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、
 此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には大の男二人が、
 りにてもむづかしき時のありける。

本宅は三番町の何處やらにて表札を見ればむ、彼の人のかかと合點のゆくほどの身
 分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者
 は心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住
 へば見る物残らず嫌になりて、次第に病ひの募ること見る目も恐ろしきほど凄まじき
 事あり。

當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべ
 し、病ひにふしたるは櫻さく春の頃よりと聞くに、それよりの晝夜險を合する間もな
 き心配に疲れて、老たる人はよろしくたよくと二人ながら力なさうの風情、娘が
 病ひの俄かに起りて私にはもう歸りませぬとて駆け出すを見る折にも、あれく何うか

雪子

して呉れ、太吉々々と呼立るほかには何の能なく情なき躰なり。
 昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借りず手ばしこく締めたる姿、不圖見たる目には此様の病人とも思ひ寄るまじき美しくしさ、両親は見返りて今更に涙ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持來りて召上りますかと問へば、いやくと頭をふりて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出来るで御座んしやうかと問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る料簡、此處はお前さんの家ではないか、此ほかに行くところも無からうではないか、分らぬ事を言ふものではありませぬと叱られて、それでも母様私は何處へか行くので御座りましやう、あれ彼處に迎ひの車が來て居ます、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蜘蛛の巢のかゝりて、朝日にかゝりやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り來て、あれあんな事を、貴君お聞遊ばしましたかと良人に向ひて思はしげにいひける、娘は俄に萎れかへりし面に生々とせし色を見せて、あ

雪子

の、それ一昨年のお花見の時ねと言ひ出す、何えと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねえとて面白さうに笑ふ、あの時貴君が下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれども、う萎れて仕舞ました、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬか、何故逢ひに來て下さらないの、何故歸つて來て下さらぬの、もうお目にかゝる事は一生出來ぬので御座すんるか、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄様が、兄が、あ、誰れにも濟みませぬ、私が悪う御座りました免して免して胸を抱いて苦しうに身を悶ゆれば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學校も花もありはしない、兄様も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣なのだから氣を落つけて舊の雪子さんに成つてお呉れ、よ、よ、氣が附きましたかえと背を撫でられて、母の膝の上にすゝり泣きの聲ひく、聞えぬ。

(三)

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に來て下されたと言へど、顔を横にして振向うともせぬ無禮を、常ならば怒りもすべき事なれど、あ、捨て、置いて下

さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母が手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然として居る父に向ひ、靜に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少き人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたくと團扇づかひするか、巻煙草の灰を拂つては又火をつけて手に持て居る位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、あゝ此様な事と知りましたら早くに方法も有つたのでしやうが今に成つては駟馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何とも、私は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘の氣が狭いからではあるが、否植村も氣が狭いからで、何うも此様な事になつて仕舞つたので、私等二人が實に其方に合せる顔も無いやうな仕儀でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つて呉れ、此様な身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事を言ひ出し居る、多少教育も授けてあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行くと家の恥辱にもなる實に憎むべき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほどまで

操といふものを取止めて置いたいけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れといふ不出來しも無かつたを思ふと何か残念のやうにもあつて、眞の親馬鹿といふのであらうが平癒らぬほどならば死ねとまでも諦めがつきかねるもので、餘り昨今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに来るものが有るなど、騒ぎをやるにつけて母が詰らぬ易者などにでも見て貰つたか、愚な話ではあるが一月のうちに生命が危いと云つたさうな、聞いて見ると餘り快くもないに當人も頻りと嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此處を捜させては來たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎日死ぬぬと言つて見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れぬ事が無いに、そればかりでも身軀の疲勞が甚しからうと思はれるので、種々の意見も言ふが、何うも病ひの故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、醫者は例の安田が來るので斯う素人まかせでは我まゝばかり募つて宜くあるまいと思はれる、私の病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、それも何うあらうと母などは頻にいやがるので私も二の足を踏んで居る、無論病院へ行けば自宅と違つ

て窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往來へ飛出されても難儀至極なり、夫等を思ふと入院させやうとも思ふが何かふびんらしくて心一つには定めかねるで、其方に思ひ寄もあらば言つて見て呉れとてくる／＼と刺たる頭を撫で、思案に能はぬ風情、はあ／＼と聞居る人も詞は無く諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよ／＼と母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の蒲團の上へ抱き上げて臥さするにはや正躰も無く夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのはれたるやうに折返し折返し鬘形に熨みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども、幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帯あげの解けて帯より落かゝるも艶かしからで惨ましのさまなり。枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し學校のまね

びをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに讀まれたるは村といふ字、郎といふ字、あゝ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

(四)

今日是用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す附添の女子に代りて、どれ少し私がつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ります、お召物が濡れますと言ふを、いゝさ先させて見てくれろとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心附けれども何の事とも聞分ぬと覺しく、眼は見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と聲を限りと呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、え、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、よ、お

前が此様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠になつた事は無い、お疲れなされてお瘦せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく解る人ではないか、氣を静めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向けば、彼れは快く瞑することが出来ると思ふではないか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お前の事も併せて思ひ切つたので決して未練は残して居なかつたに、お前が此様に本心を取亂して御両親に欺をかけると言ふは解らぬではないか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼れは決して怨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左様であらう、校内一人の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其様な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既にそれは人も知つて居る事なり遺書によつても明かではないか、考へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないで、御両親がどれほどお歎きなされるかを考へて、氣を取直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れ

るではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。女子どもは何時しか枕元をばづして四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えねども兄様兄様と小き聲に呼べば、何か用かと氷裳を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つまゝに驅出して大の男に捉へられるを、振放すとして恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛い知れるほどならばと果敢なき事をも両親の頼もしがらぬ。

おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の間へば、言下に兄様で御座りませうと言ふ、左様わかればもう仔細は無し、今話して下された事覺えてかと言へば、知つて居ます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顔を見合せて情なき思ひなり。

良しはしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、もう後生お願ひで御座ります、其事は言ふて下さりますな、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事

の致しやうが御座りませぬと言ひ出づるに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突きのけつ、椽の方へと駆け出すに、それとて一同ばらくと勝手より太吉おくらなど飛來るほどにさのみも行かず椽先の柱のもとにびたりと坐して、勘忍して下され、私かわるう御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふては居りますけれど。むせび泣きの聲きこえ初めて断續の言葉その事とも聞わき難く、半か、げし軒ばの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

(五)

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も、其前もさらに異なる事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殻になりたれば、人の言へるは聞分くるよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔を夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣る方なかりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どんの末まで嬢さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髷にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊ばして學校がよひのお姿今も目に残りて、何時舊のやうに御平癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問はえらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬから其様な憎ていな事も言へるものゝ、三日交際をしたら植村様のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何んだと聞いた時にはお可愛想な事と涙がこぼれたもの、お嬢さまの身になつては辛からうではないか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つゝしんでお出遊ばすだけ身にしてみる事も深からう、あの親切な優しい方を斯う言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左様いへば植村様が無かつたら天下泰平に治まつたものを、あゝ浮世はつらいものだ